

令和3年度

WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業

拠点校 研究報告書

2022年3月31日

関西学院高等部

巻 頭 言

関西学院高等部

部長(校長) 枝川 豊

学校法人関西学院ならびに関西学院高等部では、2019年度(令和元年度)にWWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム構築支援事業の指定を受け取り組んで参りましたが、事業委託期間満了(2022年3月31日)にともない本事業を終えることになりました。この事業を終えるにあたり、関わっていただきました運営指導委員、検証委員、カリキュラムアドバイザー、そして関西学院の連携校となっていたいただいた学校長、並びにご担当の先生方には、多大なるご協力とご指導・ご尽力を賜り、本事業を無事終えることができますことに感謝申し上げます。

スーパーグローバルハイスクール(SGH)から足掛け8年に及ぶ事業で、本事業の委託期間の2年間はコロナ禍となり成し得なかったこともありましたが、SGH事業における反省点、未達成であった事柄について、WWL事業を通して改善を図り推し進めることができ、また深化させることができました。また、これまで文部科学省から採択された事業では英語科や社会科の教員が中心となって事業を担ってまいりましたが、教科の壁を越え、多くの教科の教員が携わることも実現できました。

WWL事業の採択にあたっての要件であった教科横断科目の設定や、この事業を通して教員の文理融合、STEAM教育という概念の理解が深まったことも一つの大きな成果と言えます。また、これまでとは異なる課題に向き合わざるを得ない状況や活動には、時間がかかり、負担は大きかったものの教員にとっては大きな研修の場となりました。この事業に関わる授業や活動に参加した生徒にとっても同様で、学校内にとどまらないフィールドでの様々な学習、探究の場が与えられ、資質、能力の両面での変容が顕著にあったことも大きな成果であります。なによりも生徒と教員が共に「探究」とは何かを模索しながら試行錯誤しているその姿に大きな意義があったと感じています。

また、SDGsへの取り組みについては学年単位でも取り組みが広がり、これまで本校で弱かった地域との連携にも広がりを持つことができたこと、さらに評価方法についても研究がなされ、今後の学習指導要領改訂にも合致した評価法の開発の端緒にも立つことができました。

3月末日をもって本事業は終了いたしますが、今後も自走しながら引き続き本事業を可能な形で続け、さらなる発展をきたいと考えておりますので、ご高覧の上、皆様のご意見、ご指導を賜りますようお願い申し上げます。

拠点校による2021年度の研究開発実施状況と本報告書の構成について ～指定3年目を迎えたWWL事業でのプログラム開発～

最終年度を迎えた拠点校関西学院高等部の研究開発実施状況は、昨年度に続き新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受けたものの、総括すると当初の計画を全て達成できた、むしろこの期間中にオンラインの可能性が拡大したことを受けて予想外に産み出されたことも鑑みると、当初の計画を越える実績を達成できたと考えている。

これまでの2年間はそれぞれ以下の実施目標のもと研究開発を実施してきた。

2019年度

1. SGH 事業での課題と反省を基本方針としたプランニング
2. 全ての教職員が同じゴールを見据えた上で、学校を変革するために本事業に取り組むためのマインドセットの醸成
3. 本事業の指定終了後も、人的にも経済的にも自走できるための体制づくり

2020年度

4. 高2生に新規開講する3つの教科横断型・PBL型科目「AI活用」「ハンズオンラーニング」「グローバルスタディ」の運営
5. 学校行事として高1・2年生全体の生徒と教員を巻き込んだ「ソーシャル探究」の実施
6. 生徒による運営及び連携校とのつながりを意識した諸行事「拠点校・連携校オンライン教員交流会」「オンライン生徒交流会」「オンライン国際会議Ⅰ (First International Online Meeting: IOM①)」の実施
7. 上記全てを通じて、探究のプロセスを評価していく新しい評価体制の開発

これらを踏まえた今年度は、総括としてこの2年間の各目標を継続・ブラッシュアップするだけでなく、自走することとなる来年度を意識して検証的な要素を組み込みながら実施した。

特に、上記4.の新規開講科目については、年次進行の結果、初めて全学年が対象となったことによる、連続する2年間を見据えての授業シラバスの検討や、初めて2・3年生合同の異学年授業展開等を試みた。

また、今年度も引き続き「外部との連携」による様々なプロジェクトを実現した。5.のソーシャル探究については、JTB社との協業により実現した。私学である本校がこれまで課題としていた「地域とのつながり」という部分に、各自治体との協業の元、「校外行事」「地域探究」という要素を組み込むことで多くの教員を巻き込み、実施することができた。更に、6.としては「教員交流会」「生徒交流会」は2回目、「国際会議」は2回目3回目と複数回実施することにより、コアとなる連携校とのつながりが、教員及び生徒にも出来、来年度以降を見据えたスムーズな運営を実現することができた。

このような研究の過程で、特に今年度は、適宜参加可能な運営指導委員・検証委員の先生方にご参加頂き、ご助言も頂いた上で、来年度からの自走に向けて各教員の意識合わせを行うことに重点を置いた。最終的に、予算措置も含めた教員の体制・組織作りと共に、担当者の合宿や集中会議を通して、来年度以降に向けての新たな意識合わせができ、今年度で文部科学省からの研究開発指定は終わるが、新たな気持ちで来年度からの本校らしい取り組みが実施していけると確信している。

以下に本報告書における報告内容の概要について記載する。

1. 研究開発対象となる本校生徒について

本校は2018年度までSGH事業の指定校であり、WWL事業は2019年度より年次進行で実施していた。よって昨年度までは「SGH事業で実施されていたプログラムを継続して受講する学年」と「WWL事業としての新規プログラムを受講する学年」が混在していたが、最終年度である今年度は全ての学年がWWL事業のプログラムを受講してきた生徒となった。

各学年が主に受講していきた WWL 事業のプログラムは以下ようになる。

(1) 高校 1 年生対象：

- ① WWL 事業として 2 年前より開講した教科横断型、PBL 型授業「グローバル探究-BASIC」の 3 年目の実践
- ② 学年行事：ソーシャル探究プログラム

(2) 高校 2 年生対象：

- ① WWL 事業として昨年度より新規に開講した教科横断型、PBL 型授業「グローバル探究 A (AI 活用)」「グローバル探究 B (ハズオラーニング)」「グローバル探究 C (グローバルステイ)」の実践
- ② 学年行事：ソーシャル探究プログラム

(3) 高校 3 年生対象：

- WWL 事業として今年度より新規に開講した教科横断型、PBL 型授業「グローバル探究 A (AI 活用アドバンス)」「グローバル探究 B (ハズオラーニングアドバンス)」「グローバル探究 C (グローバルステイアドバンス)」の実践
- 以上に加えて、「生徒交流会」や「国際会議」等の各行事については、学年を超えて全生徒を対象とした。

2. WWL 事業での重点目標

昨年度までの報告書からの再掲となるが、拠点校において WWL 事業を考える上で以下の目標を掲げている。

- (1) 学校全体として取り組み、全ての学校活動を巻き込む動きを作り上げること
- (2) 全教員で時代に即した教育目標の見直しを行い、育むべき力の明確化と共有を行うこと
- (3) 学校全体で、ICT を用いたアクティブラーニング型授業を推進する体制を作り上げること
- (4) 実践や実地研修（フィールドワーク）を踏まえた上での、より深い探究学習への挑戦
- (5) 読書科をはじめとする他教科との連携
- (6) 人権講座やホームルーム活動、クラブ活動、宿泊行事等、課外活動との連携
- (7) 探究学習の評価方法の確立
- (8) 継続的に外部の企業や有識者からアドバイスをもらえる体制の構築
- (9) すべての基盤となる、教員の働き方改革の推進

3. 本研究報告書に記載する研究内容と構成について

本報告書では、例年通り、下に記した研究内容 1-3 からなる各学年ごとの具体的取り組み報告を主として行うが、今年度に関しては 3 年間の総括としてまずは以下の諸報告を行う。

- (1) 来年度以降の自走を見据えた、カリキュラムアドバイザー及び検証委員の先生方からのご寄稿
- (2) 学校を超えて「生徒交流会」「国際会議」等の各種行事について、教員・生徒共にコアとなり活動して頂いた連携校の先生方からのご寄稿
- (3) 企業として各種プログラムを共に開発頂いた Classi 社及び JTB 社からのご寄稿
- (4) 海外交流アドバイザーからの、オンライン国際協働型授業及び国際会議の実施・評価についての報告

上記の後に今年度の活動実績として、学年を超えた「生徒交流会」や「国際会議」等各種行事・会議等の実施状況について報告し、最終的に下記の本事業の主となる研究内容 1-3 について報告を行う。

※1. と連動して、それぞれ学年ごとに研究内容 1-3 としている：

- 研究内容 1：高校 1 年生を対象とした、WWL 事業関連プログラム
- 研究内容 2：高校 2 年生を対象とした、WWL 事業関連プログラム
- 研究内容 3：高校 3 年生を対象とした、WWL 事業関連プログラム

最後に、これらの WWL 関連プログラムについては、初年度より IGS 社が提供する Ai-GROW テストの受検結果をもとに、コンピテンシーの成長を定量化することによる WWL 関連科目の教育効果の可視化と検証を目的とした分析を行ってきているが、その総括となる報告を行う。

内容

巻頭言	2
拠点校による2021年度の研究開発実施状況と本報告書の構成について	3
運営指導委員・検証委員・カリキュラムアドバイザーからの報告	7
WWLC 事業で得た成果の発展に向けて	7
連携校からのご寄稿	10
関西学院千里国際高等部	10
兵庫県立国際高等学校	12
啓明学院高等学校	14
大阪府立千里高等学校	15
連携機関からのご寄稿	16
Classi 株式会社	16
株式会社 JTB	19
海外交流アドバイザーとしてのオンライン国際協働型授業及び国際会議の実施・評価について	22
研究開発の活動実績一覧	31
1. 生徒の活動	31
2. 対外会議・他校への視察・研究会等参加	32
3. 事業連携校との取り組み	33
4. 成果普及	33
5. その他	33
WWLC 事業連携校オンライン教員交流会	34
WWL コンソーシアム構築支援事業 事業連携校 生徒交流会	35
WWL コンソーシアム構築支援事業 国際会議 Second International Online Meeting (IOM②)	37
WWL コンソーシアム構築支援事業 国際会議 Final International Online Meeting (IOM③)	38
関西学院高等部 WWLC 事業 運営指導委員会・検証委員会	39
WWL コンソーシアム構築支援事業拠点校・連携校拡大会議（事業終了報告会）	41
今年度の研究内容と評価の概要	42
【研究内容1の具体的な内容とその評価】	44
【1学年全体プログラム 「ソーシャル探究」について】	78
【研究内容2の具体的な内容とその評価】	81
必修選択 AI 活用	81
必須選択 ハンズオンラーニング	93
必修選択グローバルスタディ	120
【2学年全体プログラム 「ソーシャル探究」について】	150
【研究内容3の具体的な内容とその評価】	153
AI 活用アドバンスド	153
ハンズオンラーニングアドバンスド	162
グローバルスタディアドバンスド	190
コンピテンシーの成長を定量化することによる WWL 関連科目の教育効果の可視化と検証について	204

運営指導委員・検証委員・カリキュラムアドバイザーからの報告 WWLC 事業で得た成果の発展に向けて

カリキュラムアドバイザー：時任隼平（関西学院大学）

検証委員：泰山裕（鳴門教育大学）

検証委員：村上正行（大阪大学）

検証委員：梅本貴豊（京都外国語大学）

2019年から始まった3年間のWWLコンソーシアム構築支援事業が終了する。本稿ではカリキュラムアドバイザー及び検証委員として3年間この取り組みに関わる中で抱いた本事業成果の今後の発展に対する期待について説明する。

（1）探究活動と情報活用能力に着目して

検証委員：泰山裕（鳴門教育大学）

関西学院高等部の特徴は、探究を軸にしたカリキュラム構築である。「社会、社会の中の自己を知る」「社会的課題を掘り下げる」「課題解決のためのアクションを起こす」と課題を自分自身から社会へと広げながら、探究的な学びを深めていく。さらに各教科等における学びも探究的に進めており、世界のあらゆる事象を各教科等や、自己の視点から深く探究していくカリキュラムが設計されている。これはまさに来年度から全面実施される学習指導要領の形であり、それをいち早くカリキュラムとして具体化しているものである。そのような関西学院高等部に今後期待したいことは各取り組みにおける学びのつながり、いわゆるカリキュラム・マネジメントである。

具体的には、各教科等の探究と総合的な探究の時間を中心とした学際的な探究の関連性の整理を期待したい。学習目標には大きく分けて内容的な側面と方法的な側面がある。英語の文法や日本史の出来事などのような教科等のコンテンツや社会的課題についての知識などは内容的な側面である。社会的課題の解決に英語の知識が役に立つ、社会的課題の解決の中で得た知識が日本史で学ぶ内容につながり、より深く理解できるなどのような関連性が考えられる。一方、情報活用能力や探究の方法など、方法的なつながりも想定できる。課題をどのように設定するのか、必要な情報をどう集めるのか、集めた情報をどのように整理・分析するのか、そしてわかったことをどうまとめ、表現し、次につなげるのか、といった方法である。これは探究を繰り返す中で高度化していくことが想定できるが、基礎的な方法はいつ、どのタイミングでどれ位教えるのか、それが各教科等の学びとどのように繋がっていくのかなどが整理されることを期待したい。

今後、各教科等の様々な科目に「探究」の名が付き、「総合的な学習の時間」が「総合的な“探究”の時間」に名称が変更される学習指導要領の全面実施が目前に迫る中、それぞれの教科等が個々に探究するのではなく、内容的、方法的に関連づけながら探究が深まっていくことが想定される。そのような深まりをすでに実現している関西学院高等部には、ぜひそれらのカリキュラム・マネジメントの具体やその価値を示していただければと思う。

（2）効果検証と取り組みの見直しに着目して

検証委員：梅本貴豊（京都外国語大学）

関西学院高等部は、WWLCにおいて先進的なプロジェクトを展開し、精力的な取り組みを行ってきました。そし

て、このプロジェクトに参加した生徒は、不参加の生徒よりも高いコンピテンシーを示し、また、プロジェクトの参加の前後において多様なコンピテンシーの成長が認められています。つまりこれは、WWLC が生徒の学びや成長に大変効果的であったことを示しています。こういった素晴らしい成果を承知の上で、さらに期待することとして以下の2点について言及したいと思います。

1つ目は、WWLC の長期的な効果の検証です。つまり、今回のプロジェクトに参加した生徒が、進学先や就職先でどのような活躍をするのかを明らかにするという観点です。例えば、このプロジェクトに参加した生徒は、大学の授業やゼミなどでもより探究的で積極的な学びを行い、高い達成を示すかもしれません。または、就職先で独創的で創造的な発想を展開し、大きな成果を残すかもしれません。こういった長期的な視野に立った効果の検証は、WWLC の価値をさらに高めることにつながると考えられます。

そして、2つ目は、WWLC の継続的な見直しと、それに基づく進化・深化です。こういったプロジェクトは、ともすれば（去年度実施したことをそのまま）続けることだけが目的になってしまいます。そうではなく、良かった点にはきちんと目を向け、それをより深めていくことや、改善点を明らかにし、次につなげていくことが重要になります。こういった進化・深化には、これまで以上に外部機関との連携も必要になると考えられますので、リソースを開拓していくことも大きな課題になるかもしれません。しかしながら、何事も継続していくためには、教員のみなさんの負担感を低減することがもちろん必要だと考えられるため、内容の取捨選択が重要になると思います。

いろいろと書かせていただきましたが、WWLC の素晴らしい取り組みが多くの人に認知され、ポジティブな波及効果が生み出されていくことを切に願っています。

(3) 「生徒」「教員」「学校」それぞれの発展に着目して

検証委員 村上 正行 (大阪大学)

WWL コンソーシアム構築支援事業の拠点校として、関西学院高等部が3年間活動されてきたこと、本当にお疲れ様でした。2020年からは、コロナ禍の影響もあって、計画通りには進まなかったことも多くあったと思いますが、先生方も臨機応変に対応され、さまざまな成果が得られたと思います。私は検証委員として、高校生のみなさんの成果発表など、活動を拝見する機会をいただきましたが、とても熱心に取り組まれていることが伝わってきて、私自身ももっと頑張ろう、と思わされました。

これらの活動を、今後さらに発展させていくために考えてみたらいいのでは、ということ、生徒、教員、学校、それぞれの観点で書いてみたいと思います。

まず、生徒のみなさんには、探究活動をする上で、情報の扱い方について改めて考えてほしい、と思います。言うまでもなく、今の時代、インターネットで検索すれば、様々な情報が手に入ります。しかし、メディア・リテラシーという言葉もありますが、ネット上にある情報の真偽をどのように見定めるのかというのは、大変難しくなっています。また、twitterなどに代表されるソーシャルメディアでは、匿名による誹謗中傷の問題もあれば、偏った物の見方で情報を発信されていることもあります。様々なソースから得られた情報をどのように判断し、分析していくか、ということについて、学んでほしい、と思います。

教員のみなさんには、この探究活動を進めていく上で、生徒だけではなく、教員自身の学びや成長にどのようにつなげていくのか、ということを考えてもらいたいと思います。テーマも現在の問題を扱いますから、授業を設計、実践していくために、新しい知識も必要になると思います。また、他の教員がどのように授業を行っているのか、ということについて情報を共有し、議論を積み重ねていくことで、さまざまな学びがあると思います。その学びは、教科の授業などにも活かしていけると思いますので、ぜひ積極的に取り組んでいただきたいと思います。

学校としては、今回の拠点校としての経験を踏まえて、関西学院高等部の活動を広く公開していくことが重要だと考えます。3年間、活動を拝見して、とてもすばらしい取り組みだと思いましたし、他の学校や教員にとって参

考になる点が多数あると思います。本事業の中で行われていた、Web ページでの情報公開、実践報告会、学校の交流会など、無理のない範囲で、継続的に行っていただけるといいな、と思います。これからの関西学院高等部の活動に期待をしております。

今後校内外のワールドワイドな繋がりに向けて

カリキュラムアドバイザー 時任隼平（関西学院大学）

3人の検証委員の先生方からは、事業終了後の発展に向けて様々な有益な御指摘をいただいた。泰山検証委員からは、「探究を軸としたカリキュラム構築」の重要性を御指摘頂き、今後は他の科目との内容的・方法的繋がりに基づくカリキュラム・マネジメントの重要性について説明頂いた。村上検証委員からは、生徒が情報収集をする際の留意点と、探究を軸としたカリキュラムを展開していく際には教員自身も学び続ける重要性について御指摘を頂いた。梅本検証委員からは、大学生活や就業生活において本事業で得た学びがどのように生かされていくのかを長期的な視野に立って効果検証していく必要性を御指摘頂き、またその結果を事業後の活動の改善に繋げていくことの重要性についても御指摘頂いた。

これら3点の御指摘を踏まえ、カリキュラムアドバイザーとして事業終了後の関西学院高等部の取り組みに期待することは、「校内における水平・垂直のコミュニケーション」と「校外の学校との繋がり」の2点である。

「校内における水平・垂直のコミュニケーション」とは、関西学院高等部の教育目標について学年内での教科を横断したコミュニケーション（水平）及び学年を縦断したコミュニケーション（垂直）を意味している。本事業の2年目以降、授業をチームティーチングで担当している教員同士の授業に関する議論が何度も行われた。私自身も会議や宿泊合宿に参加し先生方と共に議論をさせて頂いたが、各々の教育観がぶつかり合い、その中で折衷案を見出そうとしている場面を何度も目にした。これは、お互いの授業実践に対して不干渉な立場をとる傾向にある日本の教員文化の中では極めて重要な取り組みであったと言える。村上検証委員が指摘するように、「他の教員がどのように授業を行っているのか」といった授業の実践の内容を共有することや、泰山検証委員が指摘する「各教科での取り組みが「内容的、方法的に関連づきながら探究が深まっていくこと」について議論を行うことで、今回3年間の事業で構築されたカリキュラムが適切に評価され、改善されていくことになる。今後も定期的・継続的な議論を積み重ね、カリキュラム・マネジメントに取り組んでいくことが求められる。

「校外の学校との繋がり」とは、探究活動の成果発表やそのプロセスにおいて学校内外の生徒・教員がオンラインや対面で意見交流や協働する機会を意味する。村上検証委員が「本事業の中で行われていた、Web ページでの情報公開、実践報告会、学校の交流会など無理のない範囲で、継続的に行っていただけるといいな、と思います。」と指摘するように本事業の成果を他校と共有しつつ、その交流の中で相互に刺激を与えあうような関係性をもつことでカリキュラムがより充実したものへとブラッシュアップされていく。例えば、国内他校生徒との合同授業や海外の学校との国際交流に継続的にチャレンジすることは、本事業を一過性で終わらせないための重要な取り組みになると言える。本事業では、新型コロナウイルスの影響で事業2年目以降はオンラインを取り入れた生徒・教員同士の交流を実現してきた。事業を通して明らかになったオンライン交流のメリット・デメリットを整理しつつ、事業終了後はワールドワイドな学びのコミュニティー作りに繋げていくことを期待する。

2021 年度 WWLC 連携校としての活動を終えて

関西学院千里国際高等部
教諭（WWLC 担当）菊池康貴

○本校についての基礎情報

関西学院千里国際中等部・高等部（通称：SOIS）は、大阪府箕面市に所在する学校法人関西学院の附属校で、帰国生の受け入れを目的の一つとしている。スクールモットーとして「知識と思いやりを持ち、創造力を駆使して世界に貢献する個人」を掲げており、「5つの Respect」という基本理念以外に一切の校則は存在しない。生徒の人数比としては1/3が一般生（日本人）、1/3が帰国生、1/3が外国籍となっており、また同一校舎内に「関西学院大阪インターナショナルスクール」を併設しており、一部の授業はインターナショナルスクールと合同で行われている。すなわち国内の学校としては類を見ないほど多様性に富んだ学校であり、使用言語も基本的には日本語と英語のバイリンガルで行われる。

本来、本校生徒の多くは短期海外留学プログラム等を利用して海外留学を行い、実際に現地の様子に触れることによって国際性を涵養していたが、今回のコロナ禍によってその多くが不可能となり、生徒が海外に触れる機会がほとんどが奪われてしまった。しかしながら本校は関西学院 WWLC の様々なプログラムに積極的に参加することで失われた海外交流の機会を取り戻すとともに、連携校として各行事の運営にも参画することで、生徒のリーダーシップ育成を図ることができた。いずれのプログラムにも生徒たちは進んで手を挙げて参加し、国内外の多くの同年代生徒との交流を行うことができた。以下、昨年度及び本年度における本校の取り組みとその感想について報告する。

○参加状況

この2年間における、各 WWLC 関連プログラムへの本校の参加状況は以下の通りである。

- ①WWL 生徒交流会 第1回 SDGs オンライン交流会（2020/11/21）：生徒1名参加
- ②WWL FIRST INTERNATIONAL ONLINE MEETING（2021/3/27）：生徒10名参加
- ③WWL SECOND INTERNATIONAL ONLINE MEETING（2021/6/24）：生徒3名参加
- ④関西学院世界市民明石塾（2021/8/4-5）：生徒5名参加
- ⑤WWL FINAL INTERNATIONAL ONLINE MEETING（2021/9/30）：生徒5名参加
- ⑥WWL 生徒交流会 第2回 SDGs オンライン交流会（2021/11/20）：生徒2名参加
- ⑦WWL・SGH×探究甲子園 2022（2022/3/19）：生徒5名参加予定

基本的には、全ての関連プログラムへ連携校として参画することができた。特にこのうち、①②③⑥に関しては本校生徒は実行委員の一員として企画の立ち上げ段階から関わり、当日の運営も担当した。本校生徒は課外活動としてボランティア団体等に所属している生徒も多く、プログラムの成功に向けて他校生徒と意欲的に交流し、また意見を発することが出来た。また本校生徒の多くは帰国生もしくは外国籍であり、ネイティブレベルの英語力を有する者も多い。英会話が得意な生徒は本番も率先して通訳を務めるなど、総じてプログラムに貢献することが出来たと考えている。

本事業にあたっては校内に専門委員会を立ち上げ、生徒募集から定例会議への参加、当日引率まで学校一丸となって動くことができた。また実際に活動した内容は学校のホームページなどで随時発信し、学校の広報と連携しながら情報発信を行うことができた。

○生徒の感想（抜粋）

・今回の関学 WWLC 生徒交流会を通して、私は自分の視野の狭さや持っている知識の小ささを身をもって感じました。2人の講師の方の講義や他校の人の発表を聞き、私達も発表をする中で自分が考えたことがない観点(あまり興味がない事, 知らなかった事)について沢山知ることができ、大きな刺激を受けることができました。

「SDGs」という言葉は今ではありきたりかもしれませんが、とても奥が深く、深刻且つ今では誰しもが考えるべき課題であるという事を実感すると共に、「その上で自分は何をしている・できているのか?何をすべきか?」という無力さと強い意志のようなものも得ることができた会だったと感じています。問題(今回だと SDGs)を解決するに当たっての策や案は、人それぞれ思うもので、考えが違うのは当たり前ですが、それをどう良い方向へと向けていくかは、個人の努力だけでなく団体や組織の単位できちんと「考動」するべきではないのかと思いました。他校の生徒との意見交流という貴重な経験ができてとても嬉しく思っています。自分がこれから沢山の事を経験していく上でも、今日の活動で学んだことをしっかりと活かしていきたいです。(高等部1年 WWL 生徒交流会参加)

・関西学院高等部の生徒や他校の生徒さんがとても優しく接してくれて、SISらしさを「SISにおけるSDGs」というテーマと絡めてプレゼンすることができました。SDGsに対する貴重なお話を大学の教授などから聞くことができ、改めてSDGsに対する意識と、どのような行動が具体的に必要であるのかを理解する貴重な時間となりました。コロナ禍ということもあり、オンライン上での企画ミーティングでうまくいかないこともありましたが、様々な意見をいただきながら他校の方々と協力して、高校生らしいイベント企画となり、とても貴重な経験となりました。今後もSDGsへの取り組みを継続し、今回の経験を生かして成長できたらなと思います。(高等部2年 WWL 生徒交流会参加)

・明石塾に通う前は、私たち若い世代がどう人類が直面している大きな問題に取り組めばよいのか、SDGs達成するため私たち若い世代はどう行動すればよいのかなど、様々な疑問を抱いていました。明石塾を通して印象に残っていたのは、坂野晶さんの講義でした。坂野晶さんの講義では、鳥が好きという事から、環境問題への関心を抱いたと話していました。特に印象に残ったのは、その「関心」を単なる関心に留めず、実際に行動したことです。具体的に、坂野晶さんは、徳島県上勝町でのリサイクル活動に携わっていましたし、今はゼロ・ウェイスト・ジャパンという社団法人で環境に優しい社会システムの形成に携わっており、私は非常に刺激を受けました。明石塾を終えて、私が抱いている「関心」を少しでも実行に移せる様な人間になりたいと思いました。また、明石先生が講義で仰っていた「人生においてできるだけ遠くをみる事が大切である一方、足元の問題から解決し、自分の理想や夢にむけて一步一步進んでいくことも重要である。昨今『グローバル』とよく言われるが、ローカルの視点も忘れてはならない。」という言葉をもットーとし、今私ができる、小さいな問題から解決し、自分の夢や理想に進んでいきたいと思いました。(高等部1年 明石塾参加)

○担当者としての感想

今回、担当者としてWWLCの各プログラムに参加させていただき、非常に有意義な活動であったと感じるとともに、多くの生徒たちの成長する姿を見ることができた。生徒たちは国内外の様々な同年代の高校生たちと触れ合う中で、日頃できない経験を積み重ねていった。時にはうまくいかないような場面もあったが、本校のモットーである「5つのRespect」を思い出し、壁を乗り越えることができたと思う。また、互いに得意なことを生かし、苦手なことをフォローし合うことで、リーダーシップとフォロワーシップを身につけることができたと感じる。総じて本事業を通し、参加生徒たちは自分たちの能力を大きく伸ばし、現在では1人1人が校内においてリーダーとして活躍している。このような事業に参画できたことを深く感謝申し上げるとともに、今後も継続事業に積極的に協力していきたい。

WWL コンソーシアム構築支援事業 寄稿文 International Online Meeting に参加して

WWL コンソーシアム構築支援事業連携校
兵庫県立国際高等学校
国際教育・事業部部長 清澤 芳寛

本校は、WWL コンソーシアム構築支援事業に連携校として関わり、拠点校である関西学院高等部と連携した活動の中で、国内外の高校生と協働し、高度な学びを得る貴重な機会を頂きました。令和3年3月27日に開催された第1回 International Online Meeting (IOM)から9月30日の第3回 IOM に至るまで運営委員として携わった本校生徒の取り組み・変化と本事業を通じた本校の歩みについて報告します。

責任感と使命感

令和3年1月頃に、IOM の生徒運営委員の募集の連絡を受け、本校からは6名が参加しました。本校では令和2年度より幾度か海外の高校や教育機関とオンライン交流を実施してきましたが、企画・運営の仕方は手探り状態で、生徒は教員が準備した場に参加することが中心でした。それゆえに、6名の生徒は実際の運営に関わることができ、世界の高校生と国際会議をどのように実施するかというグローバルリーダーシップを育む貴重な経験を積むことができました。とりわけ、IOM の運営・成功に向けて、一人ひとりが責任感と使命感を強く持ち、主体的・自主的に活動し、大きな成長を見せました。

運営会議に参加した翌日には本校の教室に生徒が集まり、前日の会議内容を擦り合わせ、どのように本校生全体に情報を下すのか頭を突き合わせて、意見を交換していました。このような大きなイベントを成功させるために、生徒たちにはイベントの全体像を捉えること、今行っていることの次の一手を考えることに意識するように指導してきました。次の運営委員会までにやるべきこと、漏れがないように情報を下すこと、担任の先生に相談したり、生徒同士で確認したり、順序立てて計画していくことこそリーダーシップの根幹になるものです。生徒たちの真剣な姿は、日常の授業とは一味も二味も違ったものでした。特に、上級生クラスの終礼へポスター片手に飛び込んで、参加者募集の告知をする緊張した、それでいて堂々とした表情は忘れられません。他校との連携や国際高校の代表という意識が、6名の生徒に強く責任感を持たせ、使命感を芽生えさせました。

柔軟な考え方

本事業に拠点校として関わられた先生方のご苦勞は大変なものだったと推察します。教員同士の会議の中で「走りながら考えている」との言葉が印象的でしたが、こういった新しいことを始める上で「走りながら考える」姿を見せ、それを身近で体験できたことは生徒にとって非常に大きな糧となったはずです。常に一步先のことをイメージしながらも、途中で変更された計画には柔軟に対応する姿勢を学びました。柔軟な考え方を持つこともリーダーシップの重要な要因です。

拠点校の先生方は運営会議に向けて、綿密に計画を立て、関係者・生徒とも打ち合わせをされていました。しかし、運営会議では計画通りに物事が進まないこともありました。本校生徒とは校内で「計画は綿密に、運用は柔軟に」という話をしていました。実際のところ、担当教員であった私も全てを把握していたわけではなく、事後になって生徒たちから変更の報告を受けたこともありました。機転を利かせ、自分たちで判断していたことを心強く感じました。

IOM の経験を生かして

参加した生徒と同様に私自身も非常に多くのことを学ぶ機会を得ました。コロナ禍で海外への訪問・受入が困難な状況の中、国際高校らしさの表現が制限される困難な状況を抱えていました。そのような中で、IOM に参加したことは、本校が活路を見出す一手となりました。

コロナ禍以前の本校には、年間を通して海外からの姉妹校や交流校の生徒の訪問・受入が盛んに行われており、

文字通り国際交流の盛んな活気に満ちた学校でした。まず真っ先に取り組んだことは、この IOM で体験したこと、感じたことを教員で共有することでした。海外渡航が困難な状況下でも、IOM のようなグローバルな教育活動を展開できることを知り、本校でもできることを探しました。運営委員の生徒のイキイキとした姿と IOM での素晴らしい活動を伝えることで、少しずつ教員や学校の理解が生まれてきました。また、参加した 6 名の生徒の活動の様子を広報したり、その経験を同級生に伝えたりするようにしました。グローバルな活動をする運営委員に刺激を受け、在校生の雰囲気が少しずつ変化してきたことを記憶しています。

「走りながら考えよう」の精神で、オンライン交流を企画し、6 名の生徒を中心に参加者を募集しました。初めの頃は 15 名の参加者もなかなか集まらず、教員が個別に生徒に声をかけて回ったのですが、回数を重ねる度に生徒による口コミが広がり、参加希望者は徐々に増えていきました。現在では募集当日に定員が埋まってしまうほどで、ウェイトリングリストに多数の生徒が名前を連ねるような状況です。オンライン交流・ミーティングを重ねるにつれて、生徒たちの意欲もますます高まってき、今年度は本校でのオンラインミーティング元年となりました。

3 月に開催された IOM 以降、自校でのオンライン交流・ミーティング開拓は進み、今では多くの教員が関心を持ち、外国語や保健など教科を活用した実施、総合的な探究の時間での実施、希望者による放課後や週末での実施など広がりを見せています。現在は 13 の国と地域、計 33 回の実施を数えるまでになりました。

今後も海外の姉妹校や交流校とのオンライン交流・ミーティングを重ねていく予定です。原稿を執筆している 3 月中には、IOM での経験を生かして、代表生徒同士で日程調整から企画・運営を行なうことにもチャレンジしていく予定です。本事業の IOM を通して、参加した生徒たちは大きな成長を見せました。その経験を活かし、生徒が主体的にグローバルな視点で活動することを学校としてサポートするのが、国際教育・事業部の役割です。本事業に連携校として関わり培った経験を、裾野を広げて紡いでいきたいと考えています。

今回、このように大きな事業に関わる機会を頂き、拠点校の関西学院高等部の先生方をはじめ、生徒の皆さん、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。



第 1 回 International Online Meeting 運営委員の本校生徒

「連携校としての所感」

啓明学院高等学校
教頭 櫻間 敏夫

本校は 2015 年度から 2019 年度までの 5 年間の SGH 指定校としての取り組みを終え、2020 年度から 2 年間で、WWL コンソーシアム構築支援事業における連携校として参加させていただきました。学校法人関西学院および関西学院高等部の皆様にはたいへんお世話になりましたことを、心から感謝申し上げます。この 2 年間で、コロナ禍での活動で、なかなか対面での交流・事業参加はできませんでしたが、オンラインを通じて、とても有意義な経験をさせていただきました。

本校の生徒たちは、2020 年度、2021 年度の「WWL 生徒交流会」、「WWL/SGH 探究甲子園」に参加させていただきました。参加各校の生徒たちとの交流を通して、また、時にはプロジェクト運営に関わりディスカッションを重ねることによって、自分を知り、他人を知り、世界を知る貴重な機会となっていたのは間違いありません。参加した生徒たちは、かねてより好奇心を持ち、社会課題に目を向け、自分自身で考えて意見を持つ者が多いのですが、これらの活動によって、さらに意欲を高めています。校内で行われている英語スピーチコンテストや英語ディベートコンテストに学年代表として参加し、SDGs をテーマにした発表を行いました。また、2021 年夏に本校が企画した「サマープロジェクト」において「オンライン多文化共生プログラム」(5 日間延べ 19 時間、フィリピンとの交流)にも積極的に参加しました。「ハーバード大学×関西学院大学 交流事業」(主催：関西学院大学高大接続センター)等のいろいろな国際交流プログラムに参加するなど、波及効果が大いにありました。ESS 部員の多くが WWL プログラムに参加し、2021 年度の ESS ユニオン シナリオコンテストで第 3 位を獲得し、同プレゼンテーションコンテストでは準優勝を果たすことができました。関西学院大学に進学した後も、国際学部や総合政策学部をはじめ、各学部において積極的な大学生活を行っている卒業生が多くおります。

この 2 年間で、学校生活において様々な制限・制約がある中、学校行事や課外活動、学校間交流・国際交流が規模縮小や内容変更、時には中止となり、生徒たちの成長の場が限られる場合があります。しかし、本校では、知恵を出し合い協力し合い、できる限りの工夫を施すことによって、少しでも多くの活動の場を提供できるように取り組んでおります。関西学院高等部が拠点校として、各連携校に交流の場を与えてくださり、リードしてくださったこと、たいへん意義深いものでした。コロナ禍の厳しい状況下でも、これだけの交流ができ、ディスカッションができ、いろいろな考え方・智慧に触れる機会を持つことができたことによって、参加生徒たちは成長し、ソーシャルアントレプレナーシップのマインドを持ったリーダーとして、校内外で周囲に良き影響を与えてくれました。

まだまだコロナ禍が続きます。厳しい状況の中でも「今できること」「今なすべきこと」「今やらなければならないこと」を見据え、今回の交流を礎として、今後も良き交流を踏まえての活動を望んでおります。生徒たちのさらなるつながりを持ちながら、今後ともよろしく願いいたします。

貴 AL ネットワークに連携校として参加させていただくことで、生徒が探究力を伸ばし、教員が指導力を高めるための機会を様々提供していただきました。感謝しております。

生徒交流会では、お互いの研究について質問と答えを出し合いながら丁寧に交流できたのがよかったです。他の学校の生徒も社会課題について研究に取り組んでいることを知り、直接言葉を交わすことで、参加した生徒たちは「課題研究に取り組んでいるのは自分たちだけではないのだ」、「あのようなテーマ設定をしている人もいるのだ」と視野を広げたり、刺激を受けたりしていました。生徒の皆さんを中心に運営を進められていたことも印象的でした。運営に当たられた生徒さんたちは経験から多くのことを学ばれたことだと思います。自校でもこのような生徒中心の運営を広げるべきだと感じました。

また、関西学院大学をはじめとする先生方から提供していただいた講演や講座、コメントもありがたいものでした。大学との直接のつながりを持たない本校では実現困難な機会でした。自分たちが行っている課題研究が学問的には、あるいは社会的にはどんな意味を持っているのかを第一線の専門家から直接お話ししていただくことによって、生徒たちは研究の意味をより広く、深く理解するだけでなく、将来の大学・学部選択や仕事の選択についてもイメージが広がったことと確信しています。

教員交流会では課題研究を進める体制や評価の仕方について、我々教員が丁寧な情報交換をすることができました。全国レベルではなく地域レベルで継続して情報交換ができる場があることの大切さを感じました。有用なヒントをいただけるという実際的なことだけではなく、同じ課題に取り組んでいる方の存在を感じることで勇気づけられるという側面もありました。

最後に探究甲子園について書かせていただきます。連携校に参加が限定されているものではありませんが、SGH 事業終了後も継続していただき感謝しておりました。この発表会では生徒が1年をかけて進めてきた研究を立派な舞台で多くの方に聞いていただくとともに、大学の先生方から質問やコメントをいただくことができました。生徒たちは2月までにまとめた課題研究を再度見直し磨きをかけて臨めるという点で3月中旬という開催時期の設定もありがたいものでした。校内でも発表の機会を複数設定し、その度ごとに研究の質が向上するのですが、このような「晴れの舞台」が生徒の向上心を高める効果や、参加の経験が生徒にもたらす自信には格別のものでありました。また、生徒を指導する教員にとっては、課題研究指導において押さえるべき点が十分に指導できているかを発表会前に再度点検し、また、当日の他校生徒の発表からは次年度の指導に向けての新たな目標を見出す機会となっていました。

以上のように大変有意義な機会を提供していただきました。今後も何らかの形で繋がりを持たせていただければありがたいと考えております。ご検討いただければ幸いです。

ておかなければならないことなどを知ることができたため。(三重・公立)

1.3 研究会を受けての考察

2020年度はオフラインでの開催、2021年度はオンラインの開催だったが、2020年度は200人を超える集客、2021年度は400人を超える申し込みと全国的に探究学習×ICT教育のニーズの高さを感じる研究会となった。

参加校の声としては、探究学習をこれから始めるという学校が多く悩んでいる学校も多く情報収集として参加している学校が多かった。その中で両イベント共に満足度がとても高く、関西学院高等部の取り組みが全国の多くの学校にヒントやきっかけを与える研究会となった。

関西学院高等部の活動で特に他校から評価されていたポイントは、

- ① 探究成果をゴールにした学びはなく、生徒主体で考えさせることを最大の目的にした活動であること
 - ② 生徒の学びを最大化することを目的に、教員の立ち位置（コーチング）と評価指標の目線合わせ・アップデートを丁寧に行っていること
 - ③ 学校に閉じた活動ではなく、大学・企業・他校との連携や学びあいの場を積極的に設定していること
- の上記3点が挙げられると思う。

特に①の生徒の学びについては、実際に生徒の取り組みについて発表いただく機会があったが、探究を進める際の目的意識の醸成→課題を特定し掘り下げる工程→チームで活動や課題を落とし込む工程→外部や教員とも連携しながら成果にまとめていく工程 などを通じた生徒の学びや意識の変化を実際のポートフォリオをベースに話してもらえた（参考：<https://classi.jp/event/closed/post-3009/>）

内容が探究の枠組に留まらず、ビジネスの場面で必要となる社会人基礎力にも近いような経験をしていることの学びや熱量が多くの参加校へ伝わっていたと思う。

また①を実現するための教員間の連携は、多くの学校がアンケートの中でできていないと答える全国的な課題項目であったが、関西学院高等部の場合、生徒の学びが最大化するようなコーチング的な先生方の関与+生徒の学びを深めるための評価・振り返りの研究を通じて、組織的かつ目的に沿う形で教員間の連携を実現していることが探究学習の成果に繋がっているように思えた。

ICT活用や成果発表ばかりにどうしても目が行ってしまうのと、他研究会等では綺麗な部分しか見えないからこそ本研究会を通じて関西学院高等部が苦労してきた点からプロセスの部分も含めてオープンに発信してくれたことは多くの学校にとっての学びになったように思う。

2. 共同での検証・実証研究

2.1 手書き文書の紙ポートフォリオの取り込み開発（別途・2020年度報告書に詳細記載）

●概要

- ・Classi2020年紙ポートフォリオ取り込み機能B版開発にむけた検証
- ・貴校の探究学習時に活用いただいた紙ポートフォリオの取り込みを弊社で実験的にを行い精度や活用の流れを検証
- ・貴校で利用している探究学習の振り返りフォーマットをB版の開発に活用

●検証手順・内容

- ・貴校が活用いただいている紙ポートフォリオフォームについて協議
- ・取り込む仕様を検討し、Classi振り返りフォームを開発
- ・12月に実施された探究学習の振り返りを実施（33人64枚を回収→取り込み、検証の実施）

●考察

当初は、手書きの紙の取り込みを通じて、より紙の良さと ICT の良さを生かした技術機能を開発する予定だった。関西学院高等部の検証を通じて、技術的なもの以上にこういったフォーマットで振り返りを入力し、気づきを与えるか？という内容面の部分が大きなポイントになるという気づきの多い検証となった。関西学院高等部の学びを入力しているポートフォリオ用紙とフォーマットをより多くの学校で使えるように検証する等の活動もセットで行えた。これは関西学院高等部の先生方・生徒様のご協力により、とても具体的な検討まで広がった。

結果として取り込みの技術精度向上から実際の運用・活用まで進めることができたものの、①全国の高校が使っているコピー機やハード面の問題 ②ポートフォリオ内にある個人情報の登録やリスク等の対応負荷 などの理由から現状の開発は見送りになっているが、今後に向けて継続的に検討していきたい。

2.2 学校を越えた学びあい（検証中）

●概要

- ・本来 Classi は学校の中で活用いただく形式をとっている。※他校生徒同士では繋がれない
- ・WWL 高校という架空の学校環境を作り生徒同士で学びあう実証研究
- ・ZOOM 等の同期的なコミュニケーションと Classi を使った非同期なコミュニケーションを併用



●考察

ICT 化が進む世の中で、令和の日本型教育の中で伝えられているのは、個別最適な学びと協働的な学びである。この中で協働的な学びは、校内の生徒同士の学びあいという枠組みだけでなく、社会に開かれた学びを意図し、学校を越えて学びあうことも含めた広がりを持っている。

今回関西学院高等部が主となり活動した他校同士での学びあい PBL 学習は、まさに今後令和の日本型教育の中で目指している教育の形に近いと感じる。校内の中で進めるプロジェクト学習と違い、他校や企業大学など外部の異文化を取り入れるマインドやその中でのコミュニケーションと気づきは多くの学びに繋がると思う。一方で上記の学びを実現するにあたり、ZOOM 等の遠隔コミュニケーションツールと SNS の普及より生徒が外部繋がることでのリスクも増えている実態がある。

今回のプロジェクトは、同期的なコミュニケーションは ZOOM・非同期の連絡は閉じないコミュニケーションができるように Classi を使った先生方が見守っている安心の中でのコミュニケーションツールでの活動という形は今後増えていく可能性があると感じている。

実際に生徒達の投稿を見てみると活動の中での気づきの共有や同期的なコミュニケーションでは連絡できないようなやり取りや資料の共有などを先生方が見ている Classi の中で行っている過程を見るとこのやり取り含めた全てが活動のポートフォリオになっているように感じる。

こういった検証を通じて、引き続き関西学院高等部の探究学習から学ばせてもらいながら、今後 Classi として学校を越えた学びの場やツールとしての提供についても検討できればと考えている。

この度は関西学院高等部様へ校外ホームルームの行事提案で『地域課題解決プログラム』をご提案させていただき、阪神地区を中心とした8つの行政からそれぞれが持っている地域の課題を提供してもらいその課題に対して関西学院高等部様の生徒さんたちがフィールドワークを行い自分たちの目で見て実際に触れて課題解決提案をプレゼンテーションしてもらおうといった内容を実施いたしました。

まずご提案のきっかけですが学校様より校外ホームルームの相談を頂き、生徒さんにどのような活動を体験させたいかを数回ヒアリングを行いました。学校様からはキーワードとして『SDGs、チームビルディング、探究学習』といったキーワードを頂きました。またコロナ過ということもありコロナ過の中でも実施が可能なプログラムが好ましいのと現在は3年間の行事に連続性がなく1つ1つの行事が点で終わってしまっているとの課題も頂きました。頂いたキーワードや過去の実施内容、学校様のホームページを拝見し、学校様が現在どのような取り組みを行っているかを確認し学校分析を行いました。

またJTB神戸支店で『関学セブンスチーム』を結成し（7名いたので）ディスカッションを繰り返し意見を出し合い、どのような内容が関学生にあっているかを議論しました。

その中でJTBとしては

- 1年生では1日はSDGsを学ぶ、1日はチームでできる体験（チームビルディング）
- 2年生ではSDGsを掘り下げた内容で行政より課題をもらいフィールドワークを行い地域の課題を解決していくプログラムを提案させていただきました。

内容としては1年生でSDGsとは何かに触れ、チーム活動は兵庫県の相生市の伝統行事である『ペーロン体験』を行い1艘に約20名ほどが乗船しクラスの力を合わせてクラス対抗レースなどを行いクラスの輪を広げる目的でした（残念ながらコロナ過により実施はできませんでした）

また2年生ではSDGsの意味をもっと掘り下げて阪神地区の行政より課題をもらい実際に自分たちが住んでいる地域の課題を生徒さん達で解決提案をしてもらうプログラムです。このプログラムを実施、提案させていただいた背景には2021年2月にJTB内の支店統合が関係しております。今まで教育旅行の担当をしていた支店と、行政・法人を担当していた支店が合併することにより、行政の営業担当の人脈を生かし西宮市、芦屋市、尼崎市、宝塚市、伊丹市、川西市、三田市、猪名川町の担当へ学校様の取り組み内容やそれぞれ行政が抱えている課題を頂くことができました。JTBとしても新しい発想で初めての取り組みであったため、繋ぎ合わせることは大変でしたが無事にすべてのプログラムが終わり生徒さんたちのプレゼンテーションを聞かせていただき、なかなか難しいお題もあった中でよく考え、調べてくださって課題解決提案は非常にいいものになっていたと感じております。行政の担当の方々も自分たちにはない発想があり良かったとお言葉を頂いております。

また今後ですが現在の1年生が同じ内容で実施を検討いただいていると聞いております。

21年度は初めての実施でうまくいかなかった部分をありましたが21年度の実施内容を踏まえ内容をブラッシュアップしプログラム内容が向上するように努めてまいります。

最後になりますがJTBとしては1年生～3年生までの行事に連続性があり点と点をしっかり線で結んでいける行事提案ができればと考えております。

関西学院高等部 2 年生地域探究フィールドワークを終えて

2022 年 3 月 12 日

JTB 神戸支店 鷲見匡紀

【提案背景】

単なる遠足感覚や遊び感覚ではない、探究的な提案を求められた中で、貴校の生徒様の活動能力の高さを考慮し、他校では実施していない新たな学外行事を考案。弊社「地域活性化室」と「教育事業」の官学の連携により、実施可能と考え、弊社の人脈を活かし、兵庫県産業労働部→阪神北県民局管轄 5 市町（三田市・宝塚市・伊丹市・川西市・猪名川町）と阪神南県民センター 3 市町（尼崎市・西宮市・芦屋市）の担当部署との連携企画にて実施に至る。また、文科省も「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」として、地域との協働による活動を学校の教育活動として明確化することを提唱している中で、地域に密着した取り組みを推奨している弊社としても、学校と地域をつなぐことにより、地域課題の解決等を通じた学習カリキュラムを構築していきたいと考えていたため、貴校への提案に至った。

【感想：実施前】

- ・特にコロナ関係で授業日数確保の関係もあると思うが、フィールドワーク実施までに、主旨、目的や地域課題点、レポート発表までのゴールを、我々サイドや外部講師からもう少し生徒へ明確にお伝えできればと感じた。
- ・各市町の課題を提出後は、生徒のグループ別課題研究などの事前準備時間の確保はやはり必要だと思う。
- ・海外への興味は多くの生徒が抱えている中で、地元地域のことは意外と外国人に語れないと感じている。逆を言えば留学生は、国や地元のことをしっかりと説明できる方が多い。こういった点でも意義のある取り組みであったと感じる。

【感想：実施後】

- ・コロナ感染拡大により、度重なる延期（6月→9月→12月）により、8市町との調整は大変であったが、何とか2学年先生方も諦めずに実施していただいたことが何よりの感謝であり、弊社も各自治体担当者も嬉しく思っている。
- ・プレゼン発表では、実際に採用を考えてみたいと言っていた自治体担当者もいた。
- ・高校生（若者）の目線ということがポイントで、普段勤務している自治体の方々では、思いつかない斬新な発想力があつた。SNS 戦略や、利害関係を持たない高校生ならではの意見は大変参考になった。大人が思いつかない発想や考えがあり、良かったと思う。
- ・短時間の実地研修では少々無理があつた感じもする。2日間に跨いでのフィールドワークは難しいと思うが、実施当日は、せめて 9:00~16:00 くらいまで、生徒の活動時間が必要であったように感じる。
- ・学校内では経験できない、普段気づかなかつた地域の課題や魅力を発見できた生徒もいるので、この取り組みは良かったと感じる。
- ・選抜プレゼン発表は、我々が想像していた以上に、完成度の高い発表であった。

【最後に】

地域課題と言っても、観光課題に限らず、少子高齢化、交通課題、医療体制など多岐に渡りますが、高校生が取っ付きやすい観光課題は、楽しく探究フィールドワークができるので、良かったと考えます。SDGs 目標 11 の「住み続けられるまちづくりを」にも繋がり、こういった地域課題の取り組みは、貴校に提案して成功であったと考えます。

広域に渡る各市町での探究フィールドワークであったため、現地での滞在時間を考えると、今後、エリアを縮小しても良いかも知れません。ただ、各自治体も楽しみにされていたことや、課題（お題目）を減らすと同様な内容のレポートも増えるかもしれない点が悩ましく思います。

今後、さらなる発展型として、ビッグデータを利用「観光予報 DS(Data Science)」 アプリ等を使って仲間と協働して地域の魅力や課題を深掘りし、未来に向けた課題やアイデアを考え、ポスターにまとめて発表することも良いかも知れません。

また、意欲的に取り組む班があれば、観光甲子園（全国の高校生が180秒観光動画の出来栄を競うコンテスト）に応募することも、高校生活の活動としてお勧めできます。

<https://www.nexttourism-contest.jp/>

生徒の皆様が、詳しいレポートを提出して下さい、各自治体へフィードバックすることができました。

ご協力いただき、本当に有難うございました。

2021年度に実施したグローバルスタディ授業では、海外生とミックスで構成された8人から10人の少人数グループで協同で企画したプロジェクトを推し進める。オンライン国際会議（International Online Meeting：IOM）では、インド、インドネシア、エジプト、フィリピンの高校生と日本含めた計5カ国間でコロナ禍での生活の変化や、SDGsについて高校生だからできることについてディスカッションする国際会議を行った。高校生間で企画したプロジェクトの自走は、2点の軸（①言語の壁について、②企画進行のナビゲーション）に焦点を当てて、担当教諭である三木先生、小島先生とグローバルスタディ授業を展開、IOMでは、三木先生、徳田先生、泉川先生、小島先生と共同で実施いたしました。言語の壁については、小島先生や泉川先生、所属するネイティブ講師による英語に関する質疑応答や宿題形式でのコミュニケーションにより英語面の事前準備を解消した他、各チームに大学生のラーニングアシスタントを配置した。ラーニングアシスタントは、私が所有するWith The World社に所属する大学生で、週に1回必要なトレーニングを受けた者が全国からリモートで参加する。このラーニングアシスタントの役割がディスカッション時にリアルタイムで生徒の英語補助を務めることで、意思疎通を図りやすい環境を整えた。②企画進行のナビゲーションについては、担当教諭によるレクチャーをもとに、大枠の方向性を生徒とラーニングアシスタントは把握し、ディスカッションの方向性が空中分解しないよう各チームに付くラーニングアシスタントが現場での細かな軌道修正などナビゲーションを行うことで、生徒主導型で企画進行を行うことが達成できたと振り返る。ここでは、本グローバルスタディやIOMにおける受講生徒のアンケートやラーニングアシスタントによるフィードバックを振り返り、どのような学習効果があったかを見ていくことにする。

【概要】

グローバルスタディ授業の内、9回にわたるフィリピンの高校生との交流を通して、生徒たちは1、2年次に学び取り組んできた社会問題について学びを深めた。生徒たちは授業内で行っていた環境問題に対する活動について、海外生の知見を取り入れながら今後自分たちに何ができるかを考え、実行に移した。

また、グローバルスタディやIOMを含め、オンラインでの交流を通して、日本のみでなく、インド、インドネシア、エジプト、フィリピンの環境問題や社会課題に触れることで、より多面的に問題を捉え、柔軟な解決案を考えるきっかけを創出した。

・プロジェクトに関して

プログラムを通じて生徒たちは、海外生徒と交流しながら学ぶことで、日本以外の状況について知識を得るだけでなく、異なる視点の意見を交えて理解を深めることができた。また、生徒主体でプロジェクトを進めていく中で、周りの人を巻き込むことの難しさに直面したことから、環境問題への関心の低さに気づき、その原因や改善方法についても意識を向けることができた。

・自分自身に関して

①自分で考える力（思考力）、②コミュニケーション・英語力、③積極性、④チームワークの4点で自分の変化を実感していることがわかった。

また、プログラム後期で実施したルーブリック表による「チャレンジ精神」、「他者・異文化への理解」に関する4段階評価においても、自身の成長を実感していることがわかった。

生徒が提出した最終レポートより、テーマに関する学習に関して①うまくいったこと、②苦労した点・新たな気づきの2つの観点で感じたことについての具体的な記述/回答を抜粋した。

その結果、それぞれの観点での生徒の認識は以下のようにまとめられる。

①上手くいった点：

海外生徒と交流しながら学ぶことで、日本以外の状況について知識を得るだけでなく、異なる視点の意見を交えて理解を深めることができた。

②苦労した点・新たな気づき：

環境問題やその他社会課題への関心の低さに気づき、その原因や改善方法についても意識を向けることができた。

【プロジェクトを通じてうまく行ったことについての回答（回答抜粋）】

- プロジェクトを共に進めていくことで、フィリピンの現状(地球温暖化問題、アジアの中でも喫煙者の割合がとて多く、日本と異なりタバコ市場が異なる)など、知らなかったことをたくさん知ることができ、また知るだけではなく互いにディスカッションを通じてその問題らについて深く議論することも出来ました。
- ケナフという植物は最初私たちも知らないくらい認知度の低い植物だったのですが、今では周りの友達からケナフという言葉が聞こえてくるようになったのである程度認知度は高まっており地球温暖化を知らない人に興味を持ってもらうという目的に少し近づけたのではないかなと思います。
- 新型コロナウイルス感染症の流行が収束したら、一度フィリピン等に行き温暖化によるゴミ山や漁業への影響を自分の目で確かめてみたいと考えています。

【プロジェクトを通じて苦労した点・新たな気づきについての回答（回答抜粋）】

- 日本人の地球温暖化に対する、興味、意欲は低いのだなと思いました。
- 今1番問題であるのは世界の状況について知らない人、関心がない人、自分がしなければならないことを理解していない人が世の中にはまだ溢れているということだと感じました。
- 私は2年生の学びで、関学生の温暖化に対する意識の低さに問題を感じました。アッセンブリーや礼拝で案内をしても聞く耳を持たず、Classiでアンケートを流せば未回答が多数。せっかく文科省から認定を受け WWLC の授業を取り入れているのに、受講者のみが社会問題について考えるばかりではいけないと思いました。
- 地球温暖化が深刻だと知っていても、「なぜ自分だけが取り組まないといけないのか」、や「みんなだって沢山消費している」、「自分一人がしたところで意味がない」と多くの人言います。関西学院高等部でも WWLC 受講者とそうではない人の中には大きな溝があるように思います。「何故、あんなに真面目に地球温暖化について取り組んでいるのか」と嘲笑う人もいます。それらは、空気を読むことによってそのようなことが起きるのだと思います。なので、地球温暖化を始め多くの問題を解決するには、身の回りから空気を作っていくべきだと思いました。
- 日本の教育は知識をつける授業や受験に合格するための勉強が中心だと思っています。関学の中でも WWLC 受講生以外の生徒で社会問題に関心がある人は少ないように感じています。環境問題だけ

でなく選挙の投票率の低さからもわかる政治情勢や社会問題への関心の低さなど、日本で不自由に感じる事が少ない私たちだからこそ関心を持つ必要があると私は思います。

- 人は何かを知ることを行なわなければ自分の意見を持つことも考えを深めることもできません。また人は関心を持って物事と向き合わなければ知識を増やすこともできません。日本人は他国に比べ温暖化に対する危機感がとても低いこともフィリピンとの交流などを通して知ることができました。それは今の日本人が「自分はもう知っているから」や「自分には関係のない話だから」という理由で興味関心を持って温暖化という問題に向き合っていないからだと考えます。
- 「偏見」という問題点も見えてきました。「環境対策は真面目な人がすること」だと思い込んでいる人が特に日本にはたくさんいるように感じます。環境問題解決に取り組めば今の生活の質より下がったものになってしまう、環境に優しい製品はデザインが後回しにされがちでおしゃれなものやカッコいい、可愛いものがない、といった声もよく耳にします。

【身についたスキル・自分の成長に関する自己評価について】

生徒が提出した最終レポートより、生徒自身に身についたスキル・成長した部分についての具体的な記述/回答を抜粋した。

その結果、①自分で考える力（思考力）、②コミュニケーション・英語力、③積極性、④チームワークの4点で自分の変化を実感していることがわかった。

【自分で考える力（思考力）（回答抜粋）】

- 「考える」という癖がなかった私が、企画をしたりアイデアを出すまでに成長しました。優柔不断で何でも人任せだったのに、自分で「考える」ようになりました。
- 地球温暖化やそれ以外の事柄についても、ただ暗記するだけではなく、なぜという疑問を持つことができるようになりました。それによって、身の回りの様々なことにアンテナを張って生活できるようになっていると感じます。例えば、今まであまり興味感心がなかった政治やプログラミングなど学びたい、知りたいと思うようになり、両親と政治や将来について話す機会が増えたと実感しています。そのほかにも、積極的に何か気になったものは取り組んでみる姿勢が身につきました。
- 課題を改善していく中でその課題にストイックに取り組むことができた。その課題に対しての改善案に色んな目線で見ている「もしこの疑問を出されたらどうするのか」と細部までこだわり抜き少しの妥協も許したくない。その結果、常に疑問が浮かび、その疑問を解決しにいく好奇心。そして色んな目線で見ても完璧なものを作りたい情熱さが癖づけられた結果だと思う。
- 以前までは、周りとのやり方が違うことを恥じたり不安がったり、“目標”というよりは、先生に高く評価された人を“模範”にしなければ。あのと同じようにやらなければ。という思考でしかありませんでした。しかし、GSの授業を通して、その考えは間違いだったと気がつきました。その評価は、一人の先生の、一人の人の価値観やモノの見方による評価なのであって、人類全体の意見を反映しているわけでもなんでもないので。
- 中学までは暗記で終わっていたものが、高校では理解するに変わりました。しかしこの授業ではその理解した知識を使って何かに繋がられないか、ともう一段階踏み込んだ授業で正直私は何が正解なのかはわからず終わってしまいました。

【コミュニケーション・英語力（回答抜粋）】

- 「伝える」とは自分ではなく、相手がそれを理解してくれたことがわかってはじめて「伝わった」になると学びました。
- 一方的に伝えるのではなく他の人の目線に立ってアクションを考えていきたいです。
- 特に初等部への出前授業での表現力です。普段、同世代に人達に伝えるよりも、内容を噛み砕きイラストを使って紙芝居形式で説明しました。言葉の語尾、問いかけに工夫をしました。
- フィリピンの人たちと共同で企画を進めることで言語がちがう人と喋ることやズームでの交流の難しさを知ることができました。
- 積極的に意見を言う、英語を使うということに以前よりも自信を持てるようになりました。「とにかく言うしてみる」というチャレンジ精神が身についたと思います。
自分では英語が話せる方だと思っていたのですが、いざ温暖化に関して意見するとなると、何も思い浮かばなかったことから、自分の能力が日常会話レベルでしかなく、世界の重要な問題について話すまでには届いていないということを自覚しました。このような経験から、向上心に繋がり、より英語力を伸ばしたいという気持ちが強くなりました。
- 自分の英語力の低さを改めて痛感しました。今までアメリカ英語にしか慣れておらず、フィリピンの生徒たちが話す英語を聞き取ることに苦労したので、事前に学んでおくべきだったと反省しています。しかし、英語がうまく通じなくても、共通の趣味などがあれば打ち解けられるということに気づきました
- 私は英語が苦手なListening, Reading, Writing, Speaking 全てにおいて苦手でした。ですので、初めて「海外生徒と一緒に活動します。」「スカイプで話して下さい。」と言われたときは本当に嫌で不安でいっぱいでした。今になってその不安が消えたという訳ではありません。ですが、楽しいという感情を持つことができたし、自分の英語力でもどうにか伝えようとしたら伝わるのだと思うことができました。時には全く伝わらず、「それは無理矢理過ぎるな」と先生に注意された時もありましたが、上手な会話ができなくてもリアクションや気持ちでコミュニケーションをとることができたのでよかったなと思います。

【積極性（回答抜粋）】

- 探究で積極性と判断力が磨かれたと思う。私は今までなら授業をただ聞いてこの二つをどうしても疎かにしていましたが外国人とのコミュニケーションの楽しさに気づき、自分が抱いた小さな疑問に対しても積極的に手を挙げ発言することを意識付けることができそうすることで自分自身に自信がつき、英語で質問された時に「どうすれば相手に伝えやすいか」を常に考えることでそれがやがて癖付けされ瞬時の判断力が身につきました。
- 数多くのプレゼンテーションを通して、前に出て話すのが苦手だったのですが、自分の考えを誰かに向かって発信できるくらいになりました。
- 2年生が始まった当初はディスカッションで自分の意見を言うのが恥ずかしかったり、自信が無く、本当は自分の中で思っていることがあるのに誰かの意見にのっかったりしていましたが、今は相手の意見を尊重しながらも自分の意見をはっきり伝えることができるようになったと感じています。それは、どんな意見でも否定せずに受け入れてくれるグローバル探究のメンバーのおかげです。

【チームワーク（回答抜粋）】

- すべてグループ活動だったので、みんなと意見を交わしまとめることの難しさやプレゼン、PowerPoint などを使用しての発表の時のスライドの内容や企画書を作成することが難しかったです。チームでなにか一つのものを達成する楽しさや難しさを学ぶ事が出来ました。
- 団体スポーツをする私にとって協力することは当たり前の価値観ですが、物事を協力してするのは決して簡単ではないと感じました。なぜなら私たちがケナフを植えることで何か評価されたりなどメリットがなく、心の底からやりたいとは思っていないからです。<中略>（プロジェクトを）一人ですのを負担に感じた私は何もしてくれない同じチームのメンバーに少し手伝ってほしいと相談しました。しかし手伝ってくれず、授業で言っても「自分でどうにかしろ」ということを言われてしまいました。お願い事は必ずしてくれるわけではないと学び、ただ頼むのではなく何か工夫をする必要があると思いました。

【ルーブリック評価について】

With The World 社によるコンテンツとして、自己評価の仕組みを試験的に導入した。13の項目〔チャレンジ精神/他者・異文化理解/主体性・積極性/自己効力感/思考力/想像力・創造力/ファシリテーション力/気遣い・思いやり/チームワーク/傾聴力/英語コミュニケーション力/英語学習に対する学習意欲/社会問題・SDGsへの理解〕があるなかで、チャレンジ精神と他者・異文化理解の2つは全員共通で設定し、あと3つを生徒が個人で選び、計5つの力について、各自が自己評価していく仕組みである。0~4の5段階のルーブリックが用意され、そこから予め目標を設定し、事前(スタート時)・中間・最終と自己評価を重ねることで自身の成長を可視化しようという試みである。最終的には、グループ内の他の生徒とラーニングアシスタントからのコメントを含めてフィードバックできた。継続的に生徒と関わってくれたてるラーニングアシスタントならではの仕組みといえる。

上記内容で受講生徒に「成長させたいスキル」についてアンケートを取ると、「英語コミュニケーション力」の向上と「ファシリテーション力」を成長させたい項目として設定していた生徒が多かった（図1）。

成長させたい項目

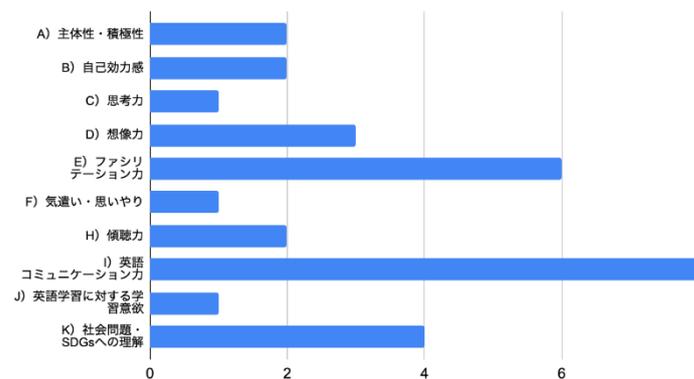


図1. 自己評価フォーム（事前）「成長させたい項目」の回答

全生徒共通の記入項目である「チャレンジ精神」、「他者・異文化への理解」に関する自己評価結果は下記の通り。

<チャレンジ精神>

プログラム開始前は「①スターター」「②チャレンジャー」と回答する生徒が60%を占めていたが、終了後は50%が「③マスター」以上を選択し、特に37.5%の生徒が「④チェンジメイカー」を選択した。多くの生徒が「チャレンジ精神」についての成長を感じていることがわかる(図2)。

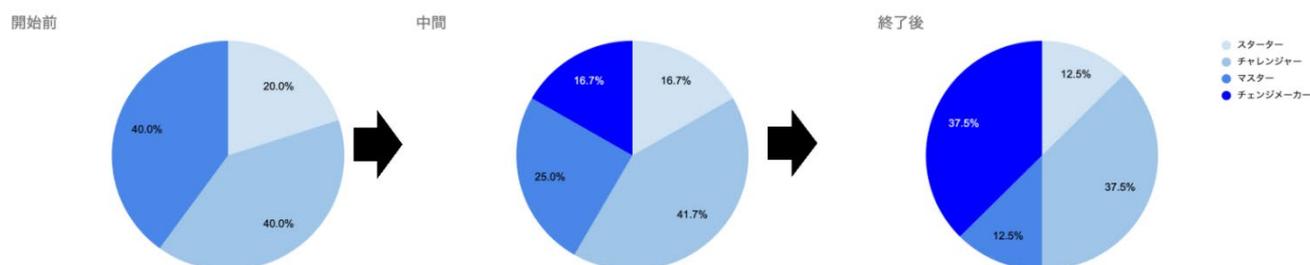


図2 プログラム開始前(左)と終了後(右)のチャレンジ精神に対する自己評価

スターター	チャレンジャー	マスター	チェンジメイカー
行動にはまだ移せていないが、達成したい事柄があり、挑戦したいと思う。	達成したい事柄に対して、アクションの大小に関わらず何かしら行動に移せている。	達成したい事柄に対して、まず挑戦してみるという習慣がある。	達成したい事柄に対してまず挑戦し、結果を振り返り、何度でも繰り返し挑戦することができる。

<他者・異文化理解>

プログラム開始前は80%の生徒が「①スターター」「②チャレンジャー」を選択していたが、終了後は「③マスター」「④チェンジメイカー」を選択する生徒が62.5%を占め、特に25%の生徒が「④チェンジメイカー」を選択した。多くの生徒が、他者・異文化への深まったと感じていることがわかる(図3)。

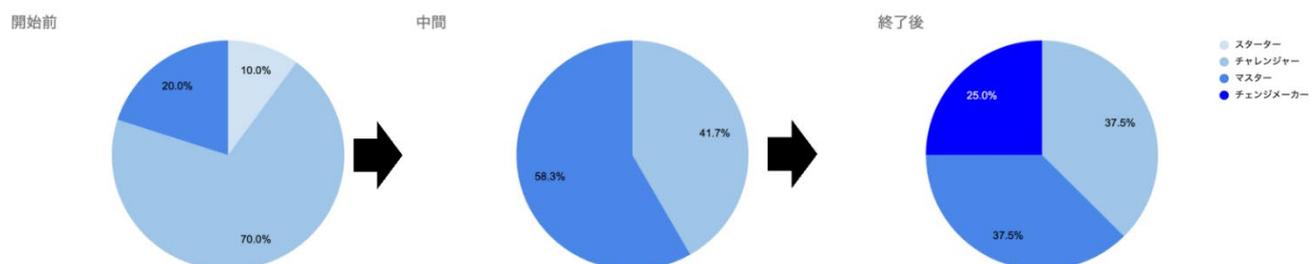


図3 プログラム開始前(左)と終了後(右)の他者・異文化理解に対する自己評価

スターター	チャレンジャー	マスター	チェンジメイカー
他者や異文化を理解することは大事であると自覚している。価値観や考え方は人によって異なる。と知っている。	自分の文化や価値観をその背景や理由を合わせて相手に伝えることができる。相手の文化や価値観に興味を持ち、その背景や理由についても質問し理解を深めることができる。	自分の文化や価値観は当たり前ではないかもしれないという前提に立ち、相手が理解しやすいように伝えることができる。一見受け入れられない意見や価値観についても、なぜそのような文化があるか理解しようとする。	同意する/しないに関わらず、自分とは違う文化や価値観を理解しようと常に努力し、尊重することができる。また、自分と他者の価値観は違うという前提に立ち、相手の考えを尊重することができる。

<生徒のアンケートにおける感想（自由記述）>

全体としてこのプログラムが生徒の英語学習の意欲向上、異文化への興味関心の向上、社会課題への関心度の向上、自分自身の成長に貢献したことが挙げられた。

異文化交流・社会課題への関心度

- 普通の生活をしていては、国際問題について考えることもなかつただろうし、海外生徒と関わることもなかつたと思います。貴重な経験をたくさんさせてもらえた唯一の授業です。
- 海外の方と繋がれたことや環境問題について探求するだけで終わらず行動を起こすことができてとても楽しかったですし、貴重な経験となりました。
- コロナ禍でも異文化交流が出来たこと
- 意見の食い違いが起きたことで、本当の異文化理解を体験でき、そこから学びに繋がったこと
- 海外の生徒のように意見をハッキリいう姿勢の大切さに気づいたこと

英語学習

- 実践的な英語を使えたこと
- 英語の勉強のモチベーションが上がったこと

自分自身についての気づき

- 自分の弱点や、その弱点を克服するためには他人に頼らず自分が行動しないといけないことを再認識することができたから。
- 自分自身を変えることができた
- 将来に活かせる学びとスキルを手に入れたから

<ラーニングアシスタントの大学生のフィードバック>

大学生にはトレーニングに加え、日々のチームがどのように進行しているかを細かく把握し、各チームの進捗状況と、班としての評価としアクションの度合い/オリジナリティ/アクションの計画性・緻密さ/リサーチや問題分析の丁寧さの4点、個人評価としては、英語コミュニケーションの積極性/リサーチ力/リーダーシップ/発想力・オリジナリティ/サポート力/プレゼン力の6点で総合評価し、担当教諭と進捗のすり合わせを行っている。また、ラーニングアシスタントから見た生徒の交流に対して持った所感は2つの軸があり、先生に向けた報告と、生徒に対するフィードバックで分けている。例えば先生に対する報告分としては、「アイスブレイクだけでなく、プロジェクトについてのメインのディスカッションでも、海外生徒と遜色なく英語で話すことができていました。また、新学期初のセッションでは、しっかりと海外生徒のアクションプランの進捗状況を確認し、今後のプロジェクトに貢献していたと思います。さらに、海外生徒の質問にもすぐに英語で返答することができていました。その一方で、自分が英語で話した内容にあまり自信をもてていないように感じることもありました。自分の発言がミスコミュニケーションを生んでしまったと懸念している場面も見られたので、もっと自分の英語力に自信をもって話すことがこれから重要になってくると思います。」であり、生徒に対しては、「しっかりとプレゼンテーションを準備し、自信をもって英語で発表することができていました。また、海外生徒からの質問にも、自分から進んで、英語で答えていたことが素晴らしいと思います。この調子で自分の英語力やアイデアをもっと信じてチャレンジすることで、より良い英語話者になれると思います。」と少々言葉のニュアンスを変化させ、生徒が「また次も頑張ろう」と思えるフィードバック法を実施した。

<海外の生徒や先生からのフィードバックを英語でまとめたもの>

今回の海外交流校の先生の意見としては、これまでの国際交流では日本との接点が少ない中で、アニメやマンガの影響で日本に関心を持つ生徒が多いことから以前から交流したいと思っていた。このコロナ禍において国際交流を促進できていない状況があり、学校・生徒双方にとって利点があった。と答える先生が多かった。

受講する海外生徒のアンケートでは、言語障害や異文化によるプロジェクトを推し進める上でのミスコミュニケーションが目立った。また、日本の生徒が序盤もの静かであった印象が海外生徒の持つ印象であったが、時を経て打ち解け友達になっていく過程に喜びを感じていた生徒が目立った。日本の生徒は英語力や社会課題への関心度、自身の成長に焦点を当てて記載した生徒が目立ったが、海外生徒は日本の生徒とのコミュニケーションや異文化理解をする過程に満足度が多く生じていた特徴があった。海外生徒のアンケート内容をいくつか紹介する。「I felt pretty happy and giddy while everyone was interacting or sharing things about themselves or their country. I'm also sad since we couldn't get to meet them personally, but it's alright. I was also so excited in making new friends that I sometimes get carried away and be mischievous with my close friends/team mates. I hope that my foreigner team mates were alright with it. I also love Team 2 since everyone was shy, sure, but they never fail in giving a response or comments. They're very approachable, friendly, and absolutely adorable. I also learned how different everyone's culture is like and how it makes them beautiful in their own authentic way. I'd love to see everything they shared personally and experience it with them, though it's unfortunate that we can't at the moment.」 「I had a great time discussing things with the Japanese and Philippines students.. we had little in common but we had an amazing discussion. We were able to connect with each other despite of living in different country I learned alot about their country & culture」 「it was so great because we manage to interact with the Japanese students well! I always gushed whenever they spoke in English because it was prominent how they were doing their best in talking with us or expressing themselves with it. They were also very nice and supportive that it made me look forward into seeing their reactions. They were shy, that's for sure, though they never failed in giving responses or answers to our questions/approach. :)」 「Everything went well and the team's social problem topic went well because in japan there is no such problems regarding social issues because it it a good country... The cooperation with Japanese students went so well and they were so much cooperative and make me feel nice while talking to them... Communication with Japanese student was a good experience. They All were very friendly and i really enjoyed in asking the questions to them.」

<With The World 社と神戸大学との協同研究 ～オンライン形式での国際コミュニケーション機会と学習効果の相関性の可視化>

さいごに、今回の授業は ICT 活用し、完全オンラインで実施したが、このオンライン形式での第2言語を用いたインタラクティブな国際コミュニケーションがどの程度の学習効果を持つかはある程度生徒のアンケートや自己評価から読み取れたが、交流中の生徒の実際のパフォーマンスと連携させた効果は測れなかったことが課題である。そこで、神戸大学との協同研究（教授 横川 博一）を経て、国際コミュニケーション機会と学習効果の相関性の可視化を目指し、今回の学習モデルを引き続き研究していくことにした。具体的には、外国語によるコミュニケーション能力の向上においてどのような有効性があるかを、談話分析による有効因子の抽出、言語テストによる心理言語学的言語運用能力の変容、パフォーマンステストによる実社会

での実用度などの観点から分析・検証するとともに、プログラムの評価システムの構築を目指す。必要に応じて AI 機能を用いて、学生の発話データ等を多角的な角度から読み取り、

- ・参加者の発話の計量的分析：発話量（発話語数，話速），語彙，文形式（文構造，統語的複雑さ）
- ・参加者の発話の質的分析：コミュニケーション能力（場面に応じた表現力，英文構成力，方略能力など），エンゲージメント（かかわり度，インタラクション力など）
- ・グループ・ディスカッションにおける訓練されたラーニングアシスタントのアドバイス（のタイミングと内容）と参加者の発話（それに対する変容など）

上記3点を時系列でさまざまな観点から分析し、どのような能力が向上する可能性があるのかを分析する。

これらの結果にもとづき、国際交流プログラムの評価に必要な有効因子を抽出するとともに、言語コミュニケーション能力を再定義し、有効な評価の枠組みと方法の確立をめざす。また、学校英語教育における活動中心の授業展開や言語運用力育成にかかる教師の役割について実践的示唆を明らかにしていく予定である。

研究開発の活動実績一覧

1. 生徒の活動

<研究開発のスケジュール>

期日		プログラム名	対象
4月	15	必修選択3科目 (AI活用・ハンズオンラーニング・グローバルスタディ) 合同ガイダンス	2年生
		選択授業3科目 (AI活用アドバンスド・ハンズオンラーニングアドバンスド・グローバルスタディアドバンスド)	3年生
	22	選択授業3科目・必修選択3科目	2・3年生
	28	グローバル探究 BASIC 学年説明会	1年生
5月	6	選択授業3科目・必修選択3科目	2・3年生
	13	選択授業3科目・必修選択3科目	2・3年生
	18	グローバル探究 BASIC 体験授業①	1年生
	27	選択授業3科目・必修選択3科目	2・3年生
6月	1	グローバル探究 BASIC 体験授業②	1年生
	3	選択授業3科目・必修選択3科目	2・3年生
	7	グローバル探究 BASIC 体験授業③	1年生
	10	選択授業3科目・必修選択3科目	2・3年生
	15	グローバル探究 BASIC	1年生
	17	選択授業3科目・必修選択3科目	2・3年生
	22	グローバル探究 BASIC	1年生
	24	選択授業3科目 必修選択3科目・2年必選学習報告会 (通称クロカリ) WWLC 構築支援事業 Second International Online Meeting (IOM②)	3年生 2年生 —
7月	1	選択授業3科目・必修選択3科目	2・3年生
	15	グローバル探究 BASIC	1年生
	31	関西学院世界市民明石塾 プレセッション (オンライン)	
8月	4・5	関西学院世界市民明石塾 本セッション (オンライン) オンライン高校生国際交流の集い	—
	8・9	ハンズオンラーニング長崎研修	2年 HL 受講生
	28 29	第7回アジアユースサミット (オンライン開催)	2年生 希望者
9月	9	選択授業3科目・必修選択3科目	2・3年生
	14	グローバル探究 BASIC	1年生
	16	選択授業3科目・必修選択3科目	2・3年生
	30	選択授業3科目・必修選択3科目 WWLC 構築支援事業 Final International Online Meeting (IOM③)	2・3年生 —

10月	5	グローバル探究 BASIC	1年生
	7	選択授業 3科目・必修選択 3科目	2・3年生
	19	グローバル探究 BASIC	1年生
	21	選択授業 3科目・必修選択 3科目	2・3年生
11月	10	グローバル探究 BASIC	1年生
	11	選択授業 3科目・必修選択 3科目	2・3年生
	16	グローバル BASIC	1年生
	18	2年必選学習報告会（通称クロカリ）	2年生
		選択授業 3科目合同成果発表会（GS）	3年生
	20	SDGs オンラインミーティング WWLC 生徒交流会	2年生
25	必修選択 3科目	2年生	
	選択授業 3科目合同成果発表会（AI・HL）・最終授業	3年生	
12月	8	地域探究課題 自治体フィールドワーク	2年生
	14	ソーシャル探究	1年生
		地域探究課題フィールドワーク報告会	2年生
	19	全国高校生フォーラム	3年生
	複数日	グローバルスタディ フィールドワーク	2年生
	複数日	グローバル探究 BASIC フィールドワーク	1年生
1月	11	グローバル探究 BASIC	1年生
	13	必修選択 3科目	2年生
	18	グローバル探究 BASIC	1年生
	25	グローバル探究 BASIC KG Peace Map を用いた学内フィールドワーク	1年生
	27	必修選択 3科目	2年生
2月	2	地域探究課題 全体報告会	2年生
	3	必修選択 3科目	2年生
	15	グローバル探究 BASIC	1年生
	17	2年生 WWLC3科目合同成果発表	2年生
	22	グローバル探究 BASIC	1年生
	26	グローバル探究 BASIC	1年生
3月	3	運営指導委員会・検証委員会	
	9	グローバル探究 BASIC	1年生
	14	グローバル探究 BASIC 最終発表会	1年生
	19	WWL・SGH×探究甲子園 2021	—

2. 対外会議・他校への視察・研究会等参加

2021/12/19	全国高校生フォーラム 発表者：3年生ハンズオンラーニングアドバンスド受講者（4名） タイトル：Fostering peacebuilders by distributing and using KG Peace Map
2022/3/19	探究甲子園 2022 探究活動プレゼンテーション：Aグループ（日本語発表）発表10分／大学教員による質疑・応答10分 発表者：グローバルスタディ受講者（2名）藤井・北内

3. 事業連携校との取り組み

- ・ WWLC 事業連携校オンライン教員交流会 2021年8月6日(金) 14:00~16:20

【参加連携校一覧】(14校)

京都産業大学附属高等学校、大阪府立千里高等学校、高槻中学校・高等学校、清風南海高等学校、
関西学院千里国際高等部、兵庫県立神戸高等学校、兵庫県立長田高等学校、兵庫県立姫路西高等学校、
兵庫県立洲本高等学校、兵庫県立国際高等学校、啓明学院高等学校、白陵高等学校、
奈良県立畝傍高等学校、香川県立観音寺第一高等学校

- ・ WWL コンソーシアム構築支援事業 事業連携校 生徒交流会 2021年11月20日

【参加連携校一覧】

奈良県立畝傍高等学校、関西学院千里国際高等部、大阪府立千里高等学校

- ・ 関西学院高等部主催 国際会議 Second International Online Meeting (IOM②)

2021年6月24日 関西学院主催

【生徒実行委員参加メンバー所属校(連携校より募集)】

奈良県立畝傍高等学校、関西学院千里国際高等部、賢明学院高等学校、兵庫県立国際高等学校
高槻高等学校、西宮市立西宮高等学校、啓明学院高等学校、広島女学院中学高等学校

【海外参加国】

インド、インドネシア、エジプト、フィリピン 計4カ国

- ・ 関西学院高等部主催 国際会議 Final International Online Meeting (IOM③)

2021年9月30日 関西学院主催

【生徒実行委員参加メンバー所属校(連携校より募集)】

奈良県立畝傍高等学校、関西学院千里国際高等部、賢明学院高等学校、兵庫県立国際高等学校
高槻高等学校、啓明学院高等学校、

【海外参加国】

インド、インドネシア、エジプト、フィリピン 計4カ国

4. 成果普及

- (1) 探究授業紹介特設サイトの開設 2022年2月25日公開

https://www.kwansei.ac.jp/cms/kwansei_hs/_tankyu_site_2022/index.html

- (2) 探究授業紹介リーフレット 2022年2月発行

- (3) 高等部 HP に WWLC ページの随時更新

5. その他

- (1) WWLC 運営指導委員会・検証委員会

実施日時：2022年3月3日(木) 13:00~15:00

実施方法：オンライン(ZOOM使用) *詳細の報告はP.11に掲載

- (2) WWL 拠点校・連携校拡大会議(事業終了報告会)

実施日時：2022年3月16日(水) 15:00~16:00

実施方法：オンライン(ZOOM使用) *詳細の報告はp.30に掲載

WWLC 事業連携校オンライン教員交流会

「WWL 連携校 教員交流会 探究授業のケーススタディ：よりよい学びを目指して」

日時：2021年8月6日 14:00～16:20

主催：関西学院高等部

内容：オンライン会議（Zoom 使用）

【参加連携校一覧】（14校）

京都産業大学附属高等学校、大阪府立千里高等学校、高槻中学校・高等学校、清風南海高等学校、
関西学院千里国際高等部、兵庫県立神戸高等学校、兵庫県立長田高等学校、兵庫県立姫路西高等学校、
兵庫県立洲本高等学校、兵庫県立国際高等学校、啓明学院高等学校、白陵高等学校、
奈良県立畝傍高等学校、香川県立観音寺第一高等学校

【当日のタイムスケジュール】

<第1部：14:00～14:40>

- ・開会の挨拶 関西学院高等部長 枝川豊
- ・3校による探究授業の事例提供・問題提起
 - 事例①兵庫県立国際高等学校 清澤 芳寛 先生
 - 事例②香川県立観音寺第一高等学校 床田 太郎 先生
 - 事例③関西学院高等部 田中 章雅 先生

<第2部：14:45～15:45>

- ・グループセッション 各分科会ファシリテーター
 - グループ1（主に事例①）：花井 渉（独立行政法人大学入試センター 助教）
 - グループ2（主に事例②）：時任 隼平（関西学院大学高等教育推進センター准教授）
 - グループ3（主に事例③）：泰山 裕（鳴門教育大学大学院 准教授）

<第3部：15:50～16:20>

- ・各グループのファシリテーターによるまとめ
進行：時任 隼平（本校カリキュラムアドバイザー）
- ・閉会の挨拶 関西学院高等部副部長 田澤 秀信

WWL コンソーシアム構築支援事業 事業連携校 生徒交流会

日時：2021年11月20日(土) 9:30～14:50 対象校：WWL 拠点校・共同実施校・連携校

主催：関西学院高等部（Zoom 使用）

■実行委員会参加メンバー所属校（連携校より募集）

奈良県立畝傍高等学校 1名 関西学院千里国際高等部 2名 大阪府立千里高等学校 2名
関西学院高等部 11名

■実行委員会会議スケジュール

プレ会議（関学高等部のみで実施）

7月12日、7月16日、7月24日、7月31日、9月9日、9月14日

全体会議（連携校のメンバーを交えて実施）

第1回：2021年9月19日（土）

自己紹介・イベント概要確認・班決め・ゲストについて

第2回：2021年9月25日（土）

各班で話し合いや役割決め・開会式・ディスカッションの共有方法・発表テーマ・広報方法など

第3回：2021年10月1日（金）

各班で話し合い・開会式詳細・講演会およびディスカッションの司会等役割決定・ポスター内容など

第4回：2021年10月8日（金）

各班で話し合い・開会式詳細・話し合いシート・閉会式・ポスター内容やインスタ広報など

第5回：2021年10月16日（土）

各班で話し合い・ゲスト決定進捗報告・ブレイクアウトルームの分け方や名前表記・発表シート内容・
インスタや zoom 記念撮影など

第6回：2021年10月22日（金）

各班で話し合い・前回話し合い内容の続き

第7回：2021年10月27日（水）

各班で話し合い・開会前から開会式・ゲスト紹介・ディスカッションの具体的進行方向・生徒発表の部
屋分け・閉会式・当日写真撮影のタイミングなど

第8回：2021年11月6日（土）

第1回リハーサル：当日のイメージで司会の文言やスライドなどを確認

※2021年11月12日（金）...関学高等部のみ学校で動作確認

第9回：2021年11月13日（土）：第2回リハーサル（生徒のみで実行）

※前日最終動作確認 11/19（金）...関学高等部のみ学校で動作確認、発表者からの資料回収

第10回：2021年11月19日（金）

最終確認ミーティング：役割や動作の最終確認、必要に応じて班ごとに話し合い

■【SDGs オンラインミーティング WWLC 生徒交流会】当日について

参加者：約 65 名の高校生および教員 オンライン会議（Zoom 使用）

第1部 実行委員による開会式とゲスト講師による講演

SDGs 3 番についての講演：（大学院大学至善館教授、幸せ経済社会研究所所長） 枝廣淳子 氏

SDGs 13 番についての講演：（国際基督教大学教授） 新垣修 氏

第2部 高校生同士のディスカッション 高校生のみ参加可能

参加高校生約 60 人を 4-5 人程度のグループに分け、ディスカッション

ディカッションテーマ：「感想、見えてきた課題、課題を選んだ理由、課題解決のためにできること」

第3部 WWL 拠点校・連携校による取り組み発表 ※ROOM【1】とROOM【2】は、同時並行

◆ROOM【A】（各校 10 分発表・5 分質疑応答）

・外国ルーツを持つ人が被る人権侵害～私たちが起こすアクション～（大阪府立千里高等学校）

・気候変動（関西学院高等部・2 年グローバルスタディ）

・8 月 9 日 あの場所に立って～私たちが長崎で感じたもの～

（関西学院高等部・2 年ハンズオンラーニング）

◆ROOM【B】（各校 10 分発表・5 分質疑応答）

・AI を活用する（関西学院高等部・2 年 AI 活用）

・KG PEACEMAP ～私たち関学生にできる平和活動とは～

（関西学院高等部・3 年ハンズオンラーニング）

・SIS における SDGs（関西学院千里国際高等部）

・Music for Health（奈良県立畝傍高等学校）

実行委員による閉会式、記念撮影、アンケートなど

※終了後、実行委員の反省会

WWL コンソーシアム構築支援事業 国際会議 Second International Online Meeting (IOM②)

日時：2021年6月24日(木) 16:30～18:30

主催：関西学院高等部 内容：オンライン国際会議 (Zoom 使用)

■IOM 実行委員会

- ・参加メンバー所属校 (WWL 連携校から募集：計 30 名)

奈良県立畝傍高等学校 2 名 関西学院千里国際高等部 3 名 賢明学院高等学校 1 名
兵庫県立国際高等学校 3 名 啓明学院高等学校 6 名 高槻高等学校 2 名
西宮市立西宮高等学校 1 名 広島女学院中学高等学校 1 名 関西学院高等部 12 名

- ・委員会運営

委員全体を、全体会(1)・ブレイクアウトセッション・全体会(2)・広報の 4 チームに分けて
オンラインで実行委員会を開催

〈開催日時〉 5/6 (木)19 時～第 1 回実行委員会、5/22 (土) 18 時～第 2 回実行委員会〈コアミーティング〉
5/28 (金) 19 時～第 3 回実行委員会、6/5 (土) 18 時～第 4 回実行委員会
6/12 (土) 18 時～第 5 回実行委員会、6/19 (土) 18 時～第 6 回実行委員会
6/21 (月) 19:30～大学生 TA と事前打ち合わせ、6/23 (水) リハーサル (オンライン)
6/24 (木) 15:30～高等部にて直前リハーサル→16:30～IOM②本番
6/26 (土) 18 時～振り返りミーティング

■Second International Online Meeting 概要

テーマ…「あなたにとっての平和とは？」コロナの中での平和・私にとっての平和・国にとっての平和
<第 1 部 16:30～17:10>

開会、各国の自国紹介、各国の社会問題、それぞれの国にとっての平和

<第 2 部 17:10～18:00>

グループセッション コロナ禍において、「あなたにとっての平和とは」をテーマに議論

- ・グループ構成

日本人 9～10 人 & 海外 5～6 人、TA (英語アシスタント) のグループ

- ・進行方法

日本側実行委員が各グループのファシリテーターとして司会進行

→必要に応じて TA の通訳サポートを受ける

<第 3 部 18:00～18:30>

グループセッションの話し合いの内容の共有、閉会式、記念撮影、アンケート

■一般参加者情報

- ・日本側 (WWL 連携校から募集)：計 193 名+教員 (見学のみ)

府立千里 5 名 白陵 2 名 畝傍 5 名 清風南海 5 名 賢明学院 8 名 市立西宮 1 名

京都産業大付属 17 名 関西学院千里国際 3 名 観音寺第一 15 名 兵庫県立国際 2 名 啓明学院 9 名

広島女学院 1 名 関学高等部 120 名

- ・海外側：計 135 人+教員 (見学のみ) …インドネシア、インド、エジプト、フィリピンの 4 カ国が参加

WWL コンソーシアム構築支援事業 国際会議 Final International Online Meeting (IOM③)

日時：2021年9月30日(木) 16:30~18:00

主催：関西学院高等部 内容：オンライン国際会議 (Zoom 使用)

■IOM 実行委員会

- ・参加メンバー所属校 (WWL 連携校から募集：計 30 名)
奈良県立畝傍高等学校 3 名 兵庫県立国際高等学校 2 名 関西学院高等部 7 名
- ・委員会運営
委員全体を、全体会(1)・ブレイクアウトセッション・全体会(2)・広報の 4 チームに分けて
オンラインで実行委員会を開催

〈開催日時〉 6/26(土)18:00~第 1 回実行委員会、7/10(土)18:00~第 2 回実行委員会

7/14(水)18:00~第 3 回実行委員会、7/26(月)17:00~第 4 回実行委員会

8/24(火)17:00~第 5 回実行委員会、8/30(月)17:00~第 6 回実行委員会

9/11(土)9:00~第 7 回実行委員会、9/13(月)19:00~第 8 回実行委員会

9/24(金)19:00~第 9 回実行委員会、9/29(水)16:00~リハーサル

9/30(木)16:00~準備→16:30~Final IOM 本番

■Final International Online Meeting 概要

テーマ…「SDGs と私たちの学び」

<全体会(1) 16:30~16:35>

開会、イベントの流れ説明

<ブレイクアウトセッション 16:35~17:45>

各校が SDGs を 1 つ選び、これまでの学びを元に、「高校生の私たちにできること」を発表

・グループ構成

各ブレイクアウトセッションに、日本の高校 2,3 校と海外の高校 2 校の計 4,5 チームが入る

・進行方法

日本側実行委員が各グループのファシリテーターとして司会進行

各校は発表後に、「SDGs 解決のために私たちは〇〇に取り組みます」という宣言を発表

プレゼンテーション後、事前に割り当てを決めたチームが質問ないしコメント、その他質疑応答

全グループの発表後に、各チームの宣言のなかからブレイクアウトセッションとしての共同宣言を決定

→必要に応じて TA の通訳サポートを受ける

<第 2 部 17:45~18:00>

各ブレイクアウトセッションの共同宣言の内容の共有、閉会式、記念撮影、アンケート

※当初は 8/24(火)開催を予定していたが、2nd.の後に各校の期末考査がある等スケジュールが厳しく、

しっかりとした計画や告知ができないと判断し、2 学期初めの告知・9 月末開催に延期した

■一般参加者情報(発表者)

- ・日本側 (WWL 連携校から募集)：計 51 名+教員 (見学のみ)
府立千里 1 名 畝傍 3 名 賢明学院 3 名 SIS(千里国際)5 名 兵庫県立国際 13 名 関学高等部 24 名
- ・海外側：計 44 人+教員 (見学のみ) …インドネシア、インド、エジプト、フィリピンの 4 カ国が参加

関西学院高等部 WWLC 事業 運営指導委員会・検証委員会

1. 実施日 2022年3月3日(木) 13:00~14:20

2. 場所 関西学院高等部 オンライン (Zoom) にて実施

3. 出席者

運営指導委員 坂西 卓郎 様 (公益財団法人 PHD 協会事務局長)

運営指導委員 能島 裕介 様 (尼崎市理事)

運営指導委員 坂口 裕彦 様 (毎日新聞社ソウル支局長)

検証委員 村上 正行 様 (大阪大学全学教育推進機構 教授)

検証委員 泰山 裕 様 (鳴門教育大学大学院学校教育研究科 准教授)

検証委員 梅本 貴豊 様 (京都外国語大学外国語学部 准教授)

4. 管理機関出席者

カリキュラムアドバイザー 時任隼平 様 (関西学院大学 高等教育センター准教授)

5. 拠点校出席者

枝川 豊 (関西学院高等部 部長)

田澤 秀信 (副部長)

上田 篤志 (グローバル探究 BASIC 担当者)

塚本 恭子 (グローバル探究 BASIC 担当)

徳田 有希子 (グローバルスタディ担当者)

泉川 貴史 (グローバルスタディ担当者)

原田 匠 (ハンズオンラーニング担当者)

松隈 協 (ハンズオンラーニング担当者)

田中 章雅 (AI 活用 Adv.担当者)

中尾 昌治 (AI 活用 Adv.担当者)

三木 真也 (グローバルスタディ Adv.担当者)

小島 修司 (グローバルスタディ Adv.担当者)

西室 雅央 (ハンズオンラーニング Adv.担当者)

尾城 信雄 (ハンズオンラーニング Adv.担当者)

前 雅和 (AI 活用担当者)

五十嵐駿太 (海外交流アドバイザー)

山下 博信 (高等部事務長)

中鶴 三奈 (事務職員)

6. スケジュール

13:00: 開会の挨拶<枝川>

13:00-13:15: 高等部全体の取組<田澤>

13:15-13:30: 各科目・行事での取組<西室>

13:30-14:15: 研究協議<司会:時任>

14:15-14:20: 閉会の挨拶<枝川>

研究協議

(1) 実践内容: 各授業の内容 (生徒が学ぶ内容)

(2) 指導体制: 教員配置や分業体制などについて

(3) 事後事業: 事業で得た知見を事業終了後にどのように学校に還元するのかなどについて

(4) 社会貢献: 本事業で得た知見の社会的意義と社会への還元などについて

(5) その他

7. 【3月3日(木) WWLC 事業 運営指導委員会・検証委員会 コメント振り返り】

・坂西氏

(1) 実践内容：各授業の内容（生徒が学ぶ内容）

印象的だったのは、ポスタープレゼンでの原発に関しての発表。反対派、推進派両方の意見をそれぞれ取入れた上で、自分の意見を考え持つことは良い。平和構築には、自分の意見を持ってそれを社会へ発信していくことが大切な要素になる。

・能島氏

(1) 実践内容：各授業の内容（生徒が学ぶ内容）

1年生対象で子どもの貧困を担当。大学生より批判的・本質的な質問ができる印象。大学で教えていると探究型の授業が増えていく中で、陳腐化している印象。型にはまった指導になって、学生自身のオリジナリティやユニークさが削がれているのが背景か？高等部には、それを大切にする指導を期待する。

・坂口氏

(1) 実践内容：各授業の内容（生徒が学ぶ内容）

「知る探る共有する」は記者の仕事にもつながる。ネットの上の情報拾ってくるというよりは、せっかくの授業なのでアナログの作業も大切にしてほしい。英語力の高さは心強い。いろんなテーマについて、わからなくて当たり前という心持ちでいけばよい。世の中は単純に白黒で切り取れない事を高校生のときから知るきっかけがあるのは良い。

・村上氏

(2) 指導体制：教員配置や分業体制などについて

(3) 事後事業：事業で得た知見を事業終了後にどのように学校に還元するのかなどについて

チームティーチング、情報共有はうまくできているのでは。このプログラムに熱心に取り組む生徒・教員の事もよく分かった。今後は、教育方法を他の先生でもできるようにするための攻略を、校内外に普及させる取り組みが必要。

・泰山氏

(2) 指導体制：教員配置や分業体制などについて

最近、探究型授業を取り入れ始めた学校で、まずは1年生でやり方を教えて、2年目から中身に入るパターンが多いが、それは何の意味もない。目的のない探究はありえないのでスキルだけ教えても内容の深まりにつながらない。探究の学びと教科の学びがどれくらい繋がっていて、生徒はどのくらい繋がっていると思っているのか。教科の授業をこう変えれば、こういう探究につながる、というところまで言えれば他の学校の参考になるのでは。

・梅本氏

(1) 実践内容：各授業の内容（生徒が学ぶ内容）

(3) 事後事業：事業で得た知見を事業終了後にどのように学校に還元するのかなどについて

今後、継続する上で授業内容を広げるというよりも少し絞っていく必要がある。自走して継続していくために取組をスリム化する話はあるのか。

→田澤副部長

現在進行中の7科目の探究型授業については何をもってゴールとするのかを改めて設定し、科目統合や一度なくすことも視野に入れても良いと考える。探究型授業の特別感をなくすには、いろんな先生に担当してもらう必要がある。来年度以降、何を残して何を削るかも精査する必要があるし、探究だけではなく、学校全体の仕事の総量を減らしていかないとこの取り組みは続かないなど考える。

WWL コンソーシアム構築支援事業拠点校・連携校拡大会議（事業終了報告会）

日時：2022年3月16日（水）15:00~16:00 場所：オンライン

主催：学校法人関西学院（管理機関）・関西学院高等部（拠点校）

【参加連携校一覧】（7校）

京都産業大学附属高等学校、大阪府立千里高等学校、高槻中学校・高等学校、清風南海高等学校、兵庫県立国際高等学校、啓明学院高等学校、香川県立観音寺第一高等学校

議題：

1. 事業終了にあたってのご挨拶

・村田 治（管理機関：関西学院大学 学長）

・枝川 豊（拠点校：関西学院高等部 部長）

2. 拠点校（関西学院高等部）のこれまでの取り組みと連携校との関わりについて

1) 拠点校での取り組みについて 田澤 秀信（関西学院高等部 副部長）

2) 高等学校でのオンライン国際交流授業について 五十嵐 駿太（株式会社 With The World）

3) 高等学校での探究・課題研究活動について 時任 隼平（関西学院大学 高等教育推進センター 准教授）

3. 今後（事業終了後）の自走についてのご案内

・今後のご連絡について（連携校関連）

・AL（アドバンスト・ラーニング）プログラムについて

今年度の研究内容と評価の概要

研究内容 1

1 年次は昨年度から引き続き「グローバル探究 BASIC」を開講。関心のある生徒を選抜し、知識の習得・活用・探究のバランスを考慮しながら、AI 活用・国際協働・ハンズオンラーニングの手法を用いた 2 年次の選択必修授業に向けて、探究授業の基礎を学ぶ。

また、第 1 学年全体を対象プログラムとして 3 学期に「ソーシャル探究」を行った。各クラスの代表 9 グループが学年全体の前でプレゼンテーションを行った。

《研究方法》

1. 「グローバル探究 BASIC」のシラバス作成。
2. 探究授業における評価の開発、実施。
3. 「SDGs 知る・探る・共有する」という目標を達成するために、フィールドスタディの実施。
4. 学年全体の取り組みとして、ホームルームを利用した「ソーシャル探究」を実施。個人・グループで様々な社会問題について調べ、その結果をクラス内、学年全体で共有した。

<研究開発の実施により明らかになったこと、および成果>

1. 探究学習のプロセスである、【①課題の設定 ②情報の収集 ③整理・分析 ④まとめ・表現】のサイクルを、本校のカリキュラムと学習目標に適応したシラバスを作成することができた。
2. 生徒の授業内/成果物に関する学びと思考を評価するルーブリックを作成することができた。
またそのルーブリックを用いて複数の教員が協働して評価にあたり、成績を算出するに至った。
3. 学外の団体のご厚意とご協力により、学外の 6 か所においてフィールドスタディを実施することができた。
4. 「ソーシャル探究」では、自分たちが学んできたことを誰かに伝えるという作業が自らの学びを振り返り、さらに深める意味でも大きな意味を持つ作業であることを再認識することができた。
5. 新規開講科目のシラバス作成を通じて、「課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現」を繰り返す探究活動を基本としたカリキュラムが開発できた。

研究内容 2

2 年次は必修選択授業のカリキュラムの中に「AI 活用」「ハンズオンラーニング」「グローバルスタディ」を展開する。1 年次に「グローバル探究 BASIC」を受講した生徒に、一般生徒の希望者が加わり、学校として、学年として授業の中で探究授業が本格的に開始される。

《研究方法》

1. 「AI 活用」「ハンズオンラーニング」「グローバルスタディ」のシラバスの開発。
2. 探究授業における評価の開発、実施。

<研究開発の実施により明らかになったこと、および成果>

1. 各科目を 2 名で担当することにより教科横断型の指導を行うことができ、また 3 年生との合同授業を実施するなど、異学年間の活動も行うことができた。
2. 「WWL 連携校教員オンライン交流会」、「SDGs 生徒オンライン交流会」、「国際オンライン会議」といった、授業・学校・国の枠組みを超えた教員用の研修会や、生徒が主体となった活動を展開することが出来た。
3. 各科目における成果については以下の通り。

「AI 活用」

- ・ AI 活用技術の知識を深めることができた

- ・関西学院大学にて AI を研究されている教授また大学院生、さらには AI の開発を行っている地元企業等、様々な方々を授業に招き、現場の声、専門家の声を聞く機会を持てた。
- ・10 人程度の比較的大人数でのグループワークから、4 人程度の小規模なグループワーク、また個人ワーク等様々な規模でのリサーチプレゼンテーションを行う機会を持ち、それぞれの場面でどのように協働するのが効果的なのかを考えるきっかけを作ることができた。

「ハンズオンラーニング」

- ・長崎研修での「体験」を元に原発と原爆を語るできるようになった
- ・文献などの 1 次資料にあたる時間を十分に取れなかった。
- ・収集する情報の信ぴょう性を疑う視点の育成をする必要がある。

「グローバルスタディ」

- ・気候変動に関わる個々の自由なテーマで課題解決のプレゼンテーションに取り組むことができた。
- ・SDGs Workshop では海外で SDGs に関連する活動に取り組む人々と英語で交流することができた。
- ・英語でのオンラインディスカッションの難しさは課題となった。(英語力・相手国とのテーマ認識のずれ)

研究内容 3

3 年次は、2 年次で必修選択授業「AI 活用」「ハンズオンラーニング」「グローバルスタディ」を受講した生徒に対し、選択科目として、引き続き「AI 活用アドバンスド」「ハンズオンラーニングアドバンスド」「グローバルスタディアドバンスド」を実施。3 年次の目標「行動する」に沿って通信型 PBL 型授業を行う。

《研究方法》

1. 「AI 活用アドバンスド」「ハンズオンラーニングアドバンスド」「グローバルスタディアドバンスド」のシラバスの開発。

2. 探究授業における評価の開発、実施。

<研究開発の実施により明らかになったこと、および成果>

1. 初めて 2 年間継続して探究授業に取り組むことができた。
2. 担当者間の教科を超えたコミュニケーションをとることができた。
3. 各科目における成果については以下の通り。

「AI 活用アドバンスド」

- ・システム構築は理系だけではなく文系でもできる実感することができた
- ・SDGs と AI を関連付けることでより具体的な解決案を提示することができた。
- ・最終的なゴールの設定の難しさ（能力・費用・期間・機器 etc.）については

「ハンズオンラーニングアドバンスド」

- ・KG Peace Map を用いたアクションを通して探究のサイクルを 2 回経験することができた。
- ・生徒が自発的にプログラムやディスカッションを進められるようになり、学びの主導権が生徒になった。

「グローバルスタディアドバンスド」

- ・2 年間継続して海外の高校生とともに取り組むなかで、イニシアティブ・リーダーシップを取ろうとする生徒が増えた。問題の分析や理解、チーム内での意識共有や役割分担、企画、広報、各方面との調整、実施、振り返りといった、社会で求められる実践的なスキルを養うことができた。

【研究内容1の具体的な内容とその評価】

探究型カリキュラムの開発のために>

科目	グローバル探求 BASIC	学年	1	単位	1	受講人数は21名
活動の目標	1. 社会を知る 自分の周りの世界で何が起きているかについて、生徒が語ることができる 2. 社会の中の自己を知る 自分の周りの世界に自分がどう関わっているか、接点を持っているかについて、生徒が語ることができる。					
教材	学びの記録・iPad (Classi/ ロイロノート)・ビデオカメラ・マイク・マナボード・ホワイトボードペン・付箋・模造紙					
留意点	1. テーマ設定などについて、生徒たちが自分で決められるように教員は留意する 2. フィールドスタディ、得られる知見などが予定調和にならないように教員は留意する					

<スケジュール>

・授業は60分授業 / 毎週火曜日の放課後 15:45-16:45

第1フェーズ：知る SDGs/自分の関心/生の声/仲間/ 授業形態などを「知る」	①5/18	・SDGsカードゲーム「×(クロス)」
	②6/1	・市民としての社会参画 外部講師 川中 大輔 氏
	③6/7	・ガイダンス：「学びの記録」の記入方法 ・SDGsのランキング作成
	④6/15	・社会における身の回りの問題について気づく ・社会の問題について取り組んでいる団体について知る
	⑤6/22	・グループで決めたテーマに関して調査したことをプレゼンする
	⑥7/15	・日本の貧困問題 外部講師 能島 裕介 氏
第2フェーズ：探る 自分の関心/フィールドスタディ(FS) 先の活動や課題/観点と問い/FS 先の 生の声を「探る」 【課題の設定】 【情報の収集】 【整理・分析】	⑦9/14	・生徒たちが関心のある分野の企業調査 ・フィールドスタディのグループ作り
	⑧10/5	・フィールドスタディ先候補2つについてグループ発表 ・訪れたいFS先の投票
	⑨10/19	・フィールドスタディにおける学びの手法「観点と問い」の理解
	⑩11/10	・フィールドスタディ先についての知識の整理と「観点と問い」の作成①
	⑪11/16	・フィールドスタディ先についての「観点と問い」の作成②
	FS 12/6-16	・フィールドスタディ(パナソニック・アシックス・JALスカイ大阪、兵庫県立男女 共同参画センター、神戸みらい学習塾、おてらおやつクラブ) ※ただし、パナソニックとアシックスは訪問が叶わなかったため、後日オンラインにてインタビューを実施
	⑫1/11	・3年生によるKG PEACE MAP (ハンズオンラーニング) についての紹介
	⑬1/18	・フィールドスタディのまとめ(6つの観点)の指示
	⑭1/25	・KG PEACE MAPを使った学内フィールドワーク
	第3フェーズ：共有する 中間発表・最終発表を通じて学び/発 見/課題/アクションプランを共有 【整理・分析】 【まとめ・表現】	⑮2/15
⑯2/22		・中間発表に向けて、6つの観点を5つの観点到し込む活動②
⑰2/26		・フィールドスタディについての中間発表
⑱3/9		・再解釈と再構築1 他グループの発表を見て評価・フィードバック
⑲3/14		・最終発表(6グループ) G1 サステナブルスマートタウン G2 スポーツと再生エネルギー G3 AI活用と働き方 G4 男女共同参画・ジェンダー G5 日本の子どもの貧困(教育) G6 日本の子どもの貧困(食事)

<各フェーズの 1.目標 2.具体的活動 3.活動の評価方法 4.検証 5.今後改善すべき点について>

第1フェーズ：【課題の設定】

1. このフェーズでの目標

- 目標 1) 生徒たちが、SDGs が身近な問題であり、自分たちの生活に結び付けていくことが大事だと大体説明できる。
目標 2) 生徒たちが、SDGs の問題が社会でどのようなことが起こっているかを具体的な例を挙げて説明できる。
目標 3) 生徒たちが、自分の関心のある社会的課題についてある程度説明できる。
目標 4) 生徒たちが、協働するグループワークなどに積極的に参加し良い授業の雰囲気をつくることことができる。
目標 5) 生徒たちが、学びの記録ワークシートのねらいを理解して記入ができる。

2. 具体的な活動

①5月18日【SDGs カードゲーム「×クロス」】

金沢工業大学 SDG s 推進センターが開発した SDGs をゲーミフィケーションによって学ぶことのできる「×クロス」を用いて、17の目標を達成するアイデアを出しあい、一方を得ようとする他方を犠牲にしなければならないという「トレードオフ」の解決に取り組んだ。

また、グループで作ったアイデアをシェアし、お互いに質問をすることで、着眼点や発想の意図などを確認し、各自の省察に繋げた。



②6月1日【市民としての社会参画 外部講師 川中大輔氏】

シティズンシップ教育や社会イノベーション実践を専門としている龍谷大学准教授川中大輔氏によって、社会起業やNPO、NGO、ボランティアや企業のCSRなど様々な社会参画の可能性について講演をいただいた。まず、生徒は自分の身の回りにある「社会問題」が手の届く範囲の非常に限定的なものであり、知識としても経験としても知りえない部分に社会問題が潜んでいることを知り、そこに光をあてて解決に取り組む団体や企業があることを学んだ。



③6月7日【「学びの記録」の記入方法 時任隼平氏】

カリキュラムアドバイザーであり関西学院准教授の時任隼平氏より、授業での学びの過程の重要性についてワークショップ形式で学んだ。知識の習得だけでなく、気づきや発見、考えの変化のプロセスを記録し可視化することにより、授業中の学びをメタ認知することに繋げ、成長の実感とともに、次への学習意欲へとつなげることを意図している。今回は SDGs 17の目標に優先順位をつけるとすればどのように考えることができるかという課題をグループで解決するワークショップを行った。



④6月15日【社会の問題や取り組む団体について知る】

自分たちの身の回りにどのような社会問題があるのかをブレインストーミングし、カテゴリーに分類してそれぞれにどのような関係があるのかを考察した。次回までに一つテーマを決めてそのテーマに取り組む団体を調べ、どのような活動をしているのかをまとめてプレゼンテーションを作成するように指示をした。



⑤ 6月22日【社会の問題に取り組む団体についてプレゼンする】

以前より自分たちの生活やニュース・新聞で見聞きする情報に含まれている社会問題だけでなく、少し調べるとより多岐にわたる問題があることに気づかされる。生徒は、プレゼンを作成する過程でブレインストーミングでは出てこなかった問題にも気づき、その問題に取り組む団体について調査することができていた。



⑥ 7月15日【日本の貧困問題 外部講師 能島裕介氏】

日本の貧困と教育に関する問題に実践的に取り組まれている尼崎市理事の能島裕介氏より、日本における貧困とはどのようなものか、について講演をいただいた。事前に、「日本における貧困」についてインターネットで情報を集め、自分たちの街にも「貧困」と呼ばれる状態にある人が存在していることを知っていた生徒らは、能島氏に対して、「相対的貧困を解決することのできない理由はどのような点にあるのか」など、より問題解決に志向するクリティカルな質問や意見が出た。



3. 活動の評価方法

- ・講演やグループワークでの自主的な発言について簡単に記録し、ポイント化した。
- ・「学びの記録」について①から評価を開始。毎回授業後に回収し、フィードバックを試みた。
- ・「学びの記録」のルーブリックは下の通り。

	新しい事実・知識の量/質とその整理	他者や自分の主張の量/質とその考察
A	新しい事実・知識の量/質が十分で、自分の観点を持ってしっかりと整理されている。	他者や自分の主張の量/質が十分であり、他者と自分の主張/事実・知識と主張とが有機的につながり、考察までに発展した記述が多く見られる。
B	新しい事実・知識の量/質がある程度あり、ある程度の情報のまとまりになっている。	他者や自分の主張の量/質がある程度あり、他者と自分の主張/事実・知識と主張とをある程度つなげて考察まで発展した記述が見られる。
C	新しい事実・知識の量/質が不十分で、内容の整理がななくそのままの羅列となっている。	他者や自分の主張の量/質が不十分で、考察が見られない。

4. 検証

目標の達成度・課題

- ・目標 1)2)について

生徒は新聞やテレビのニュース番組で知る情報が、社会問題としてどのような課題を抱え、それを解決するためにどのような団体が活動しているのかという知識の少なさに気づくことができた。それは、自分たちの身の回りに存在する問題であり、また、顕在化していない問題についても知ろうとすることが必要であると認識することができたようだ。それぞれの問題がSDGsに繋がっており、17の目標に収斂されていることについても理解することができた。

- ・目標 3)について

②の授業で、川中氏から社会問題の俯瞰図を提示頂き、「社会的課題」が多岐に渡っていること、また、それらが連関しているということ意識するようになり、その中から自分の生活や経験に引き寄せて、特定のジャンルの社会

問題についての知識を得ようと取り組んだ。また、⑤の授業でのプレゼンではそれらの社会問題を自分たちの言葉で説明することができた。一方で、「関心」は調べていく過程で生まれてくるものでもあり、この「課題の設定」における「自分の関心のある社会的課題について」という部分は流動的であるということも確認できた。生徒は、第1フェーズの授業をとおして、多岐に渡る社会的課題に関心を深め、気づきと思考を繰り返して少しずつ価値観の形成を行っているようである。



・目標4)について

この授業では本校に併設した関西学院中学部からの進学者と外部中学校からの進学者とがほぼ同数在籍しており、あらかじめ人間関係が形成されている状態で始まったわけではなかった。しかし、授業内におけるグループワークを通してアイスブレイクともなり、協同的に課題解決に向けて取り組む土壌が養成されていった。特に、授業外で取り組ませるプレゼンの準備は、クラスを越えて連絡を取り合い、一つの課題に取り組むチームワークの術を習得することに繋がった。それぞれが、意見を持ち、発言することがポジティブにとらえられるクラスの風土にもつながり、誰もが授業への積極的な姿勢を見せることができていた。

・目標5)について

生徒によって表現の仕方が違っているものの、創造的な思考への意識づけに繋がられている。課題としては、話し合いの最中にも記録を書くことに意識が向いてしまう場面があることと、学びの記録を授業時間内に書き切ることの難しさがある。

5. 今後改善すべき点について

- ・「調べてプレゼンをさせる」という一連の活動は、どうしてもインターネット上の情報を集めてきて整理するという事に終始してしまうので、図書館の利活用について、また、家族や親戚へのインタビューなど、情報収集の方法について学ばせる機会を設けてはどうか。
- ・テーマを決めて「調べてプレゼンをさせる」時には、「疑問」と「仮説」を作ることを意識させたが、その「仮説」の妥当性について検証し省察させる時間をとることができなかった。多くのゲストから講演を聞き、ワークショップをしたが、学びの記録による省察や知識の整理だけでなく、教員がファシリテートしながら時間をとって振り返ることも良いのではないかな。

第2フェーズ：【課題の設定】【情報の収集】【整理・分析】

1. このフェーズでの目標

目標1) 生徒たちが、自分の関心のある社会的課題についてある程度説明できる。

目標2) 生徒たちが、地域（ローカル）の実社会で活動されている方々やその団体の取組や課題をフィールドスタディ（FS）を通じて、語るができる。

目標3) 生徒たちが、FS で用いる学びの手法を使って「観点と問い」を作成し、インタビューや聞き取りをすることができる。

目標4) 生徒たちが、社会との接点を自ら作り出す楽しさについて語るができる。

目標5) 生徒たちが、FS の経験で得た学びを、アクションプランにつなげるイメージを持つことができる。

2. 具体的な活動

⑦ 9月14日【関心のある分野の団体調査・FS先グループ作り】

⑧ 10月5日【FS先候補についてのプレゼン】

第1フェーズで調べた「関心のある分野の団体」について再度、情報を集め、そこで解決したいと考えている課題を明文化した。「環境問題」や「ジェンダー」、「貧困」とテーマでは簡単に言葉にすることができる「問題」も、そののど

ここに課題があるのかを言葉にすることで、自分がどこまで理解できているのか、どこに解決すべき問題が潜んでいるのかを意識させることができた。また、調べて得られた情報をもとに、「ここは〇〇に取り組んでいるが、きっと××のような課題を抱えているはずだ」という仮説を立て、そこへフィールドスタディしに訪問する必要性について考えさせた。ただ、社会見学に行くわけではなく、解決するために現地に行く必要がある課題を持っていなければフィールドスタディにはならないという点を強調した。

⑨ 10月19日【フィールドスタディにおける学びの手法】

前回の授業で、フィールドスタディと社会見学の違いを意識させるために、「疑問」と「仮説」を設定させた。さらに、以下の4つの項目について意識させ、FS先について具体的にどのように考えるべきであるのかをグループで話し合わせた。

- a. 訪問先へどのようなことを検証しに行こうとしているのか
- b. 団体・企業の取り組みを具体的に把握しているか
- c. どのような経緯・理由でその訪問を計画することになったのか
- d. 伝達しようという意欲を持つことができているか

⑩ 11月10日【FS先についての知識の整理と「観点と問い」①】

⑪ 11月16日【FS先についての「観点と問い」②】

各自で調べてきた情報をグループ内でシェアし、一つのプレゼンとして構成するワークを行った。同じFS先であっても、環境問題、働き方、ジェンダー、貧困など様々な観点で切り込むことができ、さらに、「疑問」と「仮説」を作るとき、「わざわざ訪問しなくても良い」という程度に収まってしまいがちであることも意識させた。FS先の取り組みの背景やそこで活動している人の思いといった、「訪問しなければわからない」と捉えられそうな内容も、「仮説」を設定することによりそれがどれだけ意義のある疑問・質問であるのかを確認することができた。また、グループで話し合い、情報をまとめ、観点を整理し、プレゼンさせることで、FSの目的意識も共有することができるようになった。プレゼンの後は、「フィールドスタディに向けた`観点'と`問い'の設定」(資料5)というプリントを用いて、もう一度、プレゼンの内容を明文化し、グループ内で確認を行った。



フィールドスタディ実施

- ・授業⑨で「観点と問い」を作成しきれなかったグループは空き時間に教員のチェックを繰り返し受けた。
- ・各グループに教員1名引率。オンラインも同様。WWL 選択授業を受講する2年や他の教員も参加可とした。
- ・集合時間/行き方/プレゼンの内容/観点と問いについては、各グループがロイロノートを使って他のFS参加メンバーに事前に伝達。



⑫ 1月11日【3年生によるKG PEACEMAP 紹介】

⑭ 1月25日【3年生によるKG PEACEMAP フィールドワーク】

フィールドスタディで「仮説」を検証し、情報を整理するところまでは、これまでの学習で習得してきた知識や技能を用いて取り組むことができると予測されるが、「成果物」を創造するアイデアや実行にうつす術に関しては授業で取り上げてこなかった。あくまでも、社会で実際に活動する団体を対象としていたため、自分たちが行動に移す実例を知り、課題解決の手段として社会にいか還元しうるかを体験した。3年生がハンズオンラーニングの授業で作成した「KG PEACEMAP」を使って実際にARを用い、学内外の平和関連施設や史跡を訪れ、先輩がどのようにしてこのMAPを作成したのかを学んだ。AR技術を用いることや、印刷物をデザインして発行すること、その印刷の費用を工面するために企業に協賛を取り付けることなど実践的なことを目の当たりにした。自分たちが経験で得た学びをどのように実践につなげるか、生徒たちは「学びの記録」に考えを記入した。



※コロナウイルス感染症による学年閉鎖の影響で、⑭の授業は予定していた1月18日に実施することができず、隔週の開催となった。

⑬ 1月18日【フィールドスタディのまとめ（6つの観点）】

フィールドスタディで「仮説」の検証を行ったが、改めて以下の6つの観点に基づいて自分たちのFSを振り返り、プレゼンに向けてどのようなことに焦点を当てて構成を進めるのかを確認させた。

観点 1)フィールドスタディで再確認できたこと

(インターネットや著書を通じて既に知っていたことを直接現場で確認できたこと)

観点 2)フィールドスタディで新しく知った知識

観点 3)フィールドスタディだからこそ分かった現場の人たちの考え（想いや信念等）

観点 4)フィールドスタディだからこそ分かった現場の人たちが向き合っている課題

観点 5)フィールドスタディに参加する前に自分たちがもっていたイメージで参加したことによって変わったこと

観点 6)フィールドスタディ先の現場の人たちが向き合っている課題に対して、高校生である自分たちができること
グループで話し合った内容は観点別にロイロノートのカードに記入させ、提出箱に提出させた。

3. 活動の評価方法

- ・⑩11月16日 ⑭1月25日の「学びの記録」を回収し、教師が内容を評価。
- ・「フィールドスタディに向けた「観点」と「問い」の設定」と「学びの記録」のルーブリック（フェーズ1と同様）

	新しい事実・知識の量/質とその整理	他者や自分の主張の量/質とその考察
A	新しい事実・知識の量/質が十分で、自分の観点を持ってしっかりと整理されている。	他者や自分の主張の量/質が十分であり、他者と自分の主張/事実・知識と主張とが有機的につながり、考察までに発展した記述が多く見られる。
B	新しい事実・知識の量/質がある程度あり、ある程度の情報のまとまりになっている。	他者や自分の主張の量/質がある程度あり、他者と自分の主張/事実・知識と主張とをある程度つなげて考察まで発展した記述が見られる。
C	新しい事実・知識の量/質が不十分で、内容の整理がなくそのままの羅列となっている。	他者や自分の主張の量/質が不十分で、考察が見られない。

4. 検証

目標の達成度・課題

- 目標 1) 生徒たちが、自分の関心のある社会的課題についてある程度説明できる。
- 目標 2) 生徒たちが、地域（ローカル）の実社会で活動されている方々やその団体の取組や課題をフィールドスタディ（FS）を通じて、語るすることができる。
- 目標 3) 生徒たちが、FS で用いる学びの手法を使って「観点と問い」を作成し、インタビューや聞き取りをすることができる。
- 目標 4) 生徒たちが、社会との接点を自ら作り出す楽しさについて語るすることができる。
- 目標 5) 生徒たちが、FS の経験で得た学びを、アクションプランにつなげるイメージを持つことができる。

・目標 1) について

フィールドスタディの訪問先を調査し、テーマに関する現場の実態を把握しつつ、調べる中で身に付けた多様な知識を社会的課題に引き付けて考えることができるようになったようである。「関心のある社会的課題」に対して知識が増えただけでなく、そこに内在する課題を解決する団体について知るプロセスで、社会的課題の諸相や内実について理解することができ、生徒が探究した特定の分野に関しては「ある程度説明できる」というところまで達成している。それは、学びの記録や授業⑩のプレゼンでの彼らの言説などからも評価できた。しかし、社会的課題は多岐に渡る諸問題が関連し、また、当事者の状況や地域によってさまざまであり、それぞれについての的確に把握し、説明できるところにまでは到底及んでいない。

・目標 2)3)について

中間報告に向けて確認したい観点として6つの項目を生徒に提示して意識させるようにした。授業⑬で示した観点を前もって以下のようにかみ砕いて説明をした。「FS 先の活動概要、疑問と仮説、FS で直接確認できる相手のリソースや直接見聞きしたこと、現場の人たちはどのような課題を抱えているのか、高校生でありながら自分たちの発想によって実現できる課題解決の方法とはどのようなことか」といった項目である。そのことにより、FS 先についてより課題解決の意識を持たせることができ、知識を吸収し、「観点と問い」を通して自分たちの課題解決に生かそうという意欲が見られた。そのことが、結果として「団体の取り組みや課題」を語ることに繋がっていた。しかし、インタビューのための観点や質問も生徒の想定する範囲内のものとなり、そのことが、FS 先が抱える多くの問題の一部に過ぎない面も否めない。「学びの手法」は身に付けつつも、視野を広く持ち、他との関係も加味しながら考察できるほどの力はまだ及んでいない。

・目標 4)について

FS 先の一つに「おてらおやつクラブ」があるが、そこでのインタビューによって、相対的貧困にある子どもたちにおやつを配る、支援先から送られたおやつを仕分けするなどの作業を担う人手が足りないことを知り、生徒が自発的にアポイントを取り、別の日に改めてボランティア活動として参加した。また、男女共同参画センターに訪問したグループは FS の際に担当の方と連絡先を交換していただき、ジェンダーに関する正確な知識や男女共同参画の実情について SNS を通して啓蒙するという活動を提案し、連絡を取り合ってプロジェクトを進めようとしている。このように、生徒が自発的に自分たちの意欲関心に基づいて授業外での取り組みを進めようとしたのは、3年生の先輩が KG PEACEMAP を自らの発想で実現した例も影響している。すべての生徒がそのような主体的な行動に移しているわけではないが、少なくない数の生徒が自分たちの発想を実現し実行に移そうとできているという点で、「社会との接点を自ら作り出す楽しさ」を感じつつあるのではないかと評価している。

・目標 5)について

上述したように、一部の生徒は具体的な発想を持ち、実現にむけて動き出そうとしているが、グループとして「アクションプランをイメージ」することにはつながっているとは言えない。やはり、SNS を通して同級生や世間に社会的課題についての啓蒙や活動の紹介といった発想にとどまることが多く、より創造的なアイデアに繋げられる例が少ない。特に、アシックスやパナソニックといった大企業にインタビューをしたグループはその企業の取り組みの先進性からも、取り組みのポジティブな面が印象に残り、企業の CSR の宣伝に終始しがちな傾向が見られた。自分たちが発信するアクションとして、どこをターゲットに何を行うのかを具体的に創造できるところにまで導きたい。

5. 今後改善すべき点

・フェーズ 1 にて関心のある社会的課題は、まず広く社会にどのような問題があるのかを知ることを意識させたことにより、生徒自身が多岐に渡る問題に触れることができ、自由にテーマを設定して探究を始めることができているが、外部講師に講演をいただいたテーマとそうでないテーマとで基本的な知識や理解の差が生まれた。

・入学間もない 1 年生がクラスをまたがって関心のあるテーマをきっかけの一つのグループとなり、探究活動を進めるが、コロナ禍でマスク越しであることや、距離を縮められないなどもあり、人間関係の構築に時間がかかってしまった。できる限りグループワークを入れて進めているが、FS を経るまでは人間関係が希薄であり、情報の収集や疑問点の洗い出し、仮説の設定の事前ワークに関してはグループワークが円滑に進んだとは言えなかった。あくまで、個人で取り組んだことを持ち寄って繋げたプレゼンとなり、共通理解のもと、一つの課題に取り組んだとはいいいがたい状況であった。FS を経てからは、チームビルディングができており様々に役割を分担して探究活動に取り組んでいたことから、もう少し早い段階で共同作業を行うコミュニティの形成を意図したほうがよかったと言える。

・3年生のハンズオンラーニングで成果物として作成した「KG PEACEMAP」の存在は彼らに「自分たちでアイデアを出して何かを成し遂げる現実味」を想起させ、アクションプランに繋がった。しかし、すでに述べたように、「具体的に創造できる」には力及ばず、SNS での啓蒙や、リサイクル品の回収といった意義はあるものの、その活動を通して何を解決したいのかといったターゲットのぼやけたアイデアが多かったことが悔やまれる。探究の課題を設定する際に、具体的に解決するための策にはどのような例が考えられるのかをもう少し多く提示すべきだったかもしれない。生徒の自由な発想に期待するあまり、出たところ勝負となってしまったきらいがある。

・コロナ禍で現場への訪問になかなか許可がおりず、検討いただくのに時間をかけすぎてしまい、結局オンラインで別の企業にインタビューをお願いすることになった班ができてしまった。実際に訪問できないことは、これからも距離や費用の面でありうることではあるが、オンラインでインタビューする場合と、実際に訪問する場合とでどのような違いがあり、どのようなことに注意しておくべきかをブラッシュアップしておくことが必要かもしれない。例えば、どうしても生徒からの質問が形式的になってしまうため、企業・団体側の「説明」が主になってしまう。目にしたものと雑談の中で生まれてくる機微が欠ける分、形式的な問答になりかねないため、相応の工夫が求められる。

第3フェーズ：【整理・分析】【まとめ・表現】

1. このフェーズでの目標

目標 1) 生徒たちが、観点1～5に従って、FS 先で学んだことを内在化して、発表することができる。

目標 2) 生徒たちが、観点1～5に従って、ロイロノートやパワーポイントを用いて発表することができる。

目標 3) 生徒たちが、「社会を知る」「社会の中の自己を知る」という点について学んだ実感を得て、これから社会で起こしていく方向性を考えることができる。

目標 4) 生徒たちが、この探究授業を通じて、学びに対する自分の意識の変化について言語化でき、学びの過程で生じた問題点についてどう克服しようとしたかを認知できる。

2. 具体的な活動

⑮ 2月15日【5つの観点に落とし込む活動①】

⑯ 2月22日【5つの観点に落とし込む活動②】

中間発表に用いる「生徒相互フィードバック表」（資料7・8）「教員による評価」（資料12）の観点の説明を行った。

「生徒相互フィードバック表」は生徒がお互いに発表をどのように評価すべきなのかを理解することで、逆に、自分たちがどのようなことに気を付けて発表をしなければならないかの意識づけにもなる。また、教員も同じ項目で点数化して評価を行うことを伝え、プレゼンの最終的な評価を意識させることにもつながった。さらに、教員からは、それぞれの項目について段階別の評価とコメントが付された用紙がフィードバックされることも伝えた。

なお、このチェック表の観点は以下のとおりである。

観点 1) FS 先を訪問するにあたって目的意識がはっきりしているかどうか。

観点 2) 施設設立の目的や今抱えている問題点について理解できているかどうか。

観点 3) 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。

⑰ 2月26日【フィールドスタディについての中間発表】

今年はクラスを二つに分けることはせず、時間はかかるが、すべての班の発表を全員で聞くことにした。発表テーマのバリエーションが多岐に渡り、生徒間の気づきにつながりやすいのではないかと、生徒からのレスポンスの数も多いほうが思考の振れ幅が豊かになるのではないかと考えた。生徒からのレスポンスは相互評価表だけでなく、「クリティカルな質問」をロイロノートの提出箱に各グループに提出させ、最終発表に向けての準備に生かせるよう工夫した。質問はクラス内生徒の誰もがみられるような共有設定を行い、それぞれにどのような疑問が生まれているのかを確認させることもできた。



- ①なぜ未来学習室を選んだのかの理由をより具体的に教えていただきたい。
- ②神戸市がボランティア活動の副業に関して寛容な理由は何か？
- ③なぜ講師を性別で分ける必要性があるのか？区別なのか差別なのか…。

(例) 生徒から生徒への質問カード

・ 関心のある社会的課題のトピックとフィールドワーク訪問先、発表テーマ一覧

2021年度 グローバル探究BASIC フィールドスタディ班

	トピック	メンバー
1 班	環境問題	
	パナソニック	サスティナブルスマートタウン
2 班	環境問題	
	アシックス	スポーツと再生エネルギー
3 班	職場労働環境	
	JAL	AI活用と働き方
4 班	ジェンダー	
	兵庫県男女共同参画センター	男女共同参画・ジェンダー
5 班	教育	
	神戸みらい学習室	日本の子どもの貧困と教育
6 班	貧困	
	おてらおやつクラブ	日本の子どもの貧困と食事

・ 中間発表の準備のために、授業外で生徒がグループワークを行い、プレゼンの準備ができるようにセッティングした。なお、この時、プレゼンの練習は録画し、実際に自分たちで評価をしてみることで観点とのずれを確認させることを指示した。

グロ探BASIC受講生が使える部屋と時間

特別教室棟1階

小教室①②

中休み 10：20～10：45

昼休み 12：35～13：20

放課後 15：30～17：00 (延長希望は事前に言ってください)

2月16日(水)・17日(木)

21日(月)～25日(金)

※プレゼンの準備はオンラインでも構いませんが、少なくとも一度は**プレゼンの練習と検証**をしましょう。

→自分たちで録画し反省点を洗い出すなど

中間報告の発表項目(ロイロ)

- 1) FS先の活動概要
- 2) 自分たちの観点と問い
- 3) FSで直接確認できたこと 相手のリスポンス/直接見たこと
- 4) ・現場の人たちはどのような課題をどのように語っていたのか
・自分たちはそれを聞いてどう思ったか
- 5) 高校生である自分たち当該テーマについてできること
・具体的にどのようなことならできそうか
・それが実現可能な根拠

⑩ 3月9日【再解釈と再構築 フィードバックの確認】

「中間発表 振り返りシート【再解釈と再構築】」(資料9)を用いて、自分たちのプレゼンが各観点においてどの程度達成できていたのかを振り返らせた。自らを「発表者」と客観化してセリフやしぐさを冷静に分析させることによって、各観点を満たす内容に近づけられているかどうか、また、分かりにくい言い回しになっていないかどうか、全体の構成に工夫が必要でないかどうかなどを確認した。このようなメタ認知と他のグループの評価を連関させることによって、自分たちのプレゼンに対する改善点への気づきに繋がった。例えば、「発表者(自分自身)の目的は何ですか?」という問いを自らのプレゼンを分析しながら回答する過程に、客観化し自己省察する姿勢を促すことができる。また、「ストーリーとしてわかりやすくなっているか」という問いで、プレゼンが一つの「伝達手段」であり、単なる記述物ではない点を意識することに繋がった。多くのことを調べ、整理してきた生徒たちにとって、限られた時間の中でどこに焦点をあてて、何を表現しようとするのかという取捨選択はそれまでにない発想となった。

自分たちのプレゼンを見直し、どの点についてどのような指摘がなされているのかを確認するために、教員からのフィードバック用紙を活用させた。(資料12)

中間発表から最終発表に向けてのポートフォリオとして、Classi アンケート機能を用いて、以下のように「意識の変化について」と「問題の克服」について400字程度の作文をさせた。(資料10)

設問 1 【意識の変化について】 他の班のプレゼンや先生方からのアドバイスに対して「ここまでを目指さないといけないのか!」「なるほど、思っていたのと違う!」と活動内容そのもの や、活動の目的に関して「はっ」とさせられたこと、考えさせられたことを書きましょう。

設問 2 【問題点の克服】 現状の問題点を把握した時に、自分なりの解決方法とはどのようなもの でしょうか。まずは、取り組みの中で「問題点」となっていることを挙げ、それに対して 自分がどのように工夫して克服しようとしたか、しているかを書きましょう。

⑭ 3月14日【最終発表】

- ・視聴覚室にて、6グループによる発表を行った。
- ・発表は12分間、質疑応答は5分間、パワーポイントまたはロイロノートを発表資料として使用（資料11）
- ・生徒たちは「最終発表用 生徒相互チェック表」を用いて発表を聞いた。

中間発表時の観点は3つであったが、最終発表時は以下の5つの観点を用いてチェックが行われ、教員もこれに従い発表を評価した。

観点 1) FS 先を訪問するにあたって目的意識がはっきりしているかどうか。

観点 2) 施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができているかどうか。

観点 3) 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。

観点 4) 視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。

観点 5) 発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。

・発表後、部長・副部長から全体の講評を行い、次年度に向けてアクションプランを実行に移せる力と、探究的な学びをけん引する存在として学年の中でリーダーシップを取れるようにと激励した。

- ・相互評価シートと振り返り Classi ポートフォリオを提出するよう指示をし、成績返却の日時を確認した。



3. 活動の評価方法

■授業⑯の「中間発表 生徒相互チェック表」を回収し、教師が内容を採点した。

「中間発表 相互チェック表」の評価のルーブリック

	観点ごとのチェック/知識や考えの深まり	発表者のFS先の情報に対する自分の気づき
A	発表の内容に即した観点ごとの深い気づきや疑問が記述されている。	FS先に対する自分の考えと、発表の内容から得た情報とが、つながりを持った深い「気づき」として記述されている。
B	発表の内容に即した観点ごとの気づきや疑問が、やや短絡的、表層的である。	気づきや感想がやや短絡的、表層的である。
C	発表の内容に即した観点ごとの気づきや疑問があまり記述されておらず、短絡的、表層的である。記述の多くが発表の内容のみである。	気づきや感想が短絡的、表層的である。

■授業⑰の6グループの中間発表を動画で見直し、以下のルーブリックで評価。また、それぞれの観点別にスライドごとにコメント、フィードバックの総括コメントも追記して返却した(資料12)。

観点① FS先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりとしているかどうか。	
A (6点)	どのような問題意識(きっかけ)でFS先を選定したのか、訪問の目的(何を知らなかったか)が明確である。
B (4点)	FS先についての情報は明確に調べてあるが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。
C (2点)	FS先についての情報が調べてあるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかに触れていない。
観点② 施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができるかどうか。	
A (6点)	現場の人たちの持つ「課題」について、現場の人たちが具体的に「何を語ったか」が明確である。
B (4点)	現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「声」が見えにくい。
C (2点)	FS先の人たちの大変さについて訪問者として感想を述べているだけである。
観点③ 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。	
A (6点)	当該テーマについて何ができるのかが具体的にあり、それが実現可能であることを証明できている。
B (4点)	当該テーマについて何ができるのかが具体的に示されているが、それが実現可能であることを証明できていない。
C (2点)	何ができるのかが抽象的であり、それが該当テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。

■授業⑱の後に、Classi のアンケートを配信し、以下のルーブリックで評価。

【意識の変化について】 他の班のプレゼンや先生方からのアドバイスに対して「ここまでを目指さないといけないのか!」「なるほど、思ったのと違う!」と活動内容そのものや、活動の目的に関して「はっ」とさせられたこと、考えさせられたことを書きましょう。(400字を目安に)	評価	【問題点の克服】 現状の問題点を把握した時に、自分なりの解決方法とはどのようなものでしょうか。まずは、取り組みの中で「問題点」となっていることを挙げ、それに対して自分がどのように工夫して克服しようとしたか、しているかを書きましょう。(400字を目安に)
自分の思考の変化についてメタ的に分析することが出来ており、分析した内容が具体的に記述されている。	A(7点)	課題を解決していく上での「問題点」を的確に見つけ出せており、さらに、その「問題点」について自分なりの視点で具体的な対策を講じている。
自分の思考について分析できているが、思考の変化についてメタ的に捉えることが出来ておらず、直感的な内容が記述されている。	B(5点)	課題を解決していく上での「問題点」が「課題そのもの」の難易度に依存する内容しか見つけ出せておらず、その「問題点」の解決策が課題解決そのものと直結している。または、対策が具体的でない。
自分の思考について分析できておらず、内容が不明瞭。または、文字数が著しく足りない。	C(3点)	課題を解決していくうえでの「問題点」を明らかにできておらず、対策が直感的なものに過ぎない。または、文字数が著しく足りない。

■授業⑲の「最終発表 生徒相互チェック表」を回収し、教師が内容を採点。

「最終発表 相互チェック表」のルーブリック

	観点ごとのチェック/知識や考えの深まり	発表者のFS先の情報に対する自分の気づき
A	発表の内容に即した観点ごとの深い気づきや疑問が記述されている。	FS先に対する自分の考えと、発表の内容から得た情報とが、つながりを持った深い「気づき」として記述されている。
B	発表の内容に即した観点ごとの気づきや疑問が、やや短絡的、表層的である。	気づきや感想がやや短絡的、表層的である。
C	発表の内容に即した観点ごとの気づきや疑問があまり記述されておらず、短絡的、表層的である。記述の多くが発表の内容のみである。	気づきや感想が短絡的、表層的である。

■授業⑨の6グループの最終発表を動画で見直し、以下のループリックで評価。また、それぞれの観点別（中間発表時の観点3つに、観点を2つ追加）にスライドごとにコメント、フィードバックの総括コメントも追記して、Classiのコンテンツボックスにアップ。

観点① FS先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりとしているかどうか。	
A (6点)	どのような問題意識（きっかけ）でFS先を選定したのか、訪問の目的（何を知らたかったか）が明確である。
B (4点)	FS先についての情報は明確に調べてあるが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。
C (2点)	FS先についての情報が調べてあるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかに触れていない。

観点② 施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができるかどうか。	
A (6点)	現場の人たちの持つ「課題」について、現場の人たちが具体的に「何を語ったか」が明確である。
B (4点)	現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「声」が見えにくい。
C (2点)	FS先の人たちの大変さについて訪問者として感想を述べているだけである。

観点③ 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。	
A (6点)	当該テーマについて何ができるのかが具体的であり、それが実現可能であることを証明できている。
B (4点)	当該テーマについて何ができるのかが具体的に示きされているが、それが実現できることが証明できていない。
C (2点)	何ができるのかが抽象的であり、それが該当テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。

観点④ 視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	
A (6点)	スライドの構成が導入、展開、結論と全体を通して論理的にまとめられており、文字のフォントやグラフ・図が効果的に用いられている。
B (4点)	スライドの構成において結論に向けての論理的な展開が見えづらく、グラフ・図の効果も十分に活かされているとは言えない。
C (2点)	スライドに情報が羅列されているだけで、結論とそれ以外の部分のスライドとの関連性が見えない。

観点⑤ 発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	
A (6点)	発表者の声量や視線からこの課題に対する熱意が感じられる。
B (4点)	発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。
C (2点)	情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。

4. 検証

■目標の達成度・課題

目標 1) 生徒たちが、観点1～5に従って、FS先で学んだことを内在化して、発表することができる。

目標 2) 生徒たちが、観点1～5に従って、ロイロノートやパワーポイントを用いて発表することができる。

目標 3) 生徒たちが、「社会を知る」「社会の中の自己を知る」という点について学んだ実感を得て、これから社会でアクションを起こしていく方向性を考えることができる。

目標 4) 生徒たちが、この探究授業を通じて、学びに対する自分の意識の変化について言語化でき、学びの過程で生じた問題点についてどう克服しようとしたかを認知できる。

・目標 1)について

「FS 先を訪問するにあたって目的意識がはっきりしているか」という点に関しては、「調べているうちにこの団体が取り組んでいると知ったので」や「テレビ番組で特集されていて知ったので」など、その団体や企業を訪問して調査する「必然性」にまで切り込んで意識化できている班が少なかった。これは、プレゼンのレトリックの問題でもあるが、どこに焦点を当てて自分たちが探究活動をしようとしているのかという目的を明文化できていない班が多かったと言える。この問題は中間発表の段階で見られたので、教員フィードバックでより詳細に指摘をし、結論から遡って目的を省察することや、テーマ選びの際に考えた具体的な内容を掘り起こすなどを促し、最終発表では「目的」として明確に述べることでできる班が増えた。「設立の目的や問題点」に関しては事前の調査や疑問と仮説の設定などの効果もあり、中間発表の段階でよく述べることができていた。団体・企業の方と直接会話を交わすことによって、その団体を肯定的にとらえることに繋がり、課題や問題点の共有、活動の目的に関しては強く共感できていた。一方で、あまりに共感する志向が強すぎて、研究調査、分析の対象としての客観化ができず、活動内容を SNS で発信するといった「アクションプラン」にとどまる班もあった。教員からのフィードバックとして「企業の広告塔になってしまうだけではないのか」という辛辣な言葉も使い、あくまでも社会的課題を解決する方法を考察するために客観視しなければならないと促した。しかし、生徒が訪問またはオンラインでインタビューをしたのは最大で 2 団体であるため、確かに客観化は難しく、どうしても訪問した FS 先と自身との価値観の同一化が起こることに課題を感じた。つまり、「学んだことを内在化して発表することができる」は達成しているものの、内在化にとどまり、普遍化まで至っていないと言えるのではないかと。これは、今後の目標設定の課題ともいえる。

・目標 2)について

対象の生徒は普段の授業でもロイロノートでの資料の提出や、意見の共有、プレゼン資料の作成を行っているため、作業としては難なくこなすことができていた。また、提出箱に提出したカードを共有することにより、コミュニケーションツールとしても活用できた。特に、発表スライドの共有とプレゼンに対する質問の共有は、実際にプレゼンが行われている短時間で考察が終わることなく、プレゼンの後もじっくりと見返して省察することができていた。また、プレゼンのスライドはパワーポイントまたはロイロカードでの作成を指示した。パワーポイントの「アニメーション」は効果的ではあるが、これに頼りすぎると装飾に力が入りすぎ、内容を訴える構成力にかけてしまうことが懸念された。中間発表、最終発表ともに、アニメーションは過度に取り入れず内容を以下に構成するのみに注力できたと感じられる。一方で、一部の班で中間発表時にイラストや色彩の過度な使用が見られたため、修正を促した。

・目標 3)について

フェーズ 1 と 2 の段階で「社会について知る」ことはある程度達成していた。また、その社会の中で自分がいかにコミットメントしていくことができるのかという点に関してもフェーズ 1 の川中大輔氏の講演で触れられており、生徒も主体性をもってこの授業に取り組み、「自分が」という主語を常に意識することができていたと言える。一方で、「実際にどうアクションに繋げるか」という点に関しては、その事例が「3 年生の KG PEACEMAP」しかなかったため、具体的なイメージが持ちにくかったのかもしれない。その結果、中間発表時では「SNS で活動を啓蒙する」というアクションプランが目立った。中には中間発表の段階で、「貧困は人権の問題なので、学校の人権の授業案を自分たちが作成して提案する」や「男女共同参画センターと連携して啓蒙活動に取り組む」など、具体的に自分たちが行動を起こし、成果物に繋げるプランを提示する班もあったが、教員フィードバックではより具体的なスキームを示し、実行できる段階にまで練りこむように伝え、最終発表ではどの班もある程度具体的な方法を提示するに至った。3 年生が作成した「KG PEACEMAP」の事例を知ったことは、生徒自身が企画して町の人々にインタビューを実施すること、歴史を学んだことが実際にフィールドに形として残っていること、AR 技術を活用してアプリケーションを作成することができること、紙の作成物を印刷するための本格的なデザインができること、それを印刷するのに必要な費用について企業から協賛を取り付けることができること、といった高校生として社会にどのようにコミットメントできるのかという実例を知ることができたのは彼らにとって希望に繋がり、自らのアイデアを広く刺激することができたのではないかと。

・目標 4)について

資料8「ポートフォリオ」の設問1では中間発表を経てフィードバックを得た際にどのように意識が変化したのかを問うた。その中で、「企業の取り組みを否定的な観点からも見つめてみることも重要だと思った」や「アクションプランを実現するための取り組みなのに、それが実現できると示すものが（プレゼンの中に）一つもないのは問題だ」など、自分たちが授業の中でどのような活動をしてきたのか、それをどのように位置づけることができるのかといったメタ認知がなされ、それを言語化することができている。また、設問2では中間発表から最終発表に向けてプレゼンの内容を改善する際にどのような問題点があったのかを省察させた。「企業で取り組まれていることを自分が実際に体験し、それを社会に広めたいと感じていたが、それでは、自分がどう活かして活動に繋げるのかにまで至っていない」ことに気が付く生徒や「仏教文化と貧困支援を結びつけるといった斬新なアイデアに感銘を受けたが、それが実際どのように機能しているのかを知りたい」といったさらに探究的な関心を示す生徒もいる。授業での取り組みの問題点を把握し、それを解決するためにさらに取り組みを継続したいという意欲が表れてきていることは、「克服しようとしている」姿勢であると評価できると感じた。

5. 今後改善すべき点

・この授業は探究学習の基本的なスキルを習得することだけでなく、実際に課題を見出し解決していく過程で市民として社会にコミットメントしていく価値観を涵養することを目指している。その点で前者は、グループワークやプレゼンテーションの作成、フィールドワークや振り返りといった一連の学習手法を習得することはできている。一方で、後者の価値観の涵養に関しては、それぞれのフィールドスタディの経験の違いや、どのようにプレゼン作成に関わったのかという違いが個人の達成度に影響を及ぼしている。協同的な学びにおける学習意欲の向上や、自己肯定感と帰属意識の確立という面では効果を得たが、一方で個人としていかに課題に向き合っているのかという尺度としては把握しきれないというのが現状ではないか。もちろん、資料8にみられる「ポートフォリオ」や各授業での「学びの記録」でその一端を伺うことができるが、一つの言説として成果物として提示されているものではないため、個の深まりが十分に計ることができたとは言えないのかもしれない。社会心理学的な統計の手法を用いて、生徒の意識の変化を計測する試みを取り入れるとより具体的な生徒の変化を掌握できるだろう。

・生徒に「より広範な視野で社会的課題を捉えさせ、具体的なアクションプランを作成させること」の難しさは昨年度より引き継いだ課題であった。そのため、フェーズ1で社会には広範な課題が潜在していることを意識させ、関心を促し、先輩の取り組みを実例として提示することアクションプランを具体的にイメージさせることを意図した。しかし、時間的制約もあり、すべてを網羅することはできず、また、アクションプランの実例も豊富に提供できたとは言えない。これまでの一般的な学習の中で必然的に身につけてきた生徒自身にある学習者としての姿勢は、やはり受け身が基本であり、それをいかに能動的な立場として学習と向き合わせるのかという点に引き続き課題を感じた。自分たちは学びを与えられるのではなく、自分たちが想起するイメージを実現するためのアシストを受けているのだという学習者としてのパラダイムシフトを促すための、「仕掛け」を考えていかなければならない。

<成績の算出方法について>

テストを行わない探究授業ではあるが、大学進学のための資料として成績を算出せねばならなかった。以下のように評価物を生徒たちの学びを2つに分類して評価し、配点調整を行い、100点満点で成績を算出した。

- 1) 生徒の授業内の学び/思考：40点
- 2) 生徒の成果物に関する学び/思考：60点

- ・パフォーマンス評価として「ポートフォリオ」を活用した。活動ごとの「学びの記録」という即時的なポートフォリオとより時間を経て省察する「Classi アンケート機能」を用いたポートフォリオとの二種を組み合わせ、生徒の様々な場面でメタ認知を促した。評価にはルーブリックを用いたが、これは生徒にあらかじめ提示することを意識し、学習の指向を明らかにすることでより効果的に教育効果に繋がるように意図した。ルーブリックの問題点としては、評価者が複数に亘ることによる揺らぎが指摘されてきたが、今年は昨年度の一例を共有し、できる限り評価基準を等化するようにした。評価者の一人からは「今年度は3年生を担当していたため、クオリティの違いが鮮明であった」との評があった。1年生対象の本授業では最終発表を一つの達成ポイントとしているため、その中で相対的にクオリティの高い生徒には良い評価を与えることになるが、それが3年間を通してどの程度の達成度に値するのかという相対的な視点に欠けていた。WWLC関連カリキュラムとして開発されてきている各授業を通して、生徒をどのように成長させていくのか、そのような観点で評価し、どの程度の達成を目指すのかという、大きな枠組みから逆算し、1年次の生徒の達成目標を明らかにしておく必要があるのではないかと感じた。関連科目の全体としてのカリキュラムマネジメントは意図され、綿密に連関を意図してデザインすることができているが、評価の側面から逆向きに設計する発達段階に応じた評価のデザインが求められるのではないかと感じた。評価の等化についても、具体的なルーブリック運用事例としてコンセンサスを取ることで、他の教科への探究活動の評価方法への指針となるのではないかと考えられる。
- ・この授業は教育課程として実施している時程には含まれず、放課後に開講している授業である。よって、参加を希望する生徒はそもそも意欲や関心が高く、また、他の授業の学習に支障がなく、学校生活に余裕を感じている生徒が多い。よって、元来備わっている資質・能力が高い可能性があり、取り組みによる評価もおのずと高くなる。他の授業と同様に成績に算入し、大学進学の資料として用いる関係で、教務規定の範疇にあり、絶対評価で成績を算出することができない。そのことにより、この授業に参加していない他の一般的な生徒に比べて能力が高く、成果物に対しても高評価を与えうるにも関わらず、授業に参加している生徒の中で相対的に評価を付けなければならないので、点数としては低く算出している場合がある。そういった生徒は、他科目の成績よりもこの授業の成績が目立って低い点数が付くことがあり、自己肯定感を失い探究的な学びに対する意欲が低下してしまうことがあるのではないかと懸念している。もちろん、上記の事情を生徒に口述し、通知される成績に対するリテラシーを持たせることを心掛けているが、成績に対する振り返りを行い、フォローアップしていく必要もあるかもしれない。

<グローバル探求 BASIC 資料>

資料1： 年間シラバス

2021年度 WWLC グローバル探求-BASIC 年間学習指導案

2022.03.14

<社会を知る・社会の中の自己を知る>

授業回数	日	担当者	フェーズ目標	学習目標	授業内容(大項目)	授業内容(小項目)	準備物	授業時間外学習	提出物	評価対象	
1 学期	①	5月18日	上田 塚本			生徒発表	0-15 アイスブレイク 15-30 トレードオフ・SDGs概要・ゲーム説明 30-45 ゲーム、オリジナルカード作り 45-60 まとめ振り返り	カードゲーム 自らの色 黄色、青色カード 色鉛 音楽・スピーカー	なし	学びの記録	学びの記録
		6月1日	川中			SDGsカードゲーム	0-15 アイスブレイク/川中レクチャー 15-30 潜在している社会的課題について知る 30-45 ペアで考えをシェアして理解を深める 45-60 まとめ振り返り	社会的課題の仲間 ワークシート	なし	学びの記録	学びの記録
		6月7日	特任	・生徒たちがSDGsが身近な問題であること、自分たちの生活に結び付いていること、自分が大事だと大体理解できていること、 ・具体的なSDGsの課題が社会でどうなっているかを知っていること、 ・自分の関心がある程度はつきりしつつあること、 ・協働する集団作り、授業の雰囲気をつくること、 ・学びの記録ワークシートのねらいや記入方法を理解している		ガイダンス、SDGs入門	0-15 アイスブレイク/学びの記録ワークシート記入方法説明 15-30 SDGsの自分の価値観からみた優先順位づけ 30-45 ペアで優先順位づけ/順位づけの判断根拠要素 45-60 まとめ振り返り	17SDGsのカード マナボード 優先順位シート	なし	学びの記録	学びの記録
		6月15日	上田 塚本			社会的課題に関する理解	0-15 社会的課題が自分たちの知らない部分に潜む点を確認 15-30 グループで社会的課題について調べてまとめる 30-45 クラス内でシェアして理解を深める 45-60 まとめ振り返り	ロイノノート	関心のある社会的課題について調べてくる	学びの記録	学びの記録
		6月22日	上田 塚本			社会的課題に関する理解	0-15 関心のある社会的課題についての確認ポイントを確認 15-30 プレゼン 30-45 まとめ振り返り	ロイノノート	プレゼンの準備	学びの記録	学びの記録
		7月15日	能島			生徒が、自分の関心のある社会的課題と現実社会を結び合わせる ・身近にあるSDGsの課題「日本における子どもの相対的貧困」について具体的に説明できる ・自分たちのまわりにもそのような課題が存在し、そのような課題の解決に実際に従事している先輩がいることを知る	1 貧困と4 教育に関しての活動 実践を聞く	0-15 アイスブレイク/能島レクチャー 15-30 ワーク(前回の振り返り)付録でグループワーク 30-45 振り返りレクチャー 45-60 ワーク(学びの記録)	マナボード 付録	テーマについて関心のある事例のニュースをロイノで提出・共有	学びの記録

授業回数	日	担当者	フェーズ目標	学習目標	授業内容(大項目)	授業内容(小項目)	準備物	授業時間外学習	提出物	評価対象		
2 学期	⑦	9月14日	上田 塚本			個人発表	0-15 1人45秒の発表(教員は評価/各発表後に短くフィードバック) 15-30 * (生徒間の評価) 30-45 9つのグループ(4-5人)作り(非対称な生徒同士) 45-60 グループで行きたい課題を2つ選定(ロイノ発表資料作り)	発表資料(ロイノ)作成 ・行きたい場所の紹介2つ ・その理由を述べる →ロイノに提出(10/24) →中休み・昼休みに小発表2つを交え、グループで話し合い	関心チャート	学びの記録	学びの記録	
		10月9日	上田 塚本			グループ発表準備 グループ発表 投票	0-15 発表準備 15-30 各グループ2分間で発表(教員/生徒間評価、短くフィードバック) 30-45 自分が参加したいグループ2つ(A〜J)から投票、決定 45-60 (審判は教員で行い、後日Classで発表)	発表資料 グループ発表用シート 発表資料用シート	なし	発表資料(ロイノ)	発表資料(ロイノ)	
		10月19日	上田 塚本	・生徒がいくつかのSDGsに対する自分の関心を探る ・生徒が地域(ローカル)の美社会で活動している人や団体の取り組みをフィードバックを学ぶ ・生徒がSDGsに関する理解を深める ・生徒がフィードバックにおける学びの手法を理解する		フィードバックの手法について学ぶ	0-15 授業内容説明、「観点」「問い」を理解するワーク/振り返り 15-30 「観点」と「問い」を理解するワーク2/構成要素を 30-45 説明先についてネットを調べる 45-60 「観点」「問い」についての調べ	観点シート ロイノノート	なし	学びの記録	学びの記録	
		11月10日	上田 塚本			生徒がフィードバックに向けて「観点」と「問い」を設定する	0-15 授業内容説明、「観点」「問い」を理解するワーク3 15-30 「観点」と「問い」をシェアする(前半の3組) 30-45 まとめ振り返り	観点シート ロイノノート	「観点」と「問い」の決定ワークシートを完成させる	学びの記録	学びの記録	
		11月16日	上田 塚本			生徒がフィードバック先を自分のフレームでもって切り取った美社会を肌で感じる ・生徒が社会との接点を自ら作り出す楽しさを知る	0-15 前週に発表した振り返りシートとワーク4 15-30 「観点」と「問い」をシェアする(後半の3組) 30-45 まとめ振り返り	観点シート ロイノノート	「観点」と「問い」の決定ワークシートを完成させる	学びの記録	学びの記録	
		12月11日	西堂 上田 塚本			3年生による「KG PEACE MAP」(ハンズオンラーニング)の紹介 ・自分たちが実行できるアクションプランの案を知る	アクションプランの実例を知る	0-15 授業内容の説明、3年生の成果物を理解する意図 15-30 早くについてインタビュー-動画を視聴して理解 30-45 3年生による作成の過程と達成内容の説明 45-60 まとめ振り返り	3年生の作成したワークシート KG PEACE MAP	なし	振り返りシート	
3 学期	⑧	1月18日	上田 塚本			フィードバックの手法について学ぶ	0-15 前週に発表した振り返りシートとワーク4 15-30 「観点」と「問い」をシェアする(後半の3組) 30-45 まとめ振り返り	観点シート ロイノノート	「観点」と「問い」の決定ワークシートを完成させる	学びの記録	学びの記録	
		1月25日	西堂 上田 塚本			3年生による「KG PEACE MAP」を使ったフィードバック ・自分たちが実行できるアクションプランの案を知る	アクションプランの実例を知る	0-15 KG PEACE MAPについての知識の確認 15-30 学内フィードバック 30-45 振り返りシート 45-60 まとめ振り返り	3年生の作成したワークシート KG PEACE MAP	なし	振り返りシート	振り返りシート
		2月15日	上田 塚本			2学期のフィードバックで学んだことを内化する ・以下の6つの観点について、フィードバックで得た学びを整理し、また、自分たちが起こすアクションを考え発表まで発展させる ①フィードバックで再確認できたこと(インターネットや書籍を通じて既に知っていたことを直接現場で確認することができた) ②フィードバックで新しく知った知識 ③フィードバックだからこそ分かった現場の人の考え(思いや感情) ④フィードバックだからこそ分かった現場の人の心が通ったこと ⑤フィードバックに参加する前に自分たちがもっていたイメージで参加したことによって変わったこと ⑥フィードバック先の現場の人と向き合っている課題に対して、高校生である自分たちができること ・生徒が自分たちの学びを発表する機会を得る ・発表をして得たフィードバックから、さらに学びを深める ・フィードバックでさらに深めた内容を発表する機会を得る		発表準備 発表準備	0-15 発表の概要紹介・中間報告のスケジュール発表 15-30 中間報告の5つの発表項目説明、情報のまとめの作業 30-45 作業 45-60 最後発表相互評価(フィードバック)の観点を説明	発表資料(ロイノ)	発表資料(ロイノ)	発表資料(ロイノ)

授業回数	日	担当者	フェーズ目標	学習目標	授業内容(大項目)	授業内容(小項目)	準備物	授業時間外学習	提出物	評価対象	
3 学期	⑨	2月22日	上田 塚本			発表準備	0-15 発表の概要紹介・中間報告のスケジュール発表 15-30 中間報告の5つの発表項目説明、情報のまとめの作業 30-45 作業 45-60 最後発表相互評価(フィードバック)の観点を説明	発表資料(ロイノ)	発表資料(ロイノ)	発表資料(ロイノ)	
		2月26日	上田 塚本 西堂 泉川 穂川 茂雄			中間報告	0-15 グループ6つによる発表 15-30 同上 30-45 グループ6つによる発表 45-60 同上	発表資料 発表資料(ロイノ)	発表資料(ロイノ)	相互評価表 相互評価表	
		3月9日	上田 塚本			再発表と再評価①	0-15 発表の概要紹介・発表を見ながらワークシート記入 15-30 発表を見ながらワークシート記入 30-45 発表を見ながらワークシート記入 45-60 意見を共有/まとめ	発表資料の動画(Class) ワークシート	・再発表の発表 ・再発表の発表(Class) ・ワークシート	発表資料(ロイノ)	相互評価表 相互評価表
		3月14日	上田 塚本 泉川 田中			最終プレゼン	0-15 発表① 15-30 発表② 30-45 発表③ 45-60 発表④ 60-75 発表⑤ 75-90 発表⑥ 90-100 発表⑦	発表資料(ロイノ)	発表資料(ロイノ)	発表資料(ロイノ)	発表資料(ロイノ)
						発表準備	0-15 発表の概要紹介・中間報告のスケジュール発表 15-30 中間報告の5つの発表項目説明、情報のまとめの作業 30-45 作業 45-60 最後発表相互評価(フィードバック)の観点を説明	発表資料(ロイノ)	発表資料(ロイノ)	発表資料(ロイノ)	発表資料(ロイノ)
						発表準備	0-15 発表の概要紹介・中間報告のスケジュール発表 15-30 中間報告の5つの発表項目説明、情報のまとめの作業 30-45 作業 45-60 最後発表相互評価(フィードバック)の観点を説明	発表資料(ロイノ)	発表資料(ロイノ)	発表資料(ロイノ)	発表資料(ロイノ)

記録日 _____

高等部グローバル探究 BASIC 学びの記録

_____ 年 _____ 組 _____ 番 氏名

本日の授業で知った新しい知識（事実）	他者や自分の考え・意見

(他) = 他者の考え・意見 (自) = 自分の考え・意見 (先) = 先生の考え・意見
(!) = 驚き (?) = 疑問 (追) = 別途情報収集の必要あり (参) = 参考図書等

記録日 1/25 (火)

高等部グローバル探究 BASIC 学びの記録

1 年 G 組 24 番 氏名



本日の授業で知った新しい知識 (事実)	他者や自分の考え・意見
<p>①ワールドスタディで再確認はゴ 25年デフレの日本 程気が悪いと貧困に+コトでしんどくに タシボールの数②</p>	<p>子どもの貧困問題の実態を 知りたくて訪問した。今は2人 ①(山) 責任をかんじた。②(山) コト前は20人 ③(山) ボランティアとしてくれる人がいる から成り立っている。</p>
<p>②宣伝(CM)ではなくポスターや母親のロコミでなすた。 手づきか簡単 メールアドレスを送ればできる。 1700の専売店からでもメルリのとめいで配達 LINE。(メールアドレスを持っていない人のため) 大胆な宣伝をしていないため、ボランティアが集まり にくい 季節感の感じられる内容</p>	<p>④(山) とても役立っている。「支えられてる 1人じゃないんだ」と感じた ⑤(山) 新しい宣伝のかたち ⑥(山) 自分がよければそれでいい という「個人主義」「資本主義」の考え方のえいほう? 宗教的な思想もかんけいしている?</p>
<p>③(山) 利休心に触れる所がおてらおやつくらぶジ モお母さんに届ける お坊さんがたすされるのは宗教的にむずかしい 母子が被災したというニュースをみて、立ち上がった。 日用品も配達。 支えられている。見守られている→一筋の光 支援が増えている。支援をさせてくれてありがとう と支援者が言う。</p>	<p>④(山) 親が 子どものプレレキ年代からやめられて 何を送ったらいいかわからない ⑤(山) 筋絶でいれない考えが「ステキ システムを改良 考え方にとらわれない」 何事にもチャレンジ!! みんなと話し合って (1人でがんばらない) 余裕のある世帯からのメールかもしれないが、 石巻にはさすがに即日配達 市役所の窓口相談は時間がかかる</p>
<p>④ ボランティアの参加人数② 宗教にとらわれない、天理教の信者の方もきていたが コトの準備で定員が10人以下に。 メイドレーや電話が切れたりお母さんとコミュニケーション がとれなくなる。 賞味期限ギリギリのものが送られてきて、はいき。</p>	<p>⑤(山) 家族やしやの代受のない話 これが目指すボランティア像...? ⑥(山) 多様性の中で自由がきく 「民主主義」社会の中でも大切なこと 日本の政治家は高齢者向けの政策ばかり 「色々な人がいる」ということをみんなが理解できる社会 づくり。</p>

(他) = 他者の考え・意見 (自) = 自分の考え・意見 (先) = 先生の考え・意見
(!) = 驚き (?) = 疑問 (追) = 別途情報収集の必要あり (参) = 参考図書等

グローバル探求BASIC 中間発表会 学びの記録 (相互評価表)

月 日

組 番 氏名

※これは相手のプレゼンを評価することで、評価者みずからがどのような事に気が付いたのか、どのような事に疑問をもつことが出来たのか、を記録するためのシートです。

観点① F5先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりとしているかどうか。	G ()	評価【 】	疑問に思ったこと・意見・アドバイス	G ()	評価【 】	疑問に思ったこと・意見・アドバイス
A どのような問題意識(きっかけ)でF5先を選定したのか、訪問の目的(何を知りたかったか)が明確である。						
B F5先についての情報は明確に調べてあるが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。						
C F5先についての情報が調べてあるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかに触れていない。						

観点② 施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができているかどうか。	G ()	評価【 】	疑問に思ったこと・意見・アドバイス	G ()	評価【 】	疑問に思ったこと・意見・アドバイス
A (当事者の声)が明確である。						
B 現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「何を語ったのか」(当事者の声)が見えにくい。						
C F5先の人たちの大変さについて訪問者として感想を述べているだけである。						

観点③ 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。	G ()	評価【 】	疑問に思ったこと・意見・アドバイス	G ()	評価【 】	疑問に思ったこと・意見・アドバイス
A 当該テーマについて何ができているかが具体的にであり、自分たちの資源を活用しそれが実現可能であることを証明できている。						
B 当該テーマについて何ができているかが具体的に示きされているが、それが実現できることが証明できていない。						
C 何ができているかが抽象的であり、それが該当テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。						

他の人が訪れたF5先は自分の想像していた通りの施設でしたか? 現場の人たちの「課題」に思いもよらなかったリアリティを感じましたか? 「気づいたこと」をまとめよう。						
---	--	--	--	--	--	--

グローバル探求BASIC 中間発表会 学びの記録 (相互評価表) 2月26日

A組 3番 氏名

※これは相手のプレゼンを評価することで、評価者みずからがどのような事に気が付いたのか、どのような事に疑問をもつことが出来たのか、を記録するためのシートです。

観点①	FS先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりしているかどうか。	G(2)	疑問に思ったこと・意見・アドバイス RSBT目標という名称で、CO2に関する目標が定められているという事は知らなかった。勉強になりました。事前に細かいところまでプレゼンがスライドに対して、データを集めていることがよくわかる発表でした。
A	どのような問題意識(きっかけ)でFS先を選定したのか、訪問の目的(何を知っていたか)が明確である。	評価【B】	疑問に思ったこと・意見・アドバイス 片岡さん自身の夢からプレゼンが始まっていてユニークな面白かったです。問題意識の強さが、スライドのグラフに表れていて、数値の比較がよかったです。
B	FS先についての情報は明確に調べてあるが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。	評価【A】	疑問に思ったこと・意見・アドバイス プレゼンテーションの構成がわかりやすく、内容も興味深かったです。スライドの構成もよく、見やすかったです。
C	FS先についての情報が調べてあるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかに触れていない。	評価【C】	疑問に思ったこと・意見・アドバイス プレゼンテーションの内容が面白かったです。スライドの構成もよく、見やすかったです。

観点②	施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができているかどうか。	G(2)	疑問に思ったこと・意見・アドバイス オリエンテーションの具体的な内容がエピソードが織り込まれていて面白かったです。Asicsが外部にどういった役割を担っているのか、具体的な事例がわかりやすかったです。Asicsの歴史もよくわかりました。
A	現場の人たちの持つ「課題」について、現場の人たちが具体的に「何を語ったか」(当事者の声)が明確である。	評価【A】	疑問に思ったこと・意見・アドバイス プレゼンテーションの内容が面白かったです。スライドの構成もよく、見やすかったです。
B	現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「何を語ったか」(当事者の声)が見えにくい。	評価【B】	疑問に思ったこと・意見・アドバイス プレゼンテーションの内容が面白かったです。スライドの構成もよく、見やすかったです。
C	FS先の人たちの大変さについて訪問者として感想を述べているだけである。	評価【C】	疑問に思ったこと・意見・アドバイス プレゼンテーションの内容が面白かったです。スライドの構成もよく、見やすかったです。

観点③	次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。	G(2)	疑問に思ったこと・意見・アドバイス Asicsの取り組みを応援するために、関西学院高等部のInstagramを使うと考えるようにInstagramアカウントを始めるようにするかと勧められていました。
A	当該テーマについて何ができているのか、それが実現可能であることを証明できている。	評価【B】	疑問に思ったこと・意見・アドバイス プレゼンテーションの内容が面白かったです。スライドの構成もよく、見やすかったです。
B	当該テーマについて何ができているのか、それが実現可能であることを証明できているが、それが実現可能であることを証明できていない。	評価【B】	疑問に思ったこと・意見・アドバイス プレゼンテーションの内容が面白かったです。スライドの構成もよく、見やすかったです。
C	何ができているかが抽象的であり、それが該当テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。	評価【C】	疑問に思ったこと・意見・アドバイス プレゼンテーションの内容が面白かったです。スライドの構成もよく、見やすかったです。

他の人が訪れたFS先は自分の想像していた通りの施設でしたか？現場の人たちの「課題」に思いもよらなかったリアリティを感じましたか？「気づいたこと」をまとめよう。

3班のFS先であるJALには、私もサマンバとして訪ねさせていただきました。3班と同じで、コロナウイルスの影響で社員達の給料が減ったために、メンタル面で苦しむかと思っていたのですが、「コロナをむしろチャンスとして考えている」という声も聞かれました。JALの魅力が改めて確認できました。利益が減ったからという理由ではなく、社員さんにとって、家族との時間が増えたという明るい声も聞かれました。私はこうした学習室を見ることができたので、どの情報も新鮮に感じられました。このように、JALでもそうでしたが、そもそもSDGsに関わりたい、良い行いをしたい、のにも関わらず、知名度が低いというところが課題になりやすいというところは今回のFSで初めて知りました。もっと救われる人が多いのかも、これは感じました。

グローバル探求BASIC 中間発表 振り返りシート【再解釈と再構築】

動画のグループ名	
----------	--

観点① FS先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりしているかどうか。
A どのような問題意識（きっかけ）でFS先を選定したのか、訪問の目的（何を知りたかったか）が明確である。
B FS先についての情報は明確に調べてあるが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。
C FS先についての情報が調べてあるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかに触れていない。

□発表者の問題意識は何ですか？

□発表者の訪問の目的は何ですか？（観点と問い）



☆この2つは一致していると本当に納得できますか？「いいえ」の場合は、引っ掛かる点はどんな点ですか？

観点② 施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができるかどうか。
A 現場の人たちの持つ「課題」について、現場の人たちが具体的に「何を語ったか」が明確である。
B 現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「声」が見えにくい。
C FS先の人たちの大変さについて訪問者として感想を述べているだけである。

□施設設立の目的/目標/取組は何ですか？

□現場の人たちの具体的な問題点/課題は？

□現場の人たちのリアルな「声」はどんな「声」？

--	--

☆この3つの項目は、ストーリーとして

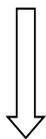
分かりやすくつながっていますか？

「いいえ」の場合は、引っ掛かる点はどんな点ですか？

観点③ 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。	
A	当該テーマについて何ができるのかが具体的であり、自分たちの資源を活用しそれが実現可能であることを証明できている。
B	当該テーマについて何ができるのかが具体的に示されているが、それが実現できることが証明できていない。
C	何ができるのかが抽象的であり、それが該当テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。

□ <振り返り> 当該テーマ/問題意識/訪問目的

□ 提案内容 (What/Who/Where/When/Why/Which+How)



☆この2つにつながりを感じますか？「いいえ」の場合は、引っ掛かる点はどんな点ですか？

☆どこを工夫すれば実現可能性はもっと上がる？

□ グループのまとめ

☆発表のハイライト☆

□ 発表全体の中で、一番伝えたいことが伝わってきた場面、一番発表内容に魅力を感じた場面 / どのような要素がそうさせていた？

場面
(分、内容)

要素

■ 発表全体の中で、一番工夫や改善が必要な場面、一番理解ができなかった場面 / どのような要素がそうさせていた？

場面
(分、内容)

要素

観点④ 視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。

- A スライドの構成が導入、展開、結論と全体を通して論理的にまとめられており、文字のフォントやグラフ・図が効果的に用いられている。
- B スライドの構成において結論に向けての論理的な展開が見えづらく、グラフ・図の効果も十分に活かされているとは言えない。
- C スライドに情報が羅列されているだけで、結論とそれ以外の部分のスライドとの関連性が見えない。

□一番効果的だと思うスライドは何枚目？/どんな点が良い？

枚目

■工夫を必要とするスライドを2つ挙げよう/どう工夫する？

枚目

枚目

観点⑤ 発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。

- A 発表者の声量や視線からこの課題に対する熱意が感じられる。
- B 発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。
- C 情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。

※自分の発表のみコメントしよう

■自分の発表の仕方について、工夫すべきところはどんな点？

設問1：【意識の変化について】

他の班のプレゼンや先生方からのアドバイスに対して「ここまでを目指さないといけないのか!」「なるほど、思っていたのと違う!」と活動内容そのものや、活動の目的に関して「はっ」とさせられたこと、考えさせられたことを書きましょう。(400字を目安に)

- 私達は最初、企業の行なっている活動を細かに調べることで、それらを生かして企画が作れるだろうと思い、企業について沢山調べ、インタビューしました。そして、それらによって得た情報をプレゼンや原稿に沢山盛り込みました。しかし、「それではPanasonicの宣伝をする人になってしまうよ。」と言われ、はっとしました。企業の活動を細かに調べることで、それも確かにとても大切です。しかし、今、企業が行なっている、とはいえ、それらのプロジェクトが完璧とはもちろん限りません。むしろ、否定的な観点からプロジェクトを見つけることも重要になってくるのだろうと感じました。そして、その穴をどのように埋めるか、私達が考えて提案し、そこからSDGsの輪が広がっていくこと、これが1番の理想型だと思いました。他にも、プレゼンにおいては、あまりデザインをしすぎてはいけないと言われている班があり驚きました。見ている限りでそんなごちゃごちゃはしていないかなと思っていて、ダメ出しがあったので、本当に必要な情報を簡潔にまとめるスキルの大切さを改めて痛感しました。
- 少々下記のものと同様の可能性があるが、以下が考えさせられたことである。①私達がおてらおやつクラブに訪問した理由について、そこに訪問しなければならない必然性のある理由が必要であったという指摘 ②アクションプランの実現性を示しているかという観点の欠如 ③お母さんの声と現場の声の区別ができていないといった問題 ①について、おてらおやつクラブにしか当てはまらないものは、このプレゼン内で「寺院とnpo法人という特異性への関心」と言っていた。個人的に、これはその必然性を示すと考えていたが、すこし説明が蔑ろになっており、私達のもつ「仏教精神がどれほど貧困支援につながるのか」という興味が見えにくいかもしいかなと考えるようになった。②は、確かに内容やその効果については足りないもののそこそこは述べられていた。発表前はこれで万全だと思っていた。しかし、この授業の目的はアクションプランを実現することであるにも関わらず、それができると示すものが一つもない。これは確かに大問題であると後々気付かされた。③は確かにそうである。お母さんと当事者では立場が違うのでそれを明確にしておかないと聞き手は困惑の一途を辿ることとなる可能性がある。この判断を聞き手まかせでいいと思っていた私たちがいたのではないだろうか。
- 訪問の目的やなぜその企業をFS先に選んだのかといったことをはっきり明確にすることが大切というのは前から教えられていたが、今回の中間発表で他の班のプレゼンや先生方からのアドバイスを聞いて、ここまで明確に詳しく言わなければならないのかと思った。訪問の目的が弱いという指摘は前から受けていたがどう詳しくすれば良いかわからなかった。中間発表で私たちの班がどうダメなのかよくわかって良かった。中間発表の時は、私たちはアシックスのような企業とは違って環境問題改善に直接貢献することはできないため、アシックスの取り組みをSNSで紹介して参加を呼びかけることくらいしかできないと考えていた。しかし、先生方からアドバイスや評価をもらって、アシックスの取り組みから私たちがオリジナルに考えた取り組みを提案しなければならなかった。また、先生方からのフィードバックや他の班の人からの質問を見て、私たちの中間発表の「私たちにできること」は具体性がなかったと思った。"なぜそれを実施するのか?どのように実施するのか?"という質問に対して答えることができなくて、そこまで詳しく考える必要があるのかと思った。
- 1つ目は、JALスカイ大阪の取り組みは本当に他に類をみないのか、というご指摘です。この範囲の原稿は私が担当したのですが、私の悪い癖である、とりあえずプレゼンは「何何は何何だ」と簡潔に強調させたいだろうという考えがもたらしたなと思いました。2つ目は、JALスカイ大阪の取り組みを発信することは労働環境に対する関心を高める一つの手段に過ぎず、それを最終目的にするのはおかしいという先生のご指摘です。今思えば、指摘いただいた流れは頭では分かっていたのですが、企業とタイアップした広報の取り組みが一番インパクトが強いのでとりあえずそれを際立たせとけばいいだろうという安易な考えからあのような発表に至りました。発信者の頭ではわかっているけれどもそれは口に出さないと聞いている人には伝わらない、というプレゼンの根本的な意義を確認できてよかったです。

設問2：【問題点の克服】

現状の問題点を把握した時に、自分なりの解決方法とはどのようなものでしょうか。まずは、取り組みの中で「問題点」となっていることを挙げ、それに対して自分がどのように工夫して克服しようとしたか、しているかを書きましよう。(400字を目安に)

- 私達の班は、環境問題に関心がある班で、主に地球温暖化などを問題として意識しました。その上で、暮らしにSDGsを組み込んだ活動をしている藤沢市スマートタウンの活動に辿り着き、インタビューさせていただきました。そこについて調査中に、環境問題だけではなく、しっかり住民は快適に過ごせているのか？宣材写真に写っている家はどれもこれも似てしまっているけれど、太陽光パネルを設置するために、それは仕方ないことなのか、という住民側に起こりうる暮らしに関する問題も浮かび上がってきて、そのように社会問題にアプローチしよう！という志の元生まれた活動だとしても、必然的に問題が起こってしまうのだなと感じ、それらに対して解決方法を考えました。私達は、Panasonic以上にサステナブルで、更に個性豊かな街づくりを夢見て、まず学びを深めようとスマートタウンで行われているイベントに参加することを考えました。そこで得たことを活かして、世間に広める重要性を感じたのです。しかし、それでは主体的とは言えない、そこからどう活かすのか？を先生が指摘してくださったので、主体的な活動としてバザーを提案しようと班内の振り返りで話が出ました。それについて最終発表でお話しさせていただこうと思っています。
- まずスライドが文字数が多く見にくかったのでアニメーションや文字を少なくしレイアウトを変えました。自分達が実際に行ったおてらおやつクラブ様でのボランティア活動の感想や考えたことを自分達が提案したアクションプランと結びつけて伝えようと思いました。また現場の人の抱えている課題とお母さんが抱えている課題が複雑に絡み合っていたので内容をわかりやすくしました。アクションプランに関しては、もっと具合的な方がいいとおっしゃっていたのでできるだけ詰めていきたいと考えています。なぜおてらおやつクラブ様にしたのか、またなぜそこに小駄をやるのが薄かったので自分達の目的とおてらおやつクラブ様の活動をつなげて、具体的かつ深く伝えたいです。自分達が考えたことと団体の方が行ったことへの感想との違いが分かりにくく自分達が伝えなかったように相手に伝わっていなかったので工夫して伝えたいなと思いました。自分達の班にしかないポイントやインパクトをつけつつ、発表の仕方やスライドのレイアウトにも気を配って中間発表よりも良い発表ができるようにみんなと協力していきたいです。
- 私の発表の課題はフィードバックに鑑み、主に以下のものが挙げられる。①アクションプランの詳細と私たちの想い、その活動によって生じる効果については説明ができていたが、その実現性が示されていないこと②データ等の具体的なエビデンスの乏しさ③訪問先がおてらおやつクラブでなければならないという独自性ある理由の欠如①、②、③を踏まえ、他のメンバーと意見を出し合いながらその他のメンバー担当のパートとの相互連携を図り一体感のある発表を目指して次のような対策を練った。対策①子どもの貧困問題という「人権教育」プログラムの授業案を以下のように設定し、八尋先生にそれを提出。その後このプレゼンが示すすべての観点から説明、議論を行い、実現を目指す。この内容を加える。(1)子どもの貧困の現状の講義→(2)その講義で感じたことを自分のワークシートで整理→(3)それをグループ内で共有→(4)それぞれグループ内で自分達ができることを考える。→(5)ワークシートでプログラムの総体に関する自分が感じたこと等を整理 ※ワークシートは八尋先生と協力して作成(教材はそのワークシートとする) 対策②1年単位での日本の子供の貧困率の増減を示すグラフを発表時に提示する。対策③訪問理由の、「寺院X貧困支援という珍事がもつインパクト」について、以下のような説明を追加する。・「お供え物」という仏教文化と貧困支援を結びつけるといった斬新なアイデアに感銘を受け、それが実際どのように機能しているかということにも関心を持ちました。
- 私たちの班のテーマは労働環境と決まっていたのですが、労働環境の何に注目してこのテーマにしたのか？と言うことが、プレゼンを考えていく中であやふやになってきているので、もう一度軸を考え直し、ブレないようにしていくことが1番大切だと思います。アクションプランとして、他の班も悩んでいると思いますが、私たちはInstagramを挙げましたが、インスタグラムで何をあげるのか、労働環境への改善のために自分達が今からでもやっつけていけることが、序盤の方で止まっているので、少しずつ実現可能なことへとどうさせていかなければいけないと思いました。

資料9：最終発表パワーポイント資料

G6 テーマ「子どもの貧困」FS先「おてらおやつクラブ（奈良県）」題目「利他心の心に触れる」

<h3>おてらおやつクラブ</h3> <p>利他心の心に触れる</p> 	<h3>利他心とは</h3> <p>他人の利益を重んじ他人が利益を得られるように振る舞おうとする心</p> 	<h3>日本の貧困問題の現状</h3> <p>7人に1人の子供が貧困家庭</p> 	<h3>訪問目的</h3> <p>「日本の苦しむ子どもたち、家族がいるという社会の現状知り行動する 私たちはどのような意識改革をおこなうべき？ →ヒントを探る」</p>
<h3>なぜこの団体に興味を持ったのか</h3> <p>興味を持った共通の課題→子どもの貧困問題</p> <p>なぜ？→当事者と年齢近いのに身近な視点がない そんな時におてらおやつクラブを紹介している本に出会う 印象に残った理由 ・寺院が運営するNPO法人 ・お供え物を活用→オリジナルティ</p>	<h3>活動概要</h3> <p>2013年の大阪の母子殺害事件がきっかけ</p> <p>【目的】 ・貧困家庭等に対してお寺に提供された食料・日用品などを受け入れ神様からのお下がりとして配給 ・振動活動 ・貧困問題に関する啓発活動 ・子どもの支援</p> <p>※地域社会が寄り添いながら子どもの貧困問題の解決に寄与する</p>	<h3>現場の人が抱えている課題と対策</h3> <p>あたらぬおてらおやつクラブの課題 ・実現している自然な活動のアイデア、情報の取扱い ・活動の普及、確立 ・地域の支援と繋がっていない貧困家庭→見えない貧困問題 ・個人情報の保護→メカニカルな保護</p>	<h3>コロナ禍での課題と対策</h3> <p>お歳ごんたらの課題 ・感染がなくなる ・スマートフォンで食費光熱費？ ・仕事がなくなる →メンバーでの話し合いは毎日自粛明け おてらおやつクラブの課題 人不足(ボランティア)の減少</p>
<h3>自分たちが考えたこと</h3> <p>①メルカリの匿名配送やLINE等の身近なツールを利用 ②自分達の不利益よりも本意に困っている人に対して迅速な対応をすること→人間的な部分 ③ボランティアに関する人出不足解消 →私たちがボランティア活動を通じて貢献 →高等部内でのネットワークを通じて広める</p>	<h3>現場の声</h3> <p>②お歳さん方の声 「支えられているという実感が湧いた」「ひとりじゃないと思った」「見守ってくれる人がいると嬉しくなった」</p>	<h3>現場の声</h3> <p>③支援している人たちの声 「支援させてくれてありがとう」「何かしたいと思ったから支援できて嬉しい」 →悩んでいる人を助けるだけでなく支援してほしいけど行動できない人の利他心を受け止めてくれる団体</p>	<h3>OUR ACTIONS</h3> <p>利他心=関西学院のスクールモットー「Mastery for Service」</p> 
<h3>ACTION 1</h3> <p>高等部内で「子供の権利デー運動」を実施 ・礼拝や人権教育などを利用して現状を理解してもらう ・人権教育等でグループワーク等を実施 自分が何ができるかを能動的に考える ボランティア運動、寄附運動に貢献し始める</p>	<h3>ACTION 2</h3> <p>「ボランティア活動参加イベント」の実施 ・各クラスごとにそれぞれボランティア団体の活動に参加 見えたかったものが見えてくる EX)貧困問題の「表面的でない本質的な部分」など</p>	<h3>訪問したからこそ分かったこと</h3> <p>利他心を持ち他人の利他心を受け止めることの大切さ 自分達の不利益となることでも助ける 関学のモットー「Mastery for Service」がボランティア活動でも必要</p>	<h3>訪問したからこそ感じたこと</h3> <p>「利他心」を胸に、ボランティアにより一層参加 貧困問題に取り組んでいる団体を履きしに発信 ↓ 他人の利他心を受け止めて感じてほしい</p>

G1 テーマ「環境問題」FS先（オンライン）「Panasonic」題目「持続可能なまちづくり—FujisawaSSTから私たちの街へ—

<h3>持続可能なまちづくり</h3> <p>—FujisawaSSTから私たちの街へ—</p> <p>1班 若田真結 上田優楽 田中さち</p>	<h3>西宮市のCO2排出量</h3> <p>産業部門の割合が少なく、民生家庭部門が多くを占めている →住宅都市としての特徴</p> 	<h3>CO2排出量増加の要因</h3> <ul style="list-style-type: none"> 人口の増加 家電製品の所有台数の増加 ライフスタイルの変化 <p>→市民一人ひとりの意識、行動の改革が必要</p>	<h3>オンラインインタビュー</h3> <p>調査結果</p> <p>Panasonic</p>	<h3>問題意識</h3> <p>地球温暖化 CO2削減目標 →テーマ「環境問題に特化した企業」 →まちづくりに貢献</p>	<h3>目標①生活水の30%削減</h3> <p>達成○ 生活用水を節水可能なインフラを整備</p>
<h3>目標②CO2の排出量70%削減</h3>	<ul style="list-style-type: none"> 戸建て住宅 住宅1軒分の消費電力を賄える太陽光パネルを設置できる 集合住宅や商業施設 施設1棟分の消費電力を賄える太陽光パネルは設置できない 	<h3>目標③再生可能エネルギーの利用率30%以上</h3> <p>達成○ 1990年よりも85%削減</p>	<h3>目標④再生可能エネルギーの利用率30%以上</h3> <p>達成○ 戸建て 消費エネルギー<再生エネルギー 集合住宅 消費エネルギー>再生エネルギー</p>	<h3>一般的なお家の太陽光パネルの発電量</h3> <p>→435kWh/月 戸建て 消費電力 →390kWh/月 15階建マンションの消費電力 →1725kWh/月</p>	<h3>課題</h3> <p>今後14-15階建てのビルの建設も予定 屋上に設置された太陽光パネルだけではビル1棟分の電力をまかなえない 現在は目標を達成できているが 今後は達成できなくなってしまうかもしれない</p>
<h3>課題</h3> <p>今後14-15階建てのビルの建設も予定 屋上に設置された太陽光パネルだけではビル1棟分の電力をまかなえない 現在は目標を達成できているが 今後は達成できなくなってしまうかもしれない</p>	<h3>対策</h3> <ul style="list-style-type: none"> 戸建て住宅で生産された電力の余剰分を集合住宅や商業施設に活用 住民一人ひとりの省エネ意識を向上 自然のエネルギーを最大限に活用 	<h3>自然のエネルギーを最大限に活用</h3> <ul style="list-style-type: none"> 住宅の断熱性を高める 海風をうまく取り込む エアコンの稼働率を下げる 	<h3>問い</h3> <p>プロジェクト設立時に掲げていた、環境・エネルギーに関する目標は、実際は現時点でのくらい達成されているのか。 →実現可能な目標を立てる目安に</p>	<h3>問い</h3> <p>タワマンに統一感と個性のある景観形成とあるが、その両立はできていないのではないかと、住宅デザインに個性を求める人は今のスマートシティには住みにくいのではないかと</p>	<ul style="list-style-type: none"> 全体の統一感と個人の個性の両立 色んな人が次世代の暮らしを進めるべき <p>今後新たに開発されるSSTでは住宅デザイン規制を改善し、個性あふれる街にしていきたいのか</p>
<h3>現デザインの理由</h3> <ul style="list-style-type: none"> 環境配慮のデザイン 統一感と個性のバランス 藤沢市の規定元々高い引き継ぐ 共通するビジョン・共有された価値観 	<h3>統一感と個性のバランス (X両立)</h3> <p>区画ごとのデザイナーマ →街の資産価値に繋がっている</p>	<h3>共通するビジョン・共有する価値観</h3> <p>パートナー企業、藤沢市の官民、街に関わる全員が一体に 調和のとれたまちづくり</p>	<h3>街の完成図=共通するビジョン</h3> 	<h3>ルールに不満+共有された価値観</h3> 	<h3>デザインを統一</h3> <p>○ 共通するビジョン X 共有する価値観</p>
<h3>タワマンの改正</h3> <ul style="list-style-type: none"> 壁の色はナチュラルカラー 屋根の色は彩度低く <p>環境配慮に関係のない部分</p>	<h3>課題</h3> <p>住民の中にはルールを借助に感じている人があるかも知れない →今後住民から意見が出た場合は変更も検討!</p>	<h3>CO2排出量増加の要因</h3> <ul style="list-style-type: none"> 人口の増加 家電製品の所有台数の増加 ライフスタイルの変化 <p>→市民一人ひとりの意識、行動の改革が必要</p>	<h3>市民、事業者のどちらも地球温暖化対策に関する情報特に取り組みの結果に関する情報の提供を希望している</h3>	<h3>アクション「政策提言」</h3> <p>SSTを参考に、西宮市民にエネルギーの利用状況可視化して、通知するシステムを構築する 意識が変わっても行動が変わらなければ意味がない 分りやすいメリットをつくる</p>	<h3>アクション「政策提言」</h3> <p>SSTを参考に、西宮市民にエネルギーの利用状況可視化して、通知するシステムを構築する 自分たちの考えエネルギーの消費量やCO2の排出量削減に貢献した市民に、地元のお店で利用できるポイントを付与する</p>
<h3>地球温暖化の防止と地球経済の活性化がどちらも実現!!</h3> 	<h3>高等部での実証実験</h3> <p>「エコチェックリスト」</p> <ul style="list-style-type: none"> 照明こまめに消す エアコン2度 窓を開ける 				

グローバル探究BASIC 中間報告フィードバック

発表グループ：グループ1	発表タイトル：環境配慮型のまちづくり—FujisawaSST—
メンバー：	

【各項目に対する評価とフィードバック】

観点①	FS先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりとしているかどうか。
A	どのような問題意識（きっかけ）でFS先を選定したのか、訪問の目的（何を知らなかったか）が明確である。
B	FS先についての情報は明確に調べてあるが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。
C	FS先についての情報が調べてあるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかに触れていない。

- 1枚目 班名とメンバーだけでなく、「発表のタイトル」を決めよう。上記は先生が仮に作った「タイトル」です。自分たちがこのプレゼンで何を伝えたいのかを「タイトル」にしましょう。
- 2枚目 なぜ藤沢スマートタウンについて調べようと思ったのかという「理由」が「ニュースで見つけたから」では、「自分たちが何を解決しようとして訪問（調査）したのか」といった「目的」がはっきりしておらず、「環境問題について興味をもってたまたまニュースで見たから」ということになります。つまり、「目的意識」としての説明として希薄であるという印象を与えています。
- 3枚目 パナソニックがライフスタイルを提案し、必要なインフラやコンテンツを創出していこうとしている、通常との順序の違いについて説明できていますが、この点は非常に重要な点ですので、もう少し丁寧に述べても良いかもしれません。例えば、「従来の都市開発」の例と比較することで、SSTがいかに特別であるかを説明することができます。甲東園もまずは電車、駅ができて浄水場ができて電気がきて、という歴史があります。山を削り、海を埋め立てる現在の都市開発もおそらくそのような「インフラストラクチャー（インフラ）から整備されていくはず」です。
- 4枚目5枚目 「まだ計画段階なのは？」という問いはあまりに短絡的なので、あえてここで述べる必要はなさそうです。「現時点でどのくらい達成されているのか」を知ってどうするのか、が「目的」ですね。

観点②	施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができるかどうか。
A	現場の人たちの持つ「課題」について、現場の人たちが具体的に「何を語ったか」が明確である。
B	現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「声」が見えにくい。
C	FS先の人たちの大変さについて訪問者として感想を述べているだけである。

- 6枚目7枚目 「どのくらい達成されているのか」の答えを数字で聞いて「生活用水30%」「CO₂70パーセント」という情報の紹介の仕方に工夫があってもよいのではないのでしょうか。
- 8枚目 内容としてはよくまとめられています。スライドの書き方としてももう少し工夫が必要です。
- 10枚目～14枚目 現場の人たちが具体的に語った「課題」のポイントがよく説明できています。さらに、「戸建てで使用する電力量」と「一般的な家庭に設置された太陽光パネルの発電量」、「15階建ての建物で使用する電力量」を調べ、どれほど足りないのかパナソニック以外のデータでも構わないので具体的な数値で明示できると良いでしょう。「アクティブなCO₂の削減」とはどのような点が「アクティブ」なのかを説明してみよう。
- 17枚目～24枚目 「タウンルールの統一と個性のある景観形成の両立」についての問いは非常によいポイントです。しかし、パナソニックからの回答をそのまま紹介するだけでなく、その「回答」では解決しきれていない部分もあるのではないかと鋭い視点で指摘してみてもどうでしょうか。例えば、「共通するビジョン・共有された価値観」がいわゆる「機能」面ではなく「装飾デザイン」面を統一することにどれだけ意味があることなのか、「パナソニックホーム」という住宅メーカーが提供する住宅は他の住宅メーカーに比べ

て環境性能が高いと言えるのかどうか。など、証拠をあげて反駁しても良いかもしれません。そこから、「緩和すべきルールとはどのようなルールか」も考えられるのかもしれませんが。

観点③ 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。	
A	当該テーマについて何ができるのかが具体的であり、それが実現可能であることを証明できている。
B	当該テーマについて何ができるのかが具体的に示されているが、それが実現可能であることが証明できていない。
C	何ができるのかが抽象的であり、それが該当テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。

- 26枚目～ 「宣伝活動」とありますが、パナソニックの広報活動に参加することで「誰に何を訴えたいのか」が明確ではありません。「生産電力を上げるために必要な人の力」に繋がっていくという点ももう少し具体的な「行動」として考えてみる必要がありそうです。
- 27枚目～ 「SSTを訪問する」ことはあくまでも「調査」の目的であり、このことを学んだ君たちがその「調査」を通したさきにある「行動・アクション」ではありません。行って、SSTのを知ることがアクションであるというのでは、ただフィールドスタディをしているだけです。課題を解決するために今回の調査を経て自分たちがどのような活動に繋げることができるのかを考えましょう。

【教員からのフィードバック統括】

Fujisawa SSTに着目して環境配慮型の「まちづくり」について考察しようとしている点についてはよく調査できています。しかし、エネルギー問題を太陽光パネルで、という内容が前面に出てきていますが、これなら取り立ててSSTで説明する必要性を感じません。それよりも、SSTに限らず多くの一般家庭に太陽光パネルを設置する取り組みをしたほうがよさそうです。このSSTがなぜ環境配慮型のまちづくりとして意味があるのかをもう少し深く考えてみてください。AIの活用や住民どうしの繋がりなど、多くの重要なキーワードが見つかりそうです。例えば、近年は戸建て住宅の場合、自治体による連携はゴミステーションの運営や祭りなどの行事などに限られています。戸建て住宅に住む街の人々がそれぞれ所有する住宅の機能によって「環境を配慮する」ために連携し、情報を公開しながら意識するといった取り組みは他にはありません。SSTはそのような「環境に配慮しよう」と考えている人々が自ら進んで住もうとして集まってくるので実現ができるのです。では、このSSTの取り組みを一般的な地域社会に生かしていくにはどのような工夫や取り組みが必要なのでしょう。そこに、あなたたちのような「パナソニックの会社員」でない第三者の「知恵」が必要なのではないでしょうか。しかも、その「知恵」の中に、あなたたちが行動に起こせるような内容があればさらに素晴らしいでしょう。「SSTにおける試行を社会で実現するために必要なこと」を行政に提案するような「政策提言」を作成するなど一つです。

グローバル探究 BASIC 最終発表フィードバック

発表グループ：G1	発表タイトル：持続可能なまちづくり—FujisawaSST から私たちへの街へ—
-----------	--

【各項目に対する評価とフィードバック】

観点① FS先を訪問するにあたって、目的意識がはっきりとしているかどうか。	
A (5点)	どのような問題意識(きっかけ)でFS先を選定したのか、訪問の目的(何を知りたかったか)が明確である。
B (4点)	FS先についての情報は明確に調べてあるが、問題意識との関係や訪問の目的との関係が見えにくい。
C (2点)	FS先についての情報が調べてあるだけで、自分たちが何を解決しようとして訪問したのかに触れていない。

□ 5枚目・8枚目

「西宮市で起きている問題を解決させるためにこれらの取り組みを実現させたい」という動機付けは非常に説得力のあるもので、自分たちの身の回りから課題を見つけ出し解決しようとする流れは自然でありよくわかった。SSTがパナソニックによる実験的な都市であり、その先進的な取り組みがこれからの環境配慮型の都市計画の一つの試金石となっていく可能性がその根拠として生きていました。

■ 6枚目

西宮に対する政策提言を行うのであれば、実際に西宮がどのような歴史的経緯で整備され、都市が開発されていったのかに触れるほうがよかったのかもしれない。前回のソーシャル探究で社会科の三木先生から「地域振興講座」で西宮市における鉄道沿線の都市整備のありかたについて解説がありました。SSTとの違いはインフラが先か、コンセプトが先か、ということであれば、阪神電車の沿線と阪急電車の沿線とで都市の在り方がどのように違うのかという点は非常に参考になる事例であったといえます。

□ 9枚目

「適切な目標を立てることが必要であり、西宮市が実現可能な目標を立てるために、一つの目安とするために、SSTがどの程度目標を達成できているのかを確かめることにした」というのは、非常に論理的でFSの目的意識がよく表れていました。西宮市に政策を提言するというアクションプランに向けて、西宮市がどの程度の環境目標を達成すればよいのかという基準を考察するというのは、PDCAサイクルを回すうえでも非常に重要な観点です。

観点② 施設設立の目的や今抱えている問題点について理解することができているかどうか。	
A (5点)	現場の人たちの持つ「課題」について、現場の人たちが具体的に「何を語ったか」が明確である。
B (4点)	現場の人たちが持つ「課題」について説明できているが、現場の人たちの「声」が見えにくい。
C (2点)	FS先の人たちの大変さについて訪問者として感想を述べているだけである。

■ 17枚目～20枚目

「再生可能エネルギーの利用率30%以上」という目標があくまでも「戸建て住宅」において実現されているが、集合住宅や商業ビルなどでは達成ができていないという点を「現場の人たちがもつ課題」として取り上げているのだと思いますが、「現場の人たち」がそのことに問題意識を持っているのかどうかということについて

触れるとさらに良かったのではないかと思います。「現場の人たちの声」という観点でどこまでが「声」なのかが分かりにくくなってしまっているからです。全体として達成している目標ですが、そもそもその目標は「ビルはパネルが設置できないからこれくらいだろう」として設定した目標かも知れません。本来、目標の数値はもっと高いところに設定すべきなのかもしれないということです。

□ 18 枚目・19 枚目

太陽光パネルの発電量と、戸建て、15階建てマンションと具体的な数値を出して比較しているところが良かったです。特に、実際に関西電力に問い合わせた消費電力量を確認したところや、日本建築学技術報告書を参考に試算しているところなど、必要なデータを自分たちの力で集めて検証に用いているところは大変すばらしいと思います。

また、そのことで、「屋上に設置された太陽光パネルだけではビル1棟分の電力をまかなえない」という課題を導くこともできています。

□ 26 枚目～32 枚目

「街の完成図が共通するビジョン」として、環境に配慮したまちづくりに共感する住民が集まってくることは理解ができるが、「住まい」としての快適さ、嗜好といった「価値観」が共有されているとは限らないという指摘は、よく考えられている。また、「担当の方からの回答には不十分なところがあると思っています」とFS先を客観化して冷静に分析する姿勢が見て取れ、自分たちの課題意識が前面に出てくるプレゼンに繋げることができています。

観点④ 次のステップに向けたアクションプランに関して適切なビジョンを持っているか。	
A (6点)	当該テーマについて何ができるのかが具体的であり、自分たちの資源を活用しそれが実現可能であることを証明できている。
B (4点)	当該テーマについて何ができるのかが具体的に示されているが、それが実現できることが証明できていない。
C (2点)	何ができるのかが抽象的であり、それが該当テーマとどう関連しているのかがはっきりしていない。

□ 32 枚目

自分たちが仮説として考察した「タウンルールを改訂すべきだ」という主張に関する根拠として立証しようというロジックがとても良いです。

■ 33 枚目

しかし、壁の色や屋根の色についての指摘であれば、簡単に解決ができてしまうのかもしれませんが。むしろ、「ブランドイメージ」や「SSTへの帰属意識や特別感」、など、住宅を消費財としてみた時の「消費行動」として分析してみるとさらに良いかもしれません。また、パナソニックには系列会社としてパナソニックホームズという住宅メーカーがあり、そこがSSTの住宅を担当しています。他の住宅メーカーとデザインや顧客の要望の実現という観点でどのような違いがあるのかについても言及できると本格的な分析になりそうです。これは、西宮市にどのような住宅が求められるのか、を検討する際にも有効です。発表時に小島先生から指摘があったように、他の地位の新興住宅地がどのように形成されているのかについて検証すべきであるというのはこういった理由もあります。

□ 36 枚目

「市民、事業者のどちらも地球温暖化対策に関する情報、取り組みに関する情報の提供を希望している」とい

う点から、SSTの住民ポータルによる環境達成度の共有という取り組みを参考にし、提言するという発想は課題を見出し、解決しようという趣旨が明確になっている主張です。

■ 39枚目

「企業と連携し、西宮市民にエネルギーの利用状況を可視化して通知するシステムを構築する」というアクションプランは非常に有効だと思います。しかし、「企業と連携し」の主語は「私たち」でしょうか、それとも「西宮市」でしょうか。もし前者なら、すでにプレゼン後に指摘があったように「財源はどうするのか」という課題が生まれます。また、後者としても「西宮市」がこの取り組みを実現するメリットはどこにあるのでしょうか。一市民の希望を取り上げて実現してもらった提言にとどまるのか、それとも、行政として取り組む価値がある取り組みだという説得力を持たせることができるのか、さらに一つ知恵を絞らなければなりません。

■ 41枚目

「高等部での実証実験」として「エコチェックリスト」を作りアンケートを取ることは良いでしょう。しかし、それが、西宮市が納得するための根拠として活かせるかどうかと言及されていないところが残念です。たとえば、高等部内でエネルギーを可視化して、高等部生や教員の意識がどのように変化し、どのような価値観が生まれたのか、また、実際にどれくらい資源が節約できるようになったのか、など具体的なデータをとることができるような取り組みであれば確実な根拠となるでしょう。

観点④ 視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	
A (6点)	スライドの構成が導入、展開、結論と全体を通して論理的にまとめられており、文字のフォントやグラフ・図が効果的に用いられている。
B (4点)	スライドの構成において結論に向けての論理的な展開が見えづらく、グラフ・図の効果も十分に活かされているとは言えない。
C (2点)	スライドに情報が羅列されているだけで、結論とそれ以外の部分のスライドとの関連性が見えない。

□説明に応じたスライドの配置や「問い」と「仮説」と「根拠」がうまく提示できており、根拠となる数字やグラフも取り入れて説得力のあるプレゼンに繋がっていました。

■一方で、プレゼンの話の筋に影響されすぎて、情報が散逸してしまっており、筋道たてて説明するための「流れ」が見えにくい資料構成になってしまっている。また、「△」「・」「→」などの記号の使い方にも統一感と意味を持たせ、一見して論理構造やトピックが分かりやすくする工夫があったほうが良いのではないのでしょうか。限られた文字や図を提示しますので、そこに使う記号や文字は厳選して配置する必要があります。

観点⑤ 発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	
A (6点)	発表者の声量や視線からこの課題に対する熱意が感じられる。
B (4点)	発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。
C (2点)	情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。

■原稿の読み上げに注意が行き過ぎていて、聞いている人の心をつかむシーンが少なかったように思います。グラフを提示して「西宮市の地球温暖化対策についてみなさんご存じですか?」といった聴衆を引き込む工夫はよくできているのですが、原稿を読み上げることが多いので聞いていて単調に感じます。声の抑揚や、視線、スピードなどに気を使っているとうかがえる部分もあるのですが、全体として読み上げの印象が拭えません。アドリブでプレゼンできる部分を作る練習をしてみるとさらに良いものになるでしょう。

【教員からのフィードバック総括】

自分たちが住む街「西宮市」に対して「政策提言」を行うという、市民として社会に参画しようとする姿勢を持つことができている良かったです。オンラインインタビューではSSTの責任者の方をはじめ、現場で活躍されている方、見識に富む方などPanasonicの担当者の方々が丁寧に対応をしてくださいました。中間発表では、その取り組みの斬新さから圧倒され、全面的に調査内容を伝達することに終始しがちなプレゼンとなってしまっていました。ある先生からの「Panasonicの広告塔になるだけでは意味がないのではないか」という辛辣な指摘にも前向きに耳を傾け、自分たちがこの取り組みを通して何を目指すべきなのかをしっかりと省察できた最終発表だったと思います。環境問題は多岐に渡りますが、その中でもエネルギー、とりわけ「電力」の問題は私たちの生活に喫緊の課題であると言えます。その「意識」を敷衍するために、「広報・宣伝」するだけでなく、実際に行政に働きかけるという手法は、実効性のあるアクションプランになっています。しかし、すでに指摘しましたが、政策提言を西宮市が受け入れ、政策に取り上げて実行に移していくには、「対費用効果」を明らかにしておく必要もあります。理念だけで語ると、多くの取り組みが「必要だ」となりますが、「実現可能か」というところを検証することで初めて現実味が帯びてきます。SSTが提唱している「住民ポータル」の運用は地域コミュニティにおけるビジョンの共有という点で有効なだけでなく、防災・防犯の観点や、教育、祭りなど様々な地域文化をAIによって再興する事例に昇華させることができるかもしれません。一方向的なHPをより発展的にポータルという形で整えることは、行政にとって「対費用効果」を見込める内容である可能性があるからです。もちろん、セキュリティの問題や、市民が双方向に意見を言い合えることの問題、どの程度の規模のコミュニティごとにポータルを繋げていくのかという現実的な課題が残ることも否めません。

また、再生可能エネルギーの使用に関する具体的な数値目標を検証しようという批判的な視点や、企業の取り組みが果たして提示している通りの効果を上げているのかを懐疑的に分析しようという姿勢は非常に大切です。この探究活動を通して、一市民として企業を客観的に評価し、暮らしに繋げていく参画の仕方を見出せている点でメンバー一人一人の価値観や意識の変化に繋がっていると伺えました。非常によくできたプレゼンであると思います。実際に政策を西宮市に提言できるように活動を継続して行ってください。

【1学年全体プログラム 「ソーシャル探究」について】

今年度はソーシャル探究のプログラムをJTBと連携し授業を開発した。主に、imacocollabo カードゲーム「2030SDGs」を用いて、講演やグループワーク、アイデア創出とプレゼンを行わせる授業となった。

コロナ禍で本来は6月に随時ホームルームの時間を使って実施する予定であったものを、12月に一日行事として設定しなおし、実施した。プレゼンは1月に入ってすぐのホームルームの時間を使った。

①SDGs ワークショップ 12月14日

「誰一人取り残さないという考えに基づいて定められた世界共通の価値観の本質を体感するカードゲーム」を通して、社会的課題を解決するロールプレイを体験し、国や個人で解決に向けてどのようなアクションを起こすことができるかを考えさせる。また、そのアクションに際しては、文化的、経済的、環境的な多岐に渡る条件を勘案し、調整する必要があることを学び、SDGsとして世界的に共通の目標を設定する意義に気づかせる。

- ・ imacocollabo カードゲーム「2030SDGs」を使用。
- ・ 資格をもつファシリテーターをクラスに1名ずつ招聘し、クラス内でカードゲームの進行を依頼した。(計9名)

②講演会 12月14日

講師として、大阪大学の学生である山田果凛氏を招聘した。ルワンダ共和国における貧困層を救うビジネスプランを高校生として発表し、大学生として現在も沖縄でルワンダと日本をつなぎ貧困問題について活動している経験について語って頂いた。また、生徒は、高校生としてビジネスプランを提唱することができた動機付けには彼女の生い立ちや環境にもあり、どのような立場であっても「何かしなければならぬ」という「思いが行動につながる」という意識を持つべきだと考えさせられたようだ。

③オリジナルプロジェクトカードの作成 12月14日

プロセスシートを用いて、SDGsの解決に必要な条件や目標の可視化を行い、自分自身がどのようなアクションを起こすことができるのかを考察させた。また、カードゲームの振り返りとして、グループでオリジナルプロジェクトカードを作成させ、社会的課題の解決に向けてアイデアの創出を行わせた。その結果をプレゼンとしてまとめてくるよう指示した。

6月9日(水)		時間(予定)	場所	備考
1・2時間目	SDGsワークショップ (カードゲーム前後半)	9:00~10:50	各教室	
3時間目	社会活動とSDGs 講演(仮)	11:00~11:50	チャペル	
	昼休み	11:50~12:50		
4~6時間目	SDGs Idea Creation (仮) 個人ワーク・グループワーク・クラス発表など	12:50~16:00	各教室	考案・策定 しています。 要相談



※当初6月の予定をしていたものを12月に延期した。

SDGs Idea Creation

～アイデア創発型ワークショップ～
(仮称)

■目的

自身の興味・関心のあることに対して、SDGsを掛け合わせながら具体的なアクションの道標を考える

■成果物

- ・ プロセスシート
- ・ オリジナルプロジェクトカード

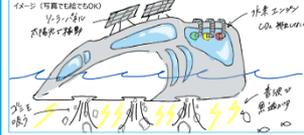
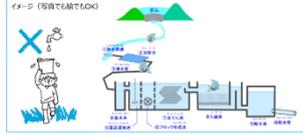
■構成(案)

- ①振り返り
フィールドワーク、カードゲーム、山田果凛さんの講演、または普段の生活を通じて“なとな～”心の中で感じたこと・引かったこと(引かかっている)こと
と興味・関心のあることを挙げる
- ②個人ワーク
プロセスシートを利用
-1.①で挙げた興味・関心に対して、SDGsのフィルターを通して、関連する3つのアイコンを挙げる
-2.それに対して、時間軸の横軸でできること、やりたいことを明文化してみる
- ③グループワーク
-1.②のグループ内シェア
-2.②の9マスのうち1つをオリジナルPJTカードとしてグループで作成する
- ④クラス内で発表

④オリジナルプロジェクトカードのプレゼン 1月12日

冬休みにグループでプレゼンを完成させるよう指示し、ロイロノートでプレゼン資料を提出させた。オリジナルプロジェクトカードを見せながらのプレゼンとなり、自由な発想だけでなく、経済や文化、環境とのバランスをとりながら課題を解決するアイデアをシェアすることができた。

・生徒が作成したオリジナルプロジェクトカード（例）

<p>タイトル 物の受注生産制</p> <p>12 必要は「世界の状況メーター」 青 3 以上</p>  <p>使うもの お金 (実際にいくらかかると?) 1000万円 時間 (日/月/年?) 1年半</p> <p>世界に与える影響 誰が? (何が?) 商品の どうなる? 売れ残りがなくなる</p> <p>「世界の状況メーター」の変化 青 -1 緑 +1 黄 +1</p>	<p>タイトル 須ヶ浦の収穫車の開発</p> <p>14 必要は「世界の状況メーター」 青 3 以上</p>  <p>使うもの お金 (実際にいくらかかると?) (0)1億円(クラス最高) 時間 (日/月/年?) 10年</p> <p>世界に与える影響 誰が? (何が?) 須 / 講師 どうなる? 稼働 / 増え</p> <p>「世界の状況メーター」の変化 青 +1 緑 +1 黄 -</p>	<p>タイトル ヒドラージンのアニオン交換型燃料電池自動車の普及</p> <p>13 必要は「世界の状況メーター」 青 3 以上</p>  <p>使うもの お金 (実際にいくらかかると?) 100億円 時間 (日/月/年?) 2、3年</p> <p>世界に与える影響 誰が? (何が?) CO2排出量が どうなる? 減少する</p> <p>「世界の状況メーター」の変化 青 +1 緑 +1 黄 -</p>	<p>タイトル 自動浄水路の設置</p> <p>6 必要は「世界の状況メーター」 青 3 以上</p>  <p>使うもの お金 (実際にいくらかかると?) 2億円 時間 (日/月/年?) 3年</p> <p>世界に与える影響 誰が? (何が?) 綺麗な水が どうなる? 関係者上面に行き渡る</p> <p>「世界の状況メーター」の変化 青 -1 緑 - 黄 +1</p>
--	--	--	--

関西学院高等部 1年 3学期 WWLC 学年全体プログラム

ソーシャル探究ワークシート

プロセスシート

	17Goals	すぐできること	高校3年間のうちに実践すること	大学・社会人で実現させたいこと	社会の変化
興味・関心					5G / オンライン技術
					AI・テクノロジーの進化
					地域との連携 (ローカル)
					グローバル
					クラウドファンディング
					寄付・ボランティア
					リサイクル / 3R
					シェアリングエコノミー
					複業・パラレルワーカー
					オープンイノベーション













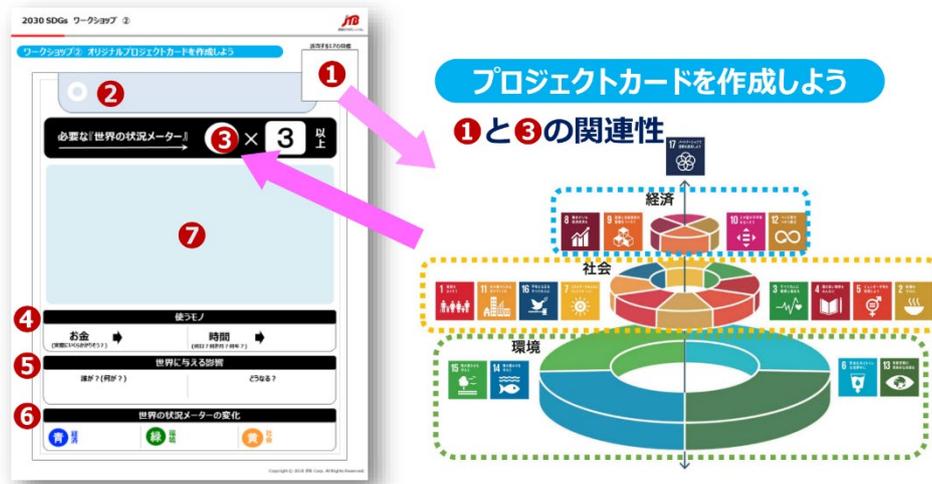






・生徒に作成させた「オリジナルプロジェクトカード」の概要

オリジナルプロジェクトカード



・授業①「2030SDGs ワークショップ」の概要 JTBと連携して計画・実施した。

2030 SDGs ワークショップ 90分

2030 SDGs カードゲーム & SDGsの本質を知る

目的：SDGsの世界を体感し、“気づき”を得て、“行動”(探究学習)につなげる。

☆教室や会議室などで簡単に実施できます。一度に最大360名可能です。

※実施条件は要相談

<p>SDGs 概要説明</p> <p>SDGsの17の目標(ゴール)には何があるのかを確認する。また169のターゲットの2段階構造についても知る。</p> <p>所要時間：30分</p>	<p>カードゲーム 2030SDGs</p> <p>ゲーム可能人数：5～50名</p> <p>2～4名1グループに分かれて、与えられた目標にむけてプロジェクトを実行していく。</p> <p>所要時間：30分</p>	<p>なぜSDGsが必要か？</p> <p>今、世界で実際に起きている出来事を知り、世界のつながりや自分も起点になることを知る。</p> <p>所要時間：30分</p>	<p>2030年の世界を私たちが生きてみる 2030 SDGs ワークショップ</p>	<p>なぜ、この世界にSDGsが必要なのか？</p> <p>貧困と温暖化</p> <p>どんな関係がありますか？</p>
---	--	---	---	--



なぜ、世界にSDGsが必要なのか？
SDGsの本質とは？
世界で起きている様々な問題を自分事にするワークショップ。



2030 SDGs ワークショップ国連で紹介

国際交渉、カードゲームで体験 国連で外交官競う

【ニューヨーク=大島有美子】国際交渉をカードゲームで体験できるイベントが9日、国連の日本代表部で開かれた。貧困や気候変動など地球社会の課題解決を目指す「持続可能な開発目標」(SDGs)における交渉で、カナダなど8カ国・地域の外交官ら約20人が参加した。国際交渉のプロも、プロジェクトに必要なお金や時間集めに頭を悩ませていた。日本経済新聞 2019/4/10



Copyright © 2019 JTB Corp. All Rights Reserved.

※ニューヨーク国連本部で外交官を対象に実施されました。

【研究内容2の具体的な内容とその評価】

<探究型カリキュラムの開発のために>

科目	必修選択 AI活用	学年	2	単位	2	受講人数 21名
活動の目標	1. AI活用人材を育成する 2. AIを活用して、SDGsの各課題を解決する手法を学ぶ					
教材	自作プリント・学びの記録シート・iPad (Classi / ロイロノート)					
留意点	1. AIに関するプログラミングや理論等を学ぶだけではなく、それらをどのように活用して社会的課題を解決するかという活用の点に重点を置いて進めるように教員は留意する。					

<スケジュール> ・授業は45分(短縮40分)/毎週木曜日の5,6時間目 13:20-15:00 (短縮時間: 13:00-14:30)

導入フェーズ ・「AIを活用する」ことへの導入	① 4/15	「AI」について現在のイメージを共有する。「AI」活用ということについて、考える機会とする。今後実施していく活動やワークの基本動作の確認。
	② 4/22	ジグソー法により、スタディサプリ「講義動画」にある「WWL オンラインコンテンツ」AI活用入門講座第1回から第4回をそれぞれ視聴しグループで共有する。
	③ 5/6	ジグソー法により、AI活用入門講座第1回から第4回の内容を把握・整理し、「AIとはどのようなもので」「AIをどのように活用することで人はどんな社会を創り出せるだろうか」を主題としてチームでのプレゼンを次回に行う。その準備をチームで行う。
	④ 5/13	計5グループの「AIはどのようなもので」「AIをどのように活用することで人はどんな社会を創り出せるだろうか」を主題としてチームでのプレゼンを行う。チームとしての考えの他にプレゼンの仕方も含めて相互評価を行い、後日フィードバックする。
第1フェーズ 「知る」 ・AIが社会の中でどのように活用されているかの具体例を知る ・グループワークやルーブリックについて知る 【課題の設定】 【情報の収集】 【整理・分析】	⑤ 5/27	五十嵐氏に講演をいただき、社会でAIがどのように活用されているかの具体例を知る。また、そのご講演の後に「身近な問題を解決するAI」をざっくばらんにグループで話し合い、発表する。
	⑥ 6/3	SDGsカードゲームを行い、SDGsを自分事に捉える。また、その後窪田氏に講演をいただき、なぜ世界にSDGsが必要なかの理解を深める。カードゲーム・講演を通じて自分が考えたこと、気付いたことをClassiのアンケート機能を用いて、記録する。
	⑦ 6/10	小田氏による講演をいただき、現在の社会問題とAIの技術の進化を知り、社会問題を解決するためにテクノロジーを駆使することが必要であることを知る。AIやテクノロジーを駆使するには情報を読み解く力が必要であることを知り、情報を批判的に捉える・読み取る方法をワークショップを通じて学ぶ。
	⑧ 6/17	前教諭による講義を行い、身近な課題を見つけテクノロジーによって解決する過程を見て、実践してみる気持ちが高める。ゲストスピーカの講演の中で、印象に残っていることをグループで共有し、自分の意見を伝える。また、次回の発表に向けて他己評価のフィードバックからプレゼンをブラッシュアップする。
	⑨ 6/24	他の科目の必修選択授業の今学期の学習内容の発表を聞く。 また、AI活用の授業内容も発表し各教科の交流も図る。

	⑩ 7/1	Progate を使ってプログラミングに触れて、夏休み中にプログラミングに興味を持って取り組むきっかけを作る。
<p>第2フェーズ: AIの中身について知る</p> <p>・AIのプログラミングについて知る</p> <p>・AIを使ったビジネスの実例について知る</p> <p>【課題の設定】 【情報の収集】 【整理・分析】</p>	⑪ 9/9	<ul style="list-style-type: none"> ・2学期の授業方針について確認。 ・画像認識、音声認識を体験して、入力情報の精度の重要性を知る。
	⑫ 9/16	<ul style="list-style-type: none"> ・画像認識で人を判別させることを目標にグループワーク ・精度を高めるために必要な工夫、また疑問点をまとめさせる。
	⑬ 9/30	<ul style="list-style-type: none"> ・2,3年生合同で授業を行い、巳波教授によるScratch講義動画を視聴 ・騒がしさを判定できるAIが存在するとして、そのAIをどのように活用するかアイデアをグループで挙げる。
	⑭ 10/7	<ul style="list-style-type: none"> ・2,3年生合同で授業を行い、前回のアイデアをクラスに共有するプレゼン準備を行い、プレゼンも行う。 ・各グループごとに巳波教授からのコメントを頂く。
	⑮ 10/21	<ul style="list-style-type: none"> ・ツール「SUNABA」を使ってチャットボット作成に触れる。 ・SUNABAでチャットボットを作成するための動画を視聴し、知識を獲得する。 ・「こんなチャットボットがあればいいな」をコンセプトに、オリジナルのチャットボットの構想を練る。
	⑯ 11/11	<ul style="list-style-type: none"> ・関西学院大学巳波教授研究室から大学生を派遣いただき、実習を行う。 ・SUNABAを使ってオリジナルのチャットボットを作る。 ・作成できた、チャットボットをクラスに共有する。
	⑰ 11/18	他の科目の必修選択授業の今学期の学習内容の発表を聞く。 また、AI活用の授業内容も発表し各教科の交流も図る。
	⑱ 11/25	<ul style="list-style-type: none"> ・3学期にAI製品のアイデアを挙げ、プロジェクトを開始する。そのための冬休みの宿題への導入として、グループワークを行う。 ・KJ法を用いて関心のあるSDGsについて問題点を挙げ黄色の付箋に列挙、AIでできることを青色の付箋に列挙し模造紙で整理する。 ・問題点と、AIでできることをまとめた後、自分たちのチームオリジナルの「作りたいAI」を考え、発表する。
<p>第3フェーズ AIを使う</p> <p>社会的課題に対して、AIを利用してその解決を図る手段について考える</p> <p>【課題の設定】 【情報の収集】 【整理・分析】 【まとめ・表現】</p>	冬休みの課題	生活上の困りごと(社会的課題)をAIを使って解決する製品のアイデアシート作成個人ワーク
	⑲ 1/13	冬休みの宿題を確認後、クラスに宿題の内容を共有するためのプレゼンを準備させ、実施する。
	⑳ 1/27	テーマごとに5つのグループに分け、各グループで社会的課題をAIを使って解決する製品のアイデアシート作成ワークを実施する。
	㉑ 2/3	アイデアシートを作成し、授業時間内でAI製品紹介のためのプレゼン準備を行う。授業内代表を決定する。
	㉒ 2/17	「平和の構築」をキーワードに各授業からのアプローチを発表し、各授業の学びを共有する。
	㉓ 2/24	各グループの発表に対して質疑応答でどのような質問がされそうか、またどのように答えるかをグループで考えさせる。一年間の学びの振り返りをClassiを用いて行う。

<各フェーズの 1.目標 2.具体的活動 3.活動の評価方法 4.検証 5.今後改善すべき点について>

導入フェーズ

1. このフェーズでの目標

- 目標 1) AI とはどのようなものか、社会の中でどのように活用されているのかについて興味関心をもち、知る。
- 目標 2) 「AI とはどのようなもので」「AI を使ってどのような社会を創り出すか」に対してチームの回答をプレゼンする。

2. 具体的な活動

① 第 1 クール：4/15(木)～4/21(水)



・授業のオリエンテーションとして、授業の進め方や評価方法、WWLC 関連授業の意義について伝えた。また、今後配信する課題について、説明とグループ分けを行った。

・以下の内容を活動した。

「Future of Work」を視聴し AI についての自分の今までの知識と、視聴した動画を

踏まえて個人の意見をロイロノートに記載し、授業内で共有した。そのあと二人グループになって AI 活用について考えた。電車が自動運転になった

と仮定して、線路に人が倒れていたら AI は線路の人を助けようとするのか、乗客を助けようとするのか考えさせた。それを踏まえたうえで、AI 活用とはどういうことなのか考えさせる。



② 第 2 クール：4/22(木)～5/5(水)



・「4,5 人グループに分けジグソー法によりスタディサプリ「講義動画」にある「WWL オンラインコンテンツ」AI 活用入門講座第 1 回から第 4 回を視聴し、グループで内容を共有させた。チームで情報共有後、4 回分の内容をグループでまとめさせた。

・次回からの課題を以下のように伝えた。

上記で知った AI についての知識から、「AI とはどのようなもので」「AI を使ってどのような社会を創り出すか」に対してチームの回答をプレゼンする。



③ 第 3 クール：5/6(木)～5/12(水)

・「AI とはどのようなもので」「AI を使ってどのような社会を創り出すか」に対してのチームの回答をプレゼンする準備をさせた。ルーブリックを作成・事前配布しプレゼンの内容に沿うように準備させた。



④ 第 4 クール：5/13(木)～5/19(水)

・「AI とはどのようなもので」「AI を使ってどのような社会を創り出すか」に対してのチームの回答をプレゼンさせた。発表者を聴いている生徒は発表内での疑問点や、質問項目を所定の用紙に記入させ、各チームのプレゼン後に質疑応答の時間を設け、質疑応答をさせた。



3. 活動の評価方法

- このフェーズでの評価は、「AI とはどのようなもので」「AI を使ってどのような社会を創り出すか」に対してのチームの発表プレゼンテーションで評価する。

4. 検証

- 目標の達成度・課題

生徒は AI について全く知らない状態から、巳波氏のスタディサプリ内の動画を視聴し知識を得た。巳波氏の動画の内容には AI は作られるようになるのも大事だが、AI を使うことができる人材が必要であることを主張としている。その動画を視聴した生徒たちは、AI をどのように実生活に利用していくかをよく考えた。また、プレゼンテーションを作成していく上で、自分たちの様々な場所に AI が使われていること、思っているよりも身近な機器に AI が使われていることを気づいた模様である。よって「AI とはどのようなものか、社会の中でどのように活用されているのかについて興味関心をもち、知る。」は達成できていると言える。ただ、プレゼンテーションの内容において一部のチームが得た知識をまとめただけに留まった。得た知識から自分たちが AI を使ってどのような社会を創り出すかに主眼を置くことを強調できていなかった点が課題である。

5. 今後改善すべき点

- ・知識獲得のために巳波氏の動画を視聴させ、ジグソー法を採用して 4 回分の動画の内容をチームで共有させたが、満足な共有のためにはかなりの時間がかかった。そのため予定変更をせざるを得なかった。動画視聴は宿題とし、各自のタイミングで視聴させる選択肢も視野に入れても良い。
- ・プレゼンの主眼がうまく伝わっていないチームがあった。連休を挟みプレゼンの準備をさせたこともあり、途中経過の様子を把握しきれていなかった。繰り返し主眼を伝えていたつもりだったが、さらに明確な指示や生徒のプレゼン準備段階での指導が必要である。

第1フェーズ：【 知る 】

1. このフェーズでの目標

目標 1) AI が社会の中でどのように活用されているかの具体例をゲストスピーカーの講演を聴き知る。

目標 2) 「AI とはどのようなものか」「AI を活用してどのような社会を創り出したいか」を題にゲストスピーカーの講演を踏まえて前回のプレゼンをブラッシュアップしてチームの回答を作り上げる。

2. 具体的な活動

⑤ 5/27(木)~6/2(水)

- ・外部講師五十嵐氏による講演を聴き、SDGs 達成のために五十嵐氏がどのように AI を活用しているかを知る。
- ・「何をするかくなぜしたいか」をキーワードにテクニカルな知識も必要不可欠だが、遂行する原動力となるのは気持ちの面であることに触れ、刺激を受ける。
- ・グループワークで「こんな AI があったらいいのに」について意見を出し合い、アイデアを共有する。

⑥ 6/3(木)~6/9(水)

- ・外部講師窪田氏による指導の下、SDGs カードゲームを行い SDGs の必要性について理解を深める。
- ・環境問題や低賃金労働の実際の映像を見て、SDGs の必要性について考える。
- ・SDGs カードゲームと窪田氏による講演を聴いて、自分で考えたことや考えさせられたことを Classi アンケートに回答し、自分の意見をまとめる。



⑦ 6/10(木)~6/16(水)

- ・外部講師小田氏による講演を聴き、AIが得意なこと・苦手なことについてワークショップを体験しながら知る。
- ・人間にしかできないことは何なのかを見つめ、良いAIのためには良いデータが必要であることを知る。良いデータには人間によるデータの選別が必要であることを知る。ワークショップでデータの読み取り方をレクチャーいただく。
- ・テクノロジーに振り回されず自分軸でテクノロジーを活用するために、テクノロジーを活用するあなたはどのような人間なのか、何に関心があってどんなふう生きていきたいのかが肝心であることに触れ、自分を見つめる機会とする。



⑧ 6/17(木)~6/23(水)

- ・身近な課題を見つけ、それをテクノロジー (Python, Excel) によって解決する過程を目の当たりにし、身近な課題解決のために必要な手順をイメージする。
- ・前回までの講演の中で強い印象が残っている箇所について個人で考え、チームで共有した。
- ・残りの時間は次回から行う今学期最終のプレゼンテーションの準備に充てさせた。



⑨ 6/24(木)~6/30(水)

- ・本校の必修選択授業内で、今学期に学んだことを Zoom 上で発表し、お互いの学習の成果を知る機会とした。
- ・お互いの発表を相互評価し、フィードバックして刺激を受けあう機会とした。
- ・「AI とはどのようなものか」「AI を活用してどのような社会を創り出したいか」についての最終プレゼンテーションを三班行い、相互評価も並行して行った。



⑩ 7/1(木)~7/7(水)

- ・残り二班の最終プレゼンテーションを行った。
- ・Progate を使ってプログラミングに触れ、興味を持つ機会とした。
- ・今学期最終授業から夏休み期間中の課題として、プログラミング講座と一学期まとめの学びの記録作成の要領について伝えた。



3. 活動の評価方法

ルーブリックについては、以下のものを使用した。

●グループプレゼン「AI とはどのようなもので、AI を使ってどのような社会を創り出したいか」評価ルーブリック

	①AIとはどのようなものか、考えがまとめられているか？	②AIをどのように、活用するのか/活用していきたいのか について、考えがまとめられているか？	③AIを活用してどのような社会を、創っていきたいのか/いくべきなのか についてまとめられているか？	④プレゼン課題である「問い」について、①~③の内容を通じて「グループとしての意見」が明示されているか？
A	AIの定義がわかり易く明確に説明されている。 また、定義に対応した具体的な例についても述べられている。	AIをどのように活用するのかについて、具体的に、かつ聞いている者が興味関心を掻き立てられるような説明であった。	AIを活用した社会について、具体的に、かつ聞いている者が興味関心を掻き立てられるような説明であった。	対立した意見等があっても、グループとしてまとめあげたことが十分にわかる内容である。
B	AIの定義づけについて説明され、具体的な例についても述べられているが、明確さや関連性について十分なものとは言えない。	AIをどのように活用するのかについて、具体的には説明されているが、特に興味を持つような内容ではない(基本的なことが多く皆が知っている内容である)。	AIを活用した社会について、具体的には説明されているが、特に興味を持つような内容ではない(基本的なことが多く皆が知っている内容である)。	グループとしてまとめあげたことがわかる内容ではある。
C	AIの定義、具体例のどちらかにについて説明されていないものがある。 また、いずれも不十分な内容である。	AIの活用について、質・量共に説明され十分な説明がなされていない。	AIを活用した社会について、質・量共に説明され十分な説明がなされていない。	グループとしての意見というよりは、1個人の意見にまとまったことがわかるような内容である。

	⑤視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	⑥発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	⑦時間
A	スライドの構成が導入、展開、結論と全体を通して論理的にまとめられており、文字のフォントやグラフ・図が効果的に用いられている。	発表者の声量や視線からこの課題に対する熱意が感じられる。	設定された時間の+-30秒で発表を行った。
B	スライドの構成において結論に向けての論理的な展開が見えづらく、グラフ・図の効果も十分に活かされているとは言えない。	発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。	設定された時間の+-30秒で発表を行うことが出来なかった。
C	スライドに情報が羅列されているだけで、結論とそれ以外の部分のスライドとの関連性が見えない。	情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。	

●「学びの記録」評価ルーブリック

	新しい事実・知識について		他者や自分の考え・意見について	
	新しい事実・知識の量/質	新しい事実・知識の整理	他者や自分の主張の量/量	考察
A	量/質が十分である	自分の観点を持って、事実・知識がしっかりと整理されている	他者や自分の主張の量/質が、十分である	他者と自分の主張/事実・知識と主張とが有機的につながり、考察までに発展した記述が多くみられる
B	量/質がある程度ある	事実・知識が、ある程度の情報のまとまりになっている	他者や自分の主張の量/質が、ある程度ある	他者と自分の主張/事実・知識と主張とがある程度つながっており、考察までに発展した記述がいくらかみられる
C	量/質が不十分である。	事実・知識が整理されておらず、そのままの羅列となっている	・他者や自分の主張の量/質が、不十分である (短絡的・表層的な感想や意見、疑問にとどまっている)	考察がみられない

4. 検証

● 目標の達成度・課題

目標 1)「AI が社会の中でどのように活用されているかの具体例を知る。」この目標に関して、学期末の生徒のプレゼンテーションを聴く限り、AI が利用されている具体例をインターネットを使ってよく調べられていた。また企業のホームページもよく調べ、AI 搭載の冷蔵庫や外科手術の現場にも AI が活用されているなどの具体例を挙げながら自身のアイデアを交えながらプレゼンテーションを展開出来た。また、AI を活用してお仕事されている複数のゲストスピーカーに来校いただき、ご自身の体験を語っていただいた。SDGs 達成のために AI を使われていたり、大量のデータを整理するために AI を活用していたり、具体的な活用方法をご講演頂いた。以上のことから、この目標はよく達成されたと考える。

目標 2)ルーブリックをもとにした評価方法については、十分に理解できたように感じ、ルーブリックをしっかりと頭に入れながらプレゼンテーションを作成していく姿も垣間見られた。また、すべてのグループの発表内容が洗練されており、前回のプレゼン時に主眼が伝わっていなかったグループも大きく内容を変え改善されていた。グループで AI の定義を話し合い、その AI をどのように活用するかについて多くの議論が重ねられていることがプレゼンから見取れた。生徒のプレゼン準備の様子を見ると、ルーブリックをどのタイミングで開示するのか、どの程度の具体性をもったルーブリックにするかが重要であると感じたので、ルーブリック側のレベル向上を意識していきたい。

5. 今後改善すべき点について

・学びの記録について。特にゲストスピーカーをお招きした際は多くの内容をまとめることに必死になり、自分の考えを記載することが困難である。内容をまとめるだけでなく、お招きした方の伝えたいこと・思いがある点をつかみとることの方が重要であるので、今後はそこに重きを置いて生徒に学びの記録を記載させたい。

第2フェーズ：【 AI の中身について知る 】

1. このフェーズでの目標

目標 1) 様々なツールを用いて AI を作成し、その仕組みを知るとともに、実習を通して日常にある AI に対して興味を持つ。

目標 2) AI 活用人材とはどのような人材か理解し、また AI を活用するアイデアを協働しながら挙げられる。

2. 具体的な活動

① 9/9(木)

- ・1 学期の授業内容について振り返り、今学期の目標を確認した。
- ・1 学期授業の振り返りアンケートの中で、AI を作りたいという声があったため、今学期は自分の手で AI を作る実習の授業を多く展開することを伝えた。
- ・Accenture の製品紹介動画を見て、AI と人間が共存し仕事を行っている様子を視聴する。
- ・Techpark のサイト上で画像認識と音声認識を体験し、画像認識をさせるために AI に学習させる情報の質の重要性を理解する。
- ・グループで任意の画像認識に取り組ませた。機械学習させるために工夫したこと、難しかったことを実習後にクラスで共有した。



② 9/16(木)

- ・前回と同じく Tecpark を使ってサイト上で画像認識させる。今回は人の顔を判別させることを目標にグループで判別の精度を高めるように努めさせた。どのように機械学習させれば顔判別 AI が作成できるか、個人の活動で取り組ませる。
- ・顔判別 AI を作成してみて工夫したところ、難しかったところ、疑問に思ったところを学びの記録にまとめさせて、今後の学習でゲストスピーカーへの質疑の準備とする。
- ・また、ほとんどの生徒が iPhone などに搭載されている Face ID の制度の高さに興味関心を持った。



③ 9/30(木)

- ・2,3 年生で合同の授業を行い、巳波教授による Scratch 講義を動画で受けて、Scratch の操作に慣れた。
- ・巳波教授からの課題は「騒がしさを判定できる Scratch」を作成することで、動画にしたがって音量の騒がしさと、見た目の騒々しさを機械学習させた。
- ・学年の枠を超えてグループワークを行い、「騒がしさを判定できる AI」を使ってどのようなことに活用ができるか話合わせた。
- ・考えるヒントとして「騒がしいと悪い場面・騒がしいと良い場面」をグループで挙げた後に、活用方法を議論させた。



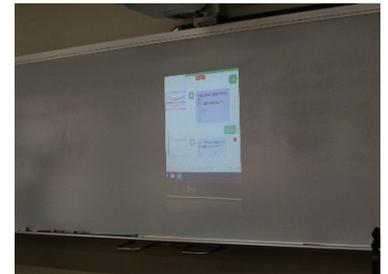
④ 10/7(木)

- ・今回も 2,3 年生で合同の授業を行い、前回の議論の続きを行った。「騒がしさを判定できる AI」があったと仮定して、その活用方法をグループで考えさせた。また、グループで話し合った活用方法・製品をクラスで発表し、共有した。
- ・巳波教授に各グループの発表毎にコメントを頂戴し、総括も頂いた。



⑤ 10/21(木)・⑥ 11/11(木)

- ・チャットボット作成するためにツール「SUNABA」を使って、仕組みを理解する。
- ・巳波教授の研究室から大学院生を講師としてお招きし、チャットボット作成のガイダンスをしていただいた。オリジナルのチャットボットを作成してみて、簡易的なチャットボットを作成できるよう実習した。次回 11 日の授業までに期間があるので、作りたい、あったらいいと思うチャットボットのアイデアを考えさせた。



11 日の授業では考えてきたチャットボットのアイデアを SUNABA を用いて作成させた。オリジナル性あふれるチャットボットを作成している生徒が印象的だった。最後に、自分が作ったチャットボットのプレゼンを行い、作る際に工夫したこと・難しかったことをクラスで共有した。

⑥ 11/18(木)

- ・必修選択の授業内容を互いに発表しあう「クロスカリキュラム」を実施し、交流する。
- ・Zoom を用いて授業内容を共有し、各授業代表者が自らの学びを他教科に発表する。AI 活用からは二人発表者がおり、今学期の授業内容を簡潔にまとめて発表した。
- ・授業の後半は自主的にプログラミングを学んでいる生徒に自らの学びを発表させつつ、生徒が感じた 2 学期の振り返りを発表させた。その生徒の振り返りをきっかけとし、クラス全員で 2 学期の振り返りをさせた。



⑨ 11/25(木)

- ・3 学期に作ってみたい AI のアイデアをもとにプログラムを開始する。その準備として冬休みの課題を課した。その課題に取り組む練習として、グループワークを行うことにした。
- ・KJ 法を用いて関心のある SDGs について問題点を挙げ黄色の付箋に列挙、AI でできることを青色の付箋に列挙し模造紙で整理した。
- ・問題点と AI でできることをまとめた後、自分たちのチームオリジナルの「作りたい AI」を考え、発表する。



3. 活動の評価方法

ルーブリックについて、以下を使用した。

●グループワークプレゼンテーション「AI 活用入門講座」評価ルーブリック

	AI 活用人材について、その説明がされているか。	AI とは何かについて説明がされているか。	SDGs の解決に向けて、AI をどのように活用することが可能かについて説明されているか。	視覚資料に関してプレゼンテーションに適した工夫がなされているか。	発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	プレゼンテーションの時間は適切か？
A	AI 活用人材について、その説明やその重要性・必要性について論理的にしっかりと説明されている。	AI とは何か、わかりやすく具体的に説明がされている。	SDGs の解決に向けて、AI をどのように活用することが可能かについて、データ等を用いながら実現可能性の高い内容が説得力を持って説明されている。	スライドの構成が導入、展開、結論と全体を通して論理的にまとめられており、文字のフォントやグラフ・図が効果的に用いられている。	発表者の声量や視線からのプレゼンテーションに対する熱意が感じられる。	18 分間プラスマイナス 30 秒でプレゼンテーションが行われている。
B	AI 活用人材については説明されているが、その重要性・必要性については明瞭に説明がなされていない。	AI とは何か説明されているが、わかりにくく具体的ではない。	SDGs の解決に向けて、AI をどのように活用することが可能かについて説明はされているが、使用しているデータ等に説得力がない、もしくは不十分である。	スライドの構成において結論に向けての論理的な展開が見えづらく、グラフ・図の効果も十分に活かされているとは言えない。	発表者の声量や視線がこのプレゼンテーションに対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。	18 分間プラスマイナス 1 分未満でプレゼンテーションが行われている。
C	AI 活用人材については説明がされていない、もしくは説明が不十分である。	AI とは何か説明されていない、もしくは説明が不十分である。	SDGs の解決に向けて、AI をどのように活用することが可能かについて説明が不十分である、もしくは非現実的な議論に終始している。	スライドに情報が羅列されているだけで、結論とそれ以外の部分のスライドとの関連性が見えない。	情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。	18 分間プラスマイナス 1 分以上でプレゼンテーションが行われている。

●2,3年生合同授業振り返り評価ルーブリック

- ①製品および企画アイデアの中で、一番難しかった部分はどこですか？その問題をどのように解決したのかとあわせて回答してください。
 ②今回の授業は2年生との合同授業でした。他学年との合同授業を通して、あなたが学んだことを回答してください。
 ③今回の「スクラッチを用いた騒がしさを学習」を通して、AI活用についてどのような学びが深まりましたか？

A	問題点を明らかにできており、それに対する解決策ないしは解決のための仮説を立てている	学年が一つ上の生徒との交流の中で先輩の姿を見て一年後の自分の姿を想像し、自らの成長につなげている。	Scrachを通してプログラミングに触れてみて、またAIを活用する場面を通して自分なりの発見をし、その発見から将来への展望、新しい学びへ意欲が書かれている
B	問題点を挙げられている。	自分の意見を周りの人に共有する大切さに関する記述がされている。	初めてのプログラミングを通して自分なりの発見、成長した記述がある。
C	内容がしっかりと整理されている。	内容がしっかりと整理されている。	AIの活用方法はアイデア次第で無限大。に広がっていくことを感じ、記述がされている。

●「学びの記録」評価ルーブリック

	知識/技術	または	意見/考察
A	自分の観点を持って自分なりに内容を処理、記述している。 情報が整理されている。		知識と知識/意見/考察が有機的につながる記述がみられる。 深い洞察とクリエイティブな広がりがみられる。
B	内容がそのまま羅列されている。ある程度の情報のまとまりは見られるものの、あまり整理されていない。		多くが短絡的・表層的な感想や意見、疑問にとどまっている。
C	情報の量/質が不十分である。		感想や意見、疑問の量/質が不十分である。

4. 検証

● 目標の達成度・課題

目標 1) 「様々なツールを用いて AI を作成し、その仕組みを知るとともに、実習を通して日常にある AI に対して興味を持つ。」については Scrach や SUNABA を用いて騒がしさを判定する AI の作成やチャットボット作成を通して仕組みを知ることができた。また、画像認識や機械学習を体験してみて Siri や顔認証システムの制度の高さに興味を示している生徒が多く、目標は達成できたと言える。

目標 2) 「AI 活用人材とはどのような人材か理解し、また AI を活用するアイデアを協働しながら挙げられる。」の AI 活用人材については、1 学期からずっと話してきている事柄であり、2,3 年生合同授業での発表や実習での生徒の活動を見る限り、よく理解ができていると言える。一方でコロナにより企業訪問等が難しくなる中で、AI を技術的に考察する時間がプログラミング実習程度しか持つことができなかつた。今学期は AI を実際に活用されている企業などのお話が伺えず、社会で活用されている AI に深く入り込む機会がなかつたことが反省点である。

今後改善すべき点について

- ・企業訪問などの機会を作り、AI に対する企業の見解を伺いたい。

第3フェーズ：【 AI を使う 】

1. このフェーズでの目標

目標 1) SDGs の課題等、社会の中にある課題を AI で解決する手法をまなぶ。

2. 具体的な活動

○ 冬休みの課題：12/9(木)～1/12(水)

- ・下記の冬休みの課題を課した。

提出物①：自分が解決したい身近にある困りごと、もしくは SDGs の課題について、付箋にありったけアイデア

を書き出しグルーピングしたものを紙に貼り付ける。

提出物②：提出物①のグルーピングしたポイントと、AIの4つの機能（画像解析・自然言語処理・自動制御・データ予測）を掛け合わせて表（チャート）を作成し、各枠に最低1つずつ具体的なサービスアイデアを付箋に書いて貼り付ける。

提出物③：提出物②の中から、自分が「これ！」と思うものを3つピックアップして、以下の観点でチャートを作成する。

- ①自分の中での順位
- ②誰のためのAI？
- ③どんな課題を解決するAI？
- ④AI導入後のインパクト
- ⑤実現性
- ⑥使用するAI技術
- ⑦類似サービスの有無

提出物④：提出物③を元に、「製品企画シート」を作成する。シートには、以下の4項目をできるだけ詳しく書くこと。

- ①AIの名称（自分オリジナルの名前に！）
- ②何系のAIを使うのか
- ③AIができること
- ④AIによって解決されること

① 1/13(木)

・3学期の授業スケジュール等について確認し、見通しを明確にした。特に、3学期は2学期までにインプットしたことを、次はアウトプットしていけるように、AIを使って問題を解決できるようなプランの企画立案を行っていきたい旨を説明した。



・その後、冬休みの課題である「AI製品企画シート」についての個人プレゼンテーションを順番に行った。また生徒たちは互いに他者評価を付ける形でそれぞれの発表を聞いた。

② 1/27(木)

・教員側でチーム分けを行い、5グループ編成にした。

・そのうえで、各チームで取り組む「解決したい社会問題・身近な問題」「それを解決するAI製品」を決める。上記のようなグループワークを行った。それらのアイデアは、アイデアシートに記入しながら概要をまとめていく。



・また、次回授業時までに関西学院大学工学部 已波弘佳教授に Classi でコメントを頂く環境を整え、オンライン上でも考えたアイデアのブラッシュアップをする。

③ 2/3(木)

・前回到引き続き、チームで取り組むAI製品について議論を行い、発表の準備を進めていく。教員は順次机間巡

視しながら、チームにアドバイスをを行った。課題解決までに一貫したストーリーがあるか、机上の空論になっていないかという点に留意しながら、アドバイスをを行った。また日波教授にもお越しいただき、生徒に直接アドバイスや相談していただいた。入試期間中の課題として、チームでの発表動画の作成・提出・相互評価を課した。

④ 2/17(木)

WWLC3 科目それぞれから「平和構築のための提言」というテーマで合計3つのプレゼンテーションを行った。審査員として外部講師をお招きし、1年間のまとめとなるプレゼンテーションを行った。AI活用のチームは選ばれることはなかったが、1年間の学びをしっかりと他教科の生徒に発表することができた。



⑤ 2/24(木)

・前週の代表発表の様子を受けて、仮に代表が自チームだったらどんな質疑応答になっただろうかをイメージして自ら質疑応答を挙げさせた。それを授業のメンバーに共有するために発表の形式を取った。また、今年度の1年間の学びの振り返りとして Classi アンケートを配信し、それに取り組む時間とした。

3. 活動の評価方法

ループリックについて、以下を使用した。

●冬休みの課題「AI 製品企画シート」評価ループリック

	提出物①について、十分な数のアイデア（付箋）適切にグルーピングされている。	提出物②について、十分な数のサービスアイデアが検討されている	提出物③のチャートについて、各観点について十分に検討・リサーチがされている	提出物④について、実現可能性も高く、オリジナリティのある製品企画シートが複数提出されている。
A	アイデアが30個以上検討されており、適切にグルーピングされている。	指示が守られた形で、十分な数のサービスアイデアが検討されている	各観点について、しっかりとイメージしながら検討することができており、疑似サービス等もしっかりとリサーチされている	提出された製品企画シートにおいて、 ・実現可能性が高い ・オリジナリティがある ・3つ提出されているのうち、3点とも十分評価できる
B	アイデアの数が十分ではない、またはグルーピングが甘い。	指示は守られている形であるが、サービスアイデアの数が十分ではない。	各観点について、しっかりとリサーチされているが、まだまだイメージができておらず受益者の設定や課題の解決への見通しが甘い部分が着られる。	提出された製品企画シートにおいて、 ・実現可能性が高い ・オリジナリティがある ・3つ提出されているのうち、3点のいずれかは十分評価できる
C	アイデアの数が十分ではない、かつグルーピングが甘い。	指示が守られておらず、チャートとして曖昧な状態である。	各観点について、しっかりとリサーチされておらず、チャート全体として考えが甘く、見通しが立っていない	提出された製品企画シートにおいて、 ・実現可能性が高い ・オリジナリティがある ・3つ提出されているのうち、3点のいずれもが十分評価できるレベルはない

●グループポスタープレゼンテーション「AI 製品企画」評価ループリック

	課題（困りごと）からその解決までの道筋がわかりやすく具体的かつ明確に示されているか。	設定した課題を解決した際のインパクトは、十分に大きいといえるか。	使用されているAIがただの理想の未来ではなく、既存のAIプログラムの組み合わせとして具体的に考えられているか	使用されているポスターがわかりやすく、効果的にプレゼンテーションに用いられているか	発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。
A	課題からその解決までの道筋が、非常に具体的かつ明確に説明されている	設定された課題が社会的にも大きな問題として認識されており、解決した際のインパクトも非常に大きい	使用されているAIについて、どのように既存のAIを組み合わせているのか明確に語られており、実現可能性も高い	ポスターが非常にわかりやすく作られており、プレゼンテーションの中でも効果的に使用され、説明内容の理解を助ける働きをしている	発表者の声量や視線からこのプレゼンテーションに対する熱意が感じられる。
B	課題からその解決までの道筋が語られてはいるが、具体的かつ明確とは言えず疑問が残る部分がある	設定された課題が社会的に大きな問題として十分に認識されておらず、解決した際のインパクトも弱い	使用されているAIについて、どのような既存のAIを組み合わせているのかは語られているが、それらをどのように組み合わせるのかわからない、実現可能性も高いとは言えない	ポスターはわかりやすく作られているが、効果的にプレゼンテーションで使用されているとは言えず、説明内容を補助しているとは言えない	発表者の声量や視線がこのプレゼンテーションに対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。
C	課題からその解決までの道筋に論理の飛躍等があり、不明な部分が多い	設定された課題が個人の域を出ておらず、解決した際のインパクトも非常に弱い	使用されているAIについて、どのような既存のAIを組み合わせたのか語られておらず、未来のマシンの域を出ていない。	ポスターにわかりにくい部分、もしくはは完成度の低い部分が残っている	情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。

●グループポスタープレゼンテーション「AI 製品企画」で気づいたこと評価ルーブリック

	今回のポスタープレゼンテーションにおいて、「今回のプレゼンテーションの準備を通して学んだこと」を具体的な事例や体験を含んで400字程度で書きなさい。
A	今回のプレゼンテーションの準備を通して学んだことが明確に書かれており、さらにそれが、どのような経験や気づきから学べたのかが論理的に説明されている。
B	今回のプレゼンテーションの準備を通して学んだことは書けているが、それが、どのような経験や気づきから学べたのかが具体的に書けていない。もしくは、それらの因果関係が論理的に書かれていない。
C	今回のプレゼンテーションの準備を通して学んだことを明確に書けていない。もしくは、文字数が著しく不足している。

- その他、プレゼンテーションについては生徒同士の相互評価を行い、生徒評価の高かった生徒には加点を行っている。

4. 検証

● 目標の達成度・課題

目標 1)3 学期は、冬休みの課題をスタートとして、学んできた AI をどう使うか。どのように利用するか 1 点にしぼって学習を進めてきた。その過程において、関西学院大学工学部の巳波弘佳教授にご支援いただいたことは非常に大きかった。ただ、AI を使うのではなく、実現可能なのか？既存の AI を組み合わせればそれができるのか？コスト的にそもそも AI を利用する意味はあるのか？といった様々な視点からの助言をいただき、生徒たちはかなり悩みながら最後のプレゼンテーションを作っていたことは、目標がよく達成された証だと思う。AI は万能ではなく、使わない方がいいこともあることを、AI を学ぶものだからこそまずは知ってほしい。一方、本来はそこから実際にその AI を作成し、検証するという段階に進むべきであるが、時間と費用とスキルの問題から達成はできなかった。

5. 今後改善すべき点について

- ・AI ができることを知り、社会問題を知り、総まとめとして社会問題解決のために AI 製品の開発のアイデアを 3 学期に取り組みさせたが、実際に AI 製品を作って使ってみて出てくる問題点や成功した点などを振り返れなかったところが改善すべき点だと思った。しかしながら実際のところ、週に 2 時間の授業内で AI を作る事が出来るまでにプログラミングスキルを習得することは至難であり、またその時間と費用も潤沢ではないため現状はその改善は難しいと考える。

科目	必須選択 ハンズオンラーニング	学年	2	単位	2	生徒人数 7名
活動の目標	1. 「平和」に関わる様々な社会的課題について、自分の見解を述べるようになる。 2. 「平和な世界」を「自分達が住み心地の良い世界」として捉えた際、「戦争の対岸にある平和な社会」と「不便の対岸にある平和な社会」とに分けることで、「戦争」と「エネルギー問題」について世界が抱える社会的課題を自分事として捉えようとする姿勢を養う。 3. 上記についての課題を解決する具体策を計画することができる。					
教材	自作プリント・学びの記録シート、iPad (Classi/ ロイロノート)・ビデオカメラ・マイク					
留意点	1. 生徒達が主体的に活動する場面をできるだけ多く作ることができるよう教員は留意する。 2. 生徒の活動に対する評価のフィードバックは、できるだけ活動後すぐに与えるよう教員は留意する。					

<スケジュール：> 授業時間：90分

※「戦争」を松隈、「エネルギー問題」を原田が主に指導し、授業回をそれぞれのトピックで分けて展開したため、トピックごとに以下スケジュールを記載する。

a) 「戦争」

第1フェーズ 「知る」 【課題の設定】 【情報の収集】 【整理・分析】 【まとめ・表現】	①4/14	・オリエンテーション 担当者、授業スケジュール、評価の紹介 ・「住み心地の良い世界」をテーマに「戦争」と「エネルギー問題」の2つの概念を抽出
	②4/21	・聖書の箇所より「謎」とどう向き合うか ・日本のミッションスクールについての講義、調べ学習のオリエンテーション
	④5/13	・鎮西学院の歴史を学ぶ
	⑥6/3	・福岡女学院の歴史を学ぶ
	⑧6/17	・梅光女学院の歴史を学ぶ
	⑨6/24	・2年必修選択学習報告会（Cross-Curriculum Meeting）への参加 ・Second International Meeting の準備
	⑩7/1	・各自で調べたミッションスクールの歴史の発表
	※8/8,9	・長崎フィールドワーク
第2フェーズ 「探る」 【課題の設定】 【情報の収集】 【整理・分析】	⑪9/9	・キング牧師の歩みを振り返り、阿波根昌鴻の生涯を学ぶ
	⑫9/16	・長崎フィールドワークの発表
	⑬11/11	・榎本恵先生の出前授業（オンライン）
	⑰11/18	・2年必修選択学習報告会（Cross-Curriculum Meeting）への参加
	⑱11/25	・「善いサマリア人のたとえ」から平和について考える
	⑳1/27	・被爆ピアノ（矢川光則さんの活動）について学ぶ
第3フェーズ 「共有する」 【課題の設定】 【情報の収集】 【整理・分析】 【まとめ・表現】	㉑2/3	・高校生平和大使とオンラインミーティング
	㉒2/17	・最終成果発表会に参加
	㉓2/24	・最終成果発表会の振り返り

b) 「エネルギー問題」

第1フェーズ 「知る」 【課題の設定】 【情報の収集】 【整理・分析】 【まとめ・表現】	①4/14	・オリエンテーション 担当者、授業スケジュール、評価の紹介 ・「住み心地の良い世界」をテーマに「戦争」と「エネルギー問題」の2つの概念を抽出
	③5/6	・「便利」の概念の確認（「不可能を可能に」・「現状をより良く」） ・「便利」を支えるエネルギー問題に焦点を当てる ・エネルギーミックスを紹介し、各自でエネルギーミックスを模索
第2フェーズ 「探る」 【課題の設定】 【情報の収集】 【整理・分析】 【まとめ・表現】	⑤5/27	・各発電方法についての調べ学習
	⑦6/10	・「原子力」をキーワードに「問い」の形でマインドマップを作成
	⑨6/24	・2年必修選択学習報告会（Cross-Curriculum Meeting）への参加 ・Second International Meetingの準備
	⑬9/30	・2学期の授業計画の確認 ・マインドマップの精査
	⑭10/7	・マインドマップの精査、各自調べ学習 ・関西原子力懇談会による出前授業のための準備
	⑮10/21	・関西原子力懇談会による出前授業
	⑰11/18	・2年必修選択学習報告会（Cross-Curriculum Meeting）への参加 ・関西原子力懇談会による出前授業（質疑応答）
	⑱11/25	・マインドマップと出前授業を総括する2学期最終課題の説明
	⑲1/13	・野中先生の出前授業（オンライン）
	⑳2/17	・最終成果発表会に参加
㉓2/24	・最終成果発表会の振り返り	

<各フェーズの 1.目標 2.具体的活動 3.活動の評価方法 4.検証 5.今後改善すべき点について>

※スケジュールと同様に「戦争」と「エネルギー問題」のトピックごとに以下記載することとする。

a. 戦争

第1フェーズ：「知る」

1. このフェーズでの目標

- ・「平和」について学ぶ方法を知る。
- ・戦時中について、生き証人の証言と文献から、当時、何があったのかを客観的に知る。
- ・「平和を実現した人」の取り組みを知る。
- ・戦時中を感じるものに触れることから、戦争のリアルさを知る。

2. 具体的な活動

②4/21 聖書を通して平和を学ぶ

- ・「平和」について学ぶ方法を知る。聖書「エマオの途上」、「善いサマリア人」から学んだ。

④5/13, ⑥6/3, ⑧6/17, ⑨6/24 ミッションスクールの戦争の歴史について

- ・戦時中について、生き証人の証言と文献から、当時、何があったのかを客観的に知る。鎮西学院、福岡女学院、梅光女学院の歴史を生き証人と文献から学んだ。

⑩7/1 ミッションスクールの戦争の歴史の発表

- ・生徒たちがそれぞれ関係や興味のあるミッションスクールを選び発表した。啓明学院、同志社、日本聾話学校、大阪YMCA、青山学院、神戸女学院、立命館（ミッションスクールとの比較・平和ミュージアムがあるという意味で）からの発表になった。



※8/8,9 長崎フィールドワーク

- ・8日に長崎市を訪れ、平和公園～山里小学校～如己堂/永井隆記念館～浦上天主堂～原爆落下中心地などを見学。

- 8:15 神戸空港集合
- 9:15 神戸空港発
- 10:25 長崎空港着
- 12:30 昼食 みらい長崎ココウォーク
- 14:00 平和公園～山里小学校～如己堂/
永井隆記念館～浦上天主堂～
原爆落下中心地などを見学
- 16:00 原爆資料館を見学
- 19:00 諫早駅へ ホテル着



・9日に鎮西学院を訪問し、平和記念礼拝・式典に参列。鎮西学院ハイワイ部生徒との交流。【資料：平和①】

午前中 鎮西学院の平和記念礼拝・式典に参列
 午後 鎮西学院の生徒との交流、学び
 鎮西学院のバスで長崎空港へ

17：25 長崎空港発

18：30 神戸空港着 解散

- ・「平和を実現した人」の取り組みを知る。長崎県高校生平和大使・兵庫県高校生平和大使・平和サポーターと交流した。阿波根昌鴻・榎本恵（阿波根昌鴻の弟子）・矢川光則の取り組みを学んだ。
- ・戦時中を感じるものに触れることから、戦争のリアルさを知る。当時の映像、写真、レコードなどから戦争のリアルさを学んだ。



3. 活動の評価方法

- ・全て学びの記録を提出させ、評価した。

	知識/技術	意見/考察
A	自分の観点を持って自分なりに内容を処理、記述している。 情報が整理されている。	知識と知識/意見/考察が有機的につながる記述がみられる。 深い洞察とクリエイティブな広がりがある。
B	内容がそのまま羅列されている。ある程度の情報のまとまりは見られるものの、あまり整理されていない。	多くが短絡的・表層的な感想や意見、疑問にとどまっている。
C	情報の量/質が不十分である。	感想や意見、疑問の量/質が不十分である。

4. 検証

- ・「平和」について学ぶ方法を知る。
 ⇒聖書から主に、平和を実現する方法を模索する忍耐力をもつこと、自分のスケールに当てはめて分かろうとしないこと（神のスケールで考えること）、歴史を振り返ることの3点を繰り返し伝えてきた。生徒たちは、簡単な、一面的な、答えを出そうとはせず、学びを次年度にもち越していこうと考えられている。
- ・戦時中について、生き証人の証言と文献から、当時、何があったのかを客観的に知る。
 ⇒生徒たちの戦争の知識は映画・小説・漫画が主である。それはどうしても主観的なものだ。生き証人の証言と文献に当たることで、当時、何があったのかを客観的に知ることができた。
- ・「平和を実現した人」の取り組みを知る。
 ⇒あえてマイナーな人物に焦点を当てた。歴史上の偉人ではなく、一般的な日本人の取り組みを学ぶことで、「私にもできること」があるという意識を強くもてるようになった。
- ・戦時中を感じるものに触れることから、戦争のリアルさを知る。
 ⇒生徒たちの祖父母が戦争体験者ではない世代になってきている。当時の映像、写真、レコードなどからは、戦争のリアルさを感じられた。特に白黒写真のカラー化は大きな衝撃だったようだ。

5. 今後改善すべき点について

3つの改善点を考えている。①文献に当たらせるといっても、時間的な制約で複数の文献を比べることができなかった。次年度は長期休みを有効に使えるようにしたい。②コロナ禍で思うようにフィールドワークに出かけられなかった。次年度は積極的に出かけた。③「原爆」(戦争)と「原発」(便利)の両者を見つめながらの授業は大変良かった面と、やはり時間的な制約で知識の注入が両者中途半端になってしまったことは否めない。次年度は戦争の部分に特化して行いたい。

第2フェーズ:「探る」

1. このフェーズでの目標

- ・安易にネットから文献を探るのではなく、書籍から文献を探る。(ニュースソースの出どころに注意する。)
- ・プレゼンテーションを繰り返し行うことによって、発表する力をつける。
- ・質疑応答の力をつける。
- ・自分の言葉で「平和」を語れるようになる。
- ・現段階における「私にとっての平和を実現する方法」をまとめる。

2. 具体的な活動

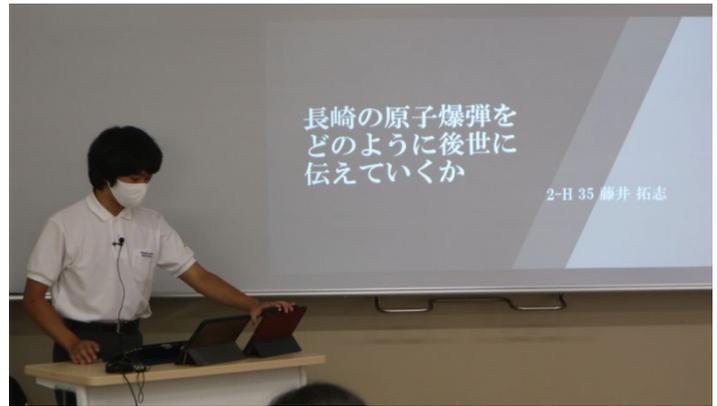
⑪9/9, ⑫11/11, ⑬11/18, ⑭11/25, ⑮1/27, ⑯2/3

- ・安易にネットから文献を探るのではなく、書籍から文献を探る。(ニュースソースの出どころに注意する。)
課題に対して、関西学院大学図書館の協力を得て、文献を探した。
- ・プレゼンテーションを繰り返し行うことによって、発表する力をつける。「戦前、戦中、戦後のミッションスクールについて発表する」、「長崎研修旅行の発表」、「私にとっての平和を実現する方法」という課題についてプレゼンテーションをした。
- ・質疑応答の力をつける。出前授業などでは基本1時間講演、1時間質疑応答という形で進めた。事前に調べ学習をして、質問事項を用意、また質問事項の順番などについても考えた。
- ・自分の言葉で「平和」を語れるようになる。8月9日、鎮西学院を訪問し、平和記念礼拝・式典に参列、鎮西学院のハイワイ部の生徒との交流した際、また長崎県高校生平和大使・兵庫県高校生平和大使と交流した際、自分の言葉で平和を語る高校生の存在に刺激を受けた。
- ・現段階における「私にとっての平和を実現する方法」をまとめる。それぞれが、1年間の学びを経て、具体的な提案をした。



⑫9/16 長崎フィールドワークの発表 【資料：平和②】

- ・1人7分で8/8,9の長崎フィールドワークの発表をした。特に長崎では、8/9午前11時2分をはじめ、8/6、8/15にサイレンが響き渡ることにより生徒は衝撃を受けたようだ。長崎の生徒が原爆について発信しているように、自分たちも阪神淡路大震災について発信する必要があるのではないか、それが平和交流ではないかという意見も出された。



3. 活動の評価方法

- ・学びの記録を提出させ、以下のルーブリックを用いて評価した。

	知識/技術	意見/考察
A	自分の観点を持って自分なりに内容を処理、記述している。 情報が整理されている。	知識と知識/意見/考察が有機的につながる記述がみられる。 深い洞察とクリエイティブな広がりがある。
B	内容がそのまま羅列されている。ある程度の情報のまとまりは見られるものの、あまり整理されていない。	多くが短絡的・表層的な感想や意見、疑問にとどまっている。
C	情報の量/質が不十分である。	感想や意見、疑問の量/質が不十分である。

- ・⑩7/1 ミッションスクールの戦争の歴史の発表について、以下のルーブリックを用いて評価した。

	情報	視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	時間
A	課題で必要とされた情報を全て述べている。	スライドの構成が導入、展開、結論と全体を通して論理的にまとめられており、文字のフォントやグラフ・図が効果的に用いられている。	発表者の声量や視線からこの課題に対する熱意が感じられる。	設定された時間の+-60秒で発表を行った。
B	課題で必要とされた情報がある程度述べている。	スライドの構成において結論に向けての論理的な展開が見えづらく、グラフ・図の効果も十分に活かされていない。	発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。	設定された時間の+-60秒で発表を行うことが出来なかった。
C	課題で必要とされた情報の言及が不十分である。	スライドに情報が羅列されているだけで、結論とそれ以外の部分のスライドとの関連性が見えない。	情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。	

- ・⑫9/16 長崎フィールドワークの発表について、以下のループリックを用いて評価した。

	情報	情報②【課題専用】	視覚資料に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	発表の仕方に関してプレゼンに適した工夫がなされているか。	時間
A	課題で必要とされた情報を全て述べている。	「平和を実現する方法」について、自分の考えを自分の言葉で具体的に述べている。	スライドの構成が導入、展開、結論と全体を通して論理的にまとめられており、文字のフォントやグラフ・図が効果的に用いられている。	発表者の声量や視線からこの課題に対する熱意が感じられる。	設定された時間の+-60秒で発表を行った。
B	課題で必要とされた情報をある程度述べている。	「平和を実現する方法」について、自分の考えを自分の言葉である程度述べている。	スライドの構成において結論に向けての論理的な展開が見えづらく、グラフ・図の効果も十分に活かされているとは言えない。	発表者の声量や視線がこの課題に対する熱意を十分に感じさせるものとは言えない。	設定された時間の+-60秒で発表を行うことが出来なかった。
C	課題で必要とされた情報の言及が不十分である。	「平和を実現する方法」について、自分の考えを述べられていない。	スライドに情報が羅列されているだけで、結論とそれ以外の部分のスライドとの関連性が見えない。	情報は伝達できているが発表者の声量や視線に自信が感じられない。	

4. 検証

- ・安易にネットから文献を探るのではなく、書籍から文献を探る。(ニュースソースの出どころに注意する。)
 - ⇒タブレットをもっていることで、安易に検索をかけてしまう。図書館に行くことを面倒なことと感じてしまう。その意識が多少変化した。
- ・プレゼンテーションを繰り返し行うことによって、発表する力をつける。
 - ⇒プレゼンテーションを繰り返し行うことによって、確実に成長の跡が見える。慣れること、友人の良いところを見ること、教師のアドバイスなどが良い作用をおこしている。
- ・質疑応答の力をつける。
 - ⇒興味で質問するのではなく、この質疑応答の時間をどのようにコーディネートするかという視点が生まれた。個人ではなくチームで質疑応答ができるようになった。
- ・自分の言葉で「平和」を語れるようになる。
 - ⇒自分の言葉で平和を語る高校生の存在に刺激を受けて、「自分の言葉」ということを常に意識できるようになった。
- ・現段階における「私にとっての平和を実現する方法」をまとめる。
 - ⇒具体的な「私にとっての平和を実現する方法」が上げられた。またそれを他校の生徒（兵庫県高校生平和大使・平和サポーター）に提案することによって、ブラッシュアップができた。

5. 今後改善すべき点について

3つの改善点を考えている。①受講者が7人であったため、プレゼンテーションも質疑応答も十分に時間が取れた。次年度からは20名弱が受講する予定なので、時間配分の課題がある。②7人の受講者が仲良くなってしまい、後半、質疑応答に切れがなくなってきた。仲間の輪を壊したくないことからくるものだ。やはり一定の人数(15名程度か)は必要である。③探究型の授業なので、講師や団体と生徒自身が交渉することが望ましいが、大人からでないとい取り合ってくれないところが多い。(特に学校)どこまで教師が介入するかという課題がある。

b. エネルギー

第1フェーズ：「知る」

1. このフェーズでの目標

- ・SDGsとの関連を意識しつつ、「住み心地の良い世界」をテーマに、「戦争の対義となる良い世界」と「便利と同義となる良い世界」の2つの世界を見出す。
- ・「便利」とはどのようなことか、自分の言葉で定義することを試みる。また、その中で便利には2つの側面（①不可能を可能とすること ②現状をより良くすること）があることに気がつく。
- ・前述のどちらの側面についても、「便利」を形にするためには「エネルギー」が必要であることに気がつく。
- ・「エネルギー」の確保とは、そのまま「エネルギー問題」であることを捕捉し、SDGsとの関連を意識しつつ、世界中がそれぞれの国や地域に根差したエネルギーミックスを模索していることを知る。
- ・現在の知識をもって、各自が理想とするエネルギーミックスについて考える。

2. 具体的な活動

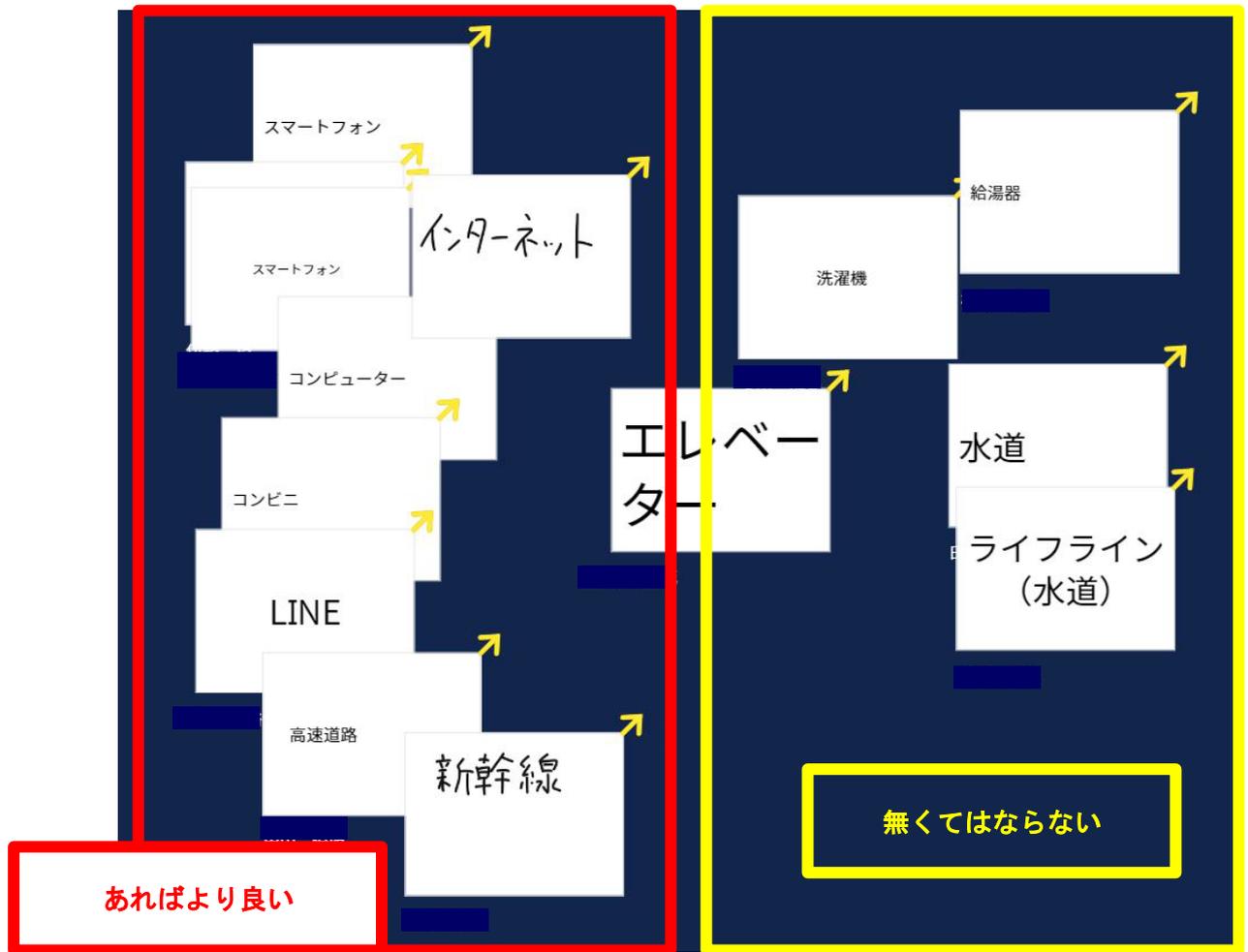
①4/14, ②5/6 「平和」の定義作り

- ・「住み心地の良い世界」をキーワードに思い浮かぶ「世界」を、「～世界」に続く形で列挙し、グルーピングすることで、自分達の「住み心地の良い世界」のイメージにどんな要素があるかを抽出する。



②5/6 「便利」の概念の整理及び共有

- ・「便利」をキーワードに思い浮かぶ事柄について、「名詞」で列挙し、グルーピングすることで、自分達の「便利」のイメージにどんな要素があるかを抽出する。



- ・全てに共通する事柄として、「エネルギー」を必要とすることに気がつき、具体的な製品等を列挙する。
- ・エネルギー問題がSDGsでどのように扱われているかを考え、世界中で様々なエネルギー問題を抱えていることについて、知っていることを発表する。
- ・各国がエネルギーを確保するために構成している様々な電源の割合を、エネルギーミックス（電源構成）と呼ぶことを教示し、関西電力のHPを参考に日本（関西）の電源構成を確認する。【資料：便利①】
- ・現在の自分の知識をもって、「兵庫県に新たに提案するエネルギーミックス」を考案し、発表資料を作成する。
- ・それぞれが考えたエネルギーミックスを発表、共有する。

3. 活動の評価方法

- ・ 学びの記録を提出させ、以下のルーブリックを用いて評価した。

	知識/技術	意見/考察
A	自分の観点を持って自分なりに内容を処理、記述している。 情報が整理されている。	知識と知識/意見/考察が有機的につながる記述がみられる。 深い洞察とクリエイティブな広がりがある。
B	内容がそのまま羅列されている。ある程度の情報のまとまりは見られるものの、あまり整理されていない。	多くが短絡的・表層的な感想や意見、疑問にとどまっている。
C	情報の量/質が不十分である。	感想や意見、疑問の量/質が不十分である。

4. 検証

- ・ 「戦争の対義となる良い世界」と「便利と同義となる良い世界」の2つの世界を見出す。
⇒ 「平和」の概念に対して、「戦争」との対義を想像することは容易であるが、「便利」との同義にたどりつくことは難しい。「平和」という言葉を「良い世界」と置き換えることで、広義な抽象概念である「平和」を自分たちの実生活に重ねることを意識した。「良い世界」と置き換えてからは、「スマホ」、「インターネット」といった ICT 関係のキーワードや、「エレベーター」をはじめとするバリアフリー関係のキーワードが列挙され、「便利」の同義としての概念に結びつけるのに役立った。
- ・ 「便利」を定義し、2つの側面（①不可能を可能とすること ②現状をより良くすること）に気がつく。
⇒ 「エレベーター」を例に挙げた生徒が、自然と健常者と障がい者の利用に焦点を当てて見事に説明することができた。具体から具体を派生させることについては、創造的で柔軟な発言が多く見られた。
- ・ 「便利」を形にするためには「エネルギー」が必要であることに気がつく。
⇒ 列挙された例のほとんどが「電気」を必要とするものであったため、生徒の発言によって容易に理解が進んだ。
- ・ 世界中の国や地域のエネルギーミックスを知る。
⇒ 「エネルギーミックス（電源構成）」というキーワードを提示して、様々な発電方法について既に知っていることを発表させた。生徒によって知識量に差があることがこの後の展開の面白さでもあったため、導入として必要な情報をこちらから引き出しつつも、この場では共有させすぎない匙加減が必要であった。
- ・ 各自が理想とするエネルギーミックスについて考える。
⇒ iPad で調べながら資料を作成する最初の課題となった。個人差はあるものの、iPad による種々のアプリケーションの操作、情報を検索する力に関して、大きく遅れを取る生徒は見られなかった。しかし、発表については、個人の力量の差が大きく見られ、プレゼンテーション能力について多くの課題を感じた。

5. 今後改善すべき点について

- ・ 7名という小規模ゆえに、全員が意見を言う場面が多くみられる。しかし一方で、全体で1つの議論を積み重ねることに失敗する場面が散見された。単発のアイデアを列挙することと、手前の意見に対して建設的に議論を重ねることの区別を指導する必要性が見られた。自分の思いつきを発表することや、皆で沢山の単発の意見が出ることにに対して、生徒達が安易に満足度を感じてしまいやすいことに注意が必要であると感じた。
- ・ 抽象から具体、具体から抽象、抽象から抽象、具体から具体の4つの作業について、抽象から具体、具体から具体を導く作業は得意であるものの、具体から抽象、抽象から抽象の作業は極めて苦手である印象を受けた。些細な問いかけから課題など、それぞれの作業がどのパターンのものであるのか、丁寧に確認をしながら授業を進める必要性を感じた。